○先行文　經に云く、若し此を作さんと欲せば、我が前に於て此の葉衣陀羅尼を誦し卅萬遍滿し已て、然して後に作法するに、應驗せざるなしと文り。

○鎮護文　宗叡云く　葉衣鎮國と文り　法に云く　國界を護持し苦難を拔濟すと文り。又た云く　亦た能く水火の災難を消除すと文り。　又た云く　亦た能く方隅地界を鎮護すと文り。

裏書　葉衣を披いて鎮す慶忘せざるが爲めに暫く記し、早く火中に入るべし。

一、辨備すべき事　先づ兼日に支度を送り、鬼宿の直日を擇んで本尊の像を圖繪せしむべし、具さには經文を見るべし。台圖に依れば肉色　師云く、若し鬼宿を得ずんば當日之を圖繪すべし。

次に石四枚並に木札二十四枚を作り、各別に二十八大藥叉將の眞言を書くべし、牛黃を用ふ、上に東方第一・節二を書く、但し是れは黑なり。　件の札は布若しは紙を以て之を裏むべし、四枚の石には於ては銅の箇に入るべし。

一、壇場の事　大壇常の如し息災に依て之を修す。別に護摩壇を用ひよ但し用否は人心にあり、(朱)先師云く、別に護摩壇を用ふ。小壇內八方を巡りて兩二重に二十八大藥叉の札並に石を立て、而して各位に白檀香を塗り供物に備ふべし但し中臺料、殊に之を增加すべし。行法の間に多く口傳あり。發遣、之を用意すべし

一、行法の事　七箇日に限るなり、但し本尊並に札等は開眼供養して用意あるべし、大阿闍梨正念誦畢て念珠を摺るの時、小壇師、座を立ちて之に寄る。但し初夜一時なり

一、正鎮の事　第五日或は第七日初夜に之を用ふ先づ第七日に之を用ひしむ若し第五日の鎮時は、小壇は札等を取ると雖、猶ほ七箇日に滿たざる間同じく之を供するなり、若し第七日の初夜に鎮あらば、供師小壇に寄り結願作法了りて本座に還着して後、正鎮あるなり、護摩前後の事は二說あるなり但し先師は鎮する後護摩なり。散念誦了りて八口伴僧座を起ちて幕の內に入り、更に各の方角に立ちて三部被甲す等、次に各の八方の札を持せしめ一人東方、四ゝ方已上、四角に各の一人、上方の札四枚は阿闍梨持すなり。　各の吒枳王の眞言二十一遍を誦し、壇を遶ること三遍小壇を除くなり　各の本方に廻り立て阿闍梨禮盤の前に立つ但し阿闍梨行道せざることあり、先師(ニ)照なり　之を持念し次に解法せしめて伴僧高足に昇りて、天井上の桁に於て打ち付けしめ了る高足支度なし、用意あるべし　次に小壇師自分の札を打ち了て後、四箇の石を取て道場の外に出で、承仕並に人夫等を相ひ具し、卽ち鋤・鎚等を四方の城廓の邊に持たしめ、始めて東方より次第に穴を掘りて之を埋ましめよ、有が說かく三部等、神を(三)敬發す淨土反上に石を置く。金剛輪壇所に歸入し本座に

(一) 照　一本に然の字に作る。

(二) 敬　驚か。

着いて後、卽ち大阿闍梨後供養するなり、鎭する間大阿闍梨座を動ぜず、持念するなり。

一、結願の事　第八日の日中の時、結願するなり、但し早旦なり　本尊の像を卷いて細きさ(一)櫃に納め、中心の梁(ウツバリ)の上に安置し了て、天井を本の如く塞いで之を退出す番匠召儲すべきなり。

○○大勢至

○阿里也摩訶薩他麼波羅波多(アリヤマカサタマハラハタ)。持輪金剛又は寂留明菩薩と名く　○大慈大悲得大勢　蓮花部中諸聖衆

○(二)索(サク)　○未敷蓮花

(三)壇中に蓮花あり、花臺上に月輪あり、月輪の中に索(サク)字あり、變じて未敷蓮花となる、蓮花變じて大勢至菩薩となる、身相肉色にして相好圓滿す、左の手に蓮花を持し、右の手は胸に當て、地・水・火の三指を屈して赤蓮花に坐し、眷屬圍繞す。

○印虛合して未敷蓮花の如くす　(朱)火指を少しく開け、或は說く大指を少しく開け　○歸命、三髯髯索(サムサム サク)、莎哥　○正念誦大本尊、上の言　○又たの印前の印言　○散念誦　佛眼　大日　阿彌陀　本尊　馬頭

一字

(一)櫃　櫃か。

(二)索　原本梵字なるも今之を略す

(三)壇中云云　道場觀。

(四)原本に梵字あり、今は略す。

國譯澤見抄第三　終

國譯澤見抄第四

○普賢延命　○五祕密　○五大虛空藏　○虛空藏　○普賢　○八字文殊　○五字文
殊　○塗物　○大隨求　○地藏　○轉法輪

○普賢延命

○(一)縛曰羅瑜勢冐地薩怛縛　眞實金剛　○(二)三世常住延命尊　金剛部中諸聖衆
本尊聖者　三世常住　普賢延命　金剛部中　諸大薩埵。○欲　○甲冑
(三)須彌山の頂に𑖭字あり、變じて七寶の宮殿となる、其の中に唵字あり變じて八葉の蓮花となる、花臺の上に四の誐字あり四大象となる、象の上に紇哩字あり、千葉の大寶花王の座となる、其の上に阿字あり圓淨の月輪となる、輪の上に紇哩字あり八葉の蓮となる、蓮上に欲字あり變じて金剛甲冑となる、而して轉じて金剛壽命菩薩身となる、五佛の冠を着け廿臂を具足し諸印を操持す、身は黃金色にして諸相を具す、四大天王等圍繞す。

(一)縛曰羅云云　原本梵字なるも金剛壽命陀羅尼法に由りて對譯文字とせり。
(二)三世云云　勸請。
(三)須彌山云云　道場觀。

○鈴　○次に大日　○本尊二手金剛拳にして頭指を以て右、左を押し相鉤して頂上に安す、又(一)唵嚩曰羅、二合喻灑、娑嚩二合賀(朱)師說に腕を合せ攀ぐるなりと　○四天王惣印呪內縛して(二)合風火を直く立てよ　唵漸婆羅奢嚩多羅耶莎哥　○八供四攝等　○本尊加持前の印言　○正念誦大日本尊上の言　○又の印言外五
祕となす、眞言は上の如し　○散念誦　佛眼　大日金　本尊　執金剛台の如し　歸命敕戰拏摩訶嚧灑拏吽　八字　三世數　四天惣　一字
○護摩　○本尊段召遣、外五印言常の如し、芥子言同なり、但し發遣の時象師の句を除き蘇車々々を加ふるなり。　例するに百八の乳木(三)骨婁草八枚之を燒く或は廿一枚、眞言は上に同じ、朱)烏爪の根。祕となす　乳木長さ十(四)枚カヂクハ　芥子本說稷米の粉を蘇蜜に和し、之を丸め大豆の如くす。師說直米黃色タチナシに染めよ　想へ本尊の毛孔より甲冑雲海を流出して、盡虛空遍法界の諸佛聖衆を供養するに、光明所至の處に一切衆生短命の業を離れて長壽を增益し、色力を充滿す云云　此の法は月の一日、八日、十五日に修すべし云云。　○後火天段　四天王に之を供す(朱)東、地利、刀、持國。南、尾、釵、增長。西、尾、三戟、廣目。北、吠、捧、多聞。
○讃先づ四智、次に金剛薩埵但し大法の時なり。　○禮佛の句　南無延命菩薩三反　○後加持眞言は常の如し、又た或は說く降三世に之を修すべし。　○三世常住　延命薩埵　諸執金剛　四大天王。此の法、月の一日、八日、十五日

(一)𑖭本梵字、對譯文字は金剛壽命陀羅尼による。
(二)合　一本に各の字、
(三)木の下、一本に了の字あり。
(四)枚　一本に指に作る。

○堂莊嚴の事行者は東に向へよ　○本尊御等身一面二十臂像、四大白象に乘じ、像の頂上に四天王坐す、前は西方天、後は東方天、右は北方天、左は南方天　大壇上に天蓋を張り、蓋の四角に幡各の二流を懸く合して八流、黃色、蓋の色之に同じ。　○七層輪燈高さ七八尺許り、層ごとに七燈を燃し、晝夜斷せず。(朱)本尊前に立て大壇之を後にす。　○經机廿一前御經廿一卷卷列五卷　小燈臺二十一本放生毎日四十九頭(朱)但し經机燈臺等は伴僧の數に依るなり。　○護摩壇本說黃土を以て方形に塗り、壇緣に甲冑の形を畫けよ。長承二年押小路殿に於て行せらるゝ時上下番なし、經机廿前　○聖天　○十二天常の如し　○大阿闍梨毎時平袈裟之を著す、(朱)本說は三七の尋行比丘を請すと文り　○伴僧二十口開白結願許り之を著す或は上下番なし。但し上下番饗膳を用ふる孔雀經法の如し、圖は下にあり。　○伴僧轉經毎日一千卷本說は四十九卷なり。　○念誦毎日三十萬反口別こ時五千反又た說く十一萬反

此の法は金剛壽命經法なり。　胎藏大安樂不空身是れなり、金剛三世尊と名くるなり。

○延命と普賢延命と同異の事　師云く、延命を普賢延命と名くるなり延命即ち金剛壽埵なり。

金剛智三藏曰く、金剛壽命薩埵の智身と言ふは、五智聚集して大樂金剛薩埵となる、四波羅蜜十六大菩薩を以て二十臂となし、五分法身を以て寶冠と爲し、內の四供養而も禪悅となし、外の四供養は法喜となし、四攝の方便は三世諸佛の毛孔となし、額已上は過去の千佛、心已上は現在の千佛、心已下は未來千佛、此の號を以て三世常住金剛壽命薩埵智身となす云云。

二臂の菩薩、一身三頭の白象に乘ず普賢延命陀羅尼經說　廿臂像三箇の白象に乘ず。經說此の一樣なり　二十臂像四箇の白象に乘ず、金剛智口決乃至貞觀寺の傳なり。天台を傳へざるか

裏書に云く、　○延命法　○二臂像象に乘ぜざる時なり。　○欲ヨク　或は噁(朱)師說なり　○五古(朱)大御室御傳

壇上に阿字あり寶蓮花座となる、其の上に噁字あり五古金剛となる、轉じて延命菩薩となる、五佛の寶冠を着す、右の手に五股杵、左の手に金剛鈴を持す、身色黃金にして相好圓滿す、四大天王翼從シヨクジウし侍衞ジす云云。

○印外五　(一)唵縛曰羅二合喻灑、娑嚩二合賀引　眞言は上に同じ　○散念誦　佛　大

○正念誦大日本尊　○又の印二手拳に作し進・力・相鈎す

本　八　三世　四天　一字

○護摩　增益　或は息災　○本尊壇外五股、之を用ふ　○後火四天　四天王之を供す、　○總印言常の如し

○讃四智　發遣、喩師ユシの句を除いて只だ金剛解脫(二)名を用ふるなり。　○後加持　眞言常の如し　伴僧同じ

○延命法　問ふ、此の法を修する何を以て本尊とするや。　答ふ、大辨正廣智不空なり三藏の所譯、金剛壽命陀羅尼經法に云く、金剛降三世尊像を安置す、南天竺國三藏金剛智、沙門不空と金剛壽命陀羅尼念誦法を譯して云く、一淨室を東邊に治め金剛壽命菩薩像を安すに上故に知んぬ兩說あり。　問ふ、何れを以て好しとするや。答

(一)時一本に毎時に作る。

(一)原本梵字、對譯文字は金剛壽命陀羅尼法による。

(二)名或はいふ明又は句の字か。

(一)評に作る。一本に許

(二)原本梵字、對譯文字は花藏院集大樂不空身眞言より拔萃す。

(三)須彌山云云道場觀。

ふ、隨一之を用ふべし(一)評定すべからず、抑〻延命の儀宜しき歟(朱)已上裏書なり。

○五祕密

○(二)嚩曰羅二合薩怛嚩二合　○眞如金剛　○金剛薩埵五祕密　四種明妃諸菩薩

○行法息災に付く金剛界の五尊之を觀ずべし。　○ろ　○五古

三愛　鑁摩竭幢　四慢　斛鈴

唵　五字各別なりと雖、本誓一なるが故に、一の五古となるなり、之を以て祕とす。

二觸　吽　抱印　一弱　欲　弓矢

(三)須彌山の上に唵字あり寶樓閣となる、其の中に曼荼羅あり、中央の月輪の中に唵字あり、金剛薩埵となる、金剛慢印に住す、前に麼字あり欲金剛の形となる、服みな赤なり、金剛弓箭の印に住せり、右に訶字あり計里計羅金剛となる、白色にして金剛拳を以て臂を交へ抱印に住す、後に蘇字あり愛金剛の形となる、服皆な青なり、左臂を竪てゝ摩竭幢を執れり、右の拳を以て其の肘を承く、左に佉字あり慢金剛の形となる、服皆な黄なり、二の金剛拳を以て各の膀に安し、頭を左に向け少しく俛る、東南に縛字あり香菩薩となる、西南に曰羅字あり花菩薩となる、西北に薩字あり燈菩薩となる、東北に覩鑁字あり塗菩薩となる、四方に弱吽鑁斛字あり四攝菩薩となる、四隅に蘇羅多薩怛縛字あり、嬉慢歌舞菩薩となる、是の如く觀じ了て七處を加持せよ。

○鈴　○次に大日　○次に五尊等なり。

○先づ金剛薩埵大智印　二羽各の金剛拳にして左の胯に置き、右手は杵を抽擲する勢にして心上に置く　唵摩訶素佉縛曰羅薩怛縛

弱吽鑁斛素羅多薩怛鑁。

○次に慾金剛印　二金剛拳にして左の羽に弓を執ると想へ右の羽は箭を持し射る如き勢にせよ。　薩縛弩羅誐素佉薩怛摩曩娑。

○次に計里計羅印　前印に准じ二拳交へて胸を抱け　薩怛鑁縛曰羅薩怛縛跋羅莫素羅多。

○次に愛金剛印　二手金剛拳にして左拳は右肘を承け、右臂を竪てゝ憧の如き勢にせよ。　薩縛冥摩訶素誐涅哩住製野諾

○次に金剛慢印　二拳各の胯に安し左に向へ少しく傾け禮するが如き勢にせよ。　跋囉悉地也左擺虞鉢羅曩多

○次に八供四攝等　○本尊加持　師說五古　唵摩訶素佉莎賀　○正念誦　大日本尊　唵縛曰羅薩怛縛嚩

○五祕密三昧耶印　金剛縛に作りて忍・願を屈して掌中に入れ、相合して(一)前の如くし禪・智・檀・惠各の相拄へて獨股金剛杵の如くせよ。　索囉多薩怛梵三合

○散念誦　佛　大金　本十七字　四尊　八字　三世　一字

○護摩　○本尊五尊供、召遣、五古、十七字、芥子、六字言上の如し　○後火降三に之を供す、作法は常の如し。　○讃金剛サタ　○後加

(一)前或はいふ節の字か。

持　（朱）裏に云く師口に云く　五祕普賢に例す。

或は云ふ、　愛染王を部主となす　深祕なり。　大眞言印之を用ふ　小野說なり

◎五大虛空藏私に云く如意金剛　三十七尊諸聖衆。○種子・三形五佛の如し、或は怛洛、口授に云く三形は寶と。○寶珠南方の寶珠なり。

○能滿諸願虛空藏

（一）觀ぜよ己身の前に於て無盡の乳海あり、海の中に大蓮花王を出世す、金剛を莖となす、量法界に同じ、上に七寶（二）珠妙の樓閣あり、花香雲海伎樂歌讃あつて摩尼を以て燈とせり、樓閣の中に大圓明月輪あり自身の量に等し、一の圓明の中に於て更に分ちて五となす、中の圓明に於て鑁字あり、法界虛空藏となる、白色にして左の手に鈎を執り右の手に寶を持す、前の圓明の中に吽字あり金剛虛空藏となす、黃色にして左に鈎を持し右は寶金剛なり、右の圓明の中の怛洛字寶光虛空藏となる、青色にして左は鈎、右に三辨寶を持す、大光明を放てり、後の圓明の中に於て紇哩字あり、蓮花虛空藏となる、赤色にして左は鈎、右には大紅蓮花を持す、左圓明の中に噁字あり、業用虛空藏となる、黑紫色にして左は鈎、右は寶羯磨、其の菩薩の衣（三）眼・首冠・瓔珞皆な本色に依る、各の結跏趺坐して一曼荼羅の內の大威德の尊、圍繞恭敬す。

今此の五大虛空藏菩薩は亦た是れ明星天子の本身なるが故に、明星圓明の中に處し七曜・九執・二十八宿を以て眷屬とせり、此の故に亦た金剛吉祥破七曜等の三眞言印を用ふ、此の五大虛空藏は大日三摩耶の印、五佛の種子なるが故に、須らく先づ五佛となり、次に轉じて五菩薩となり、法界圓明を轉じて明星の圓明となる、明星の圓明より法界圓明に會へり、自餘の觀法具さには經說の如し。

○鈴　○次に五菩薩印言各印の末に寶珠ありと想へ。

（一）唵縛曰羅鑁　○東方進力を改めて三摩の如くせよ、是を金剛虛空藏と名く。　唵縛曰羅吽　○南方進・力・を改めて寶形の如くせよ、是を寶光虛空藏と名く。　唵縛曰羅囉怛曩　○西方進・力を屈して蓮花の如くせよ、是を蓮花虛空藏と名く。　唵縛曰羅達羅麼紇哩　○北方戒・方・進・力・を互に相叉へよ、是を業用虛空藏と名く。不空成就印なり　唵縛曰羅迦羅麼噁

○金剛吉祥印二羽金剛掌にして檀・惠・を以て內に相鈎して戒・方・雙べ屈して掌に入れ、忍・願・相合せて峰の如くす、進・力・を屈して各の忍・願の上節を捻し、禪・智・を以て名の忍・願の初文を捻せよ。

（二）唵嚩曰羅室哩摩訶室哩阿彌底也室哩索摩室利益誐羅訶室利母陀室利沒羅賀娑嚩底室利戍羯羅室利舍儞如者羅始制帝室利摩賀三摩曳室利娑縛賀。

○破七曜一切不祥印言內縛して指節を痛うし（ひさし）て並べ過め二空を竪つ　唵薩嚩怛羅三摩曳室哩曳娑縛賀　○八供四

（一）觀ぜよ云云道場觀。

（二）珠　或はいふ珠の字か。

（三）眼　一本に服の字に作る。

（一）唵　註に曰く唵或は歸命なりと

（二）原本に梵字あれども今は省略す

(一)軍タリ　朱書して云く、裏に云く南寶部軍茶利なり、虛空藏菩薩忿怒なりと。

(二)原本梵字、對譯文字は青龍軌に出づ。

(三)原本に「シム」の字、挿入す。編者曰く、此の下に次頁の圖入る。

攝等　○本尊加持外五眼の如し口傳中寶　鑁吽怛洛訖哩噁　○正念誦上言　○佛眼印大呪常の如し

○本尊印前の如し　阿尾羅吽欠吽縛唎惡　○八字文殊印言常の如し已上の三種各の四所を加持す。　○散念誦　佛眼　大日　本尊二　八字　破宿　(一)軍タリ　一字

○護摩壇增益に付く　私に云く或は別人之を行ず、小壇は常に用ひざるか。　○本尊段第一印言を以て一切に用ふ　○諸尊段三十七尊皆な寶を持す五部富貴の法なり　口に云く寶部三摩地に入て各の虛空藏印を持す、或は明星天子吉祥天を請して鈎し印言す

○讃四智寶部　縛曰羅囉怛那、蘇縛曰羅、羅他、縛曰羅迦賒、摩賀摩尼、阿迦賒蘖婆縛曰羅茶、縛曰羅蘖婆、那謨娑都帝。

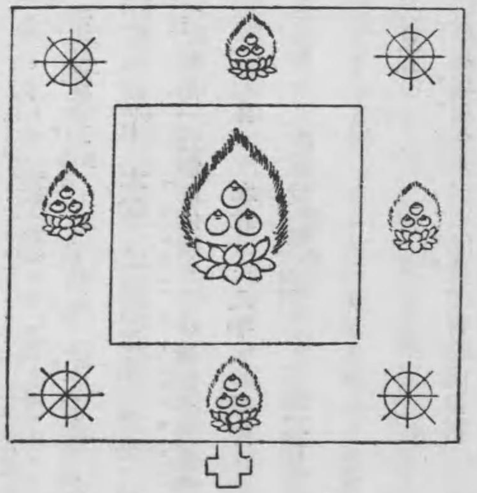
○後加持　○伴僧同じ。(二)歸命一伊阿迦奢三曼多弩蘖多尾質(三)怛藍、嚩囉二合達囉、娑嚩二合賀　或は大壇中に佛舍利五粒を安ず云云。

(朱)裏書　五大虛空藏の圖模樣なり。其の中、三修律師請來の唐本は、木像を安祥寺の大日寺に安置し奉るに、其の堂破壞す、仍て金堂の坤の角に移し渡す云云。

裏書に云く　西方蓮花虛空藏に寶なきは如何、之に依て古き圖像には蓮の上に寶を置く云云

(一)原本梵字、對譯文字は求闍持軌による。

(二)三十云云　傍に云く摩尼部中諸聖衆と。



私に云く、二儀を存す、一には蓮卽ち寶なるが故か、所謂る無量の寶を出生する蓮花なるが故に、二には蓮上の寶は必然なり。仍て略して言はざるか

小野の說に云く、諸尊段の明星天・吉祥天を請す。

明星印二手內縛して二中指を舒べ上節を交へ微しき屈せよ、卽ち成ず。　眞言　唵瑟羯羅誐怛縛曰羅囉室利迦里莎賀

○虛空藏

○(一)阿迦去捨舒可魚羯去耶余可引の反　○如意金剛。　○能滿諸願虛空藏　(二)三十七尊諸聖衆　○怛洛伊後僧正口決　口決に云く○尅大師　○鈒　○如意寶　寶蓮花同

(一)五峰云云　道場觀。

(二)唵　一本に吽に作る。

(三)原本梵字、對譯文字は求聞持軌による。

(四)原本梵字、對譯文字は青龍軌に依る。

(一)五峰樓閣の中心に大圓明あり、圓明中に寶蓮花あり蓮花の上に怛洛字あり、變じて三形となる、三形轉じて虛空藏菩薩となる、其の身金色にして首に五智の寶冠を戴き、左手に白蓮花を執る、微紅色なり、花臺の上に寶珠あり、吠瑠璃色なり、右の手の五指を垂れ下して掌を外に向へ(朱)與願印なり瓔珞をもて莊嚴し相好圓滿す。

○本尊印　○根本三昧耶印二手金剛縛して進・力・寶形にし禪・智並べ立てよ。　唵嚩曰囉囉怛覽(二)唵

○又の印　先づ仰けて右手の五指を舒べ、其の頭指を屈して大母指と相捻せよ、左拳を腰にせよ。　口に云く是れ如意寶珠成辨一切事印なり

○正念誦大日　本尊　唵縛曰羅囉怛覽唵　○又印　禪智二空を合せ月に入れ水の中文を拄へよ、風の頭を屈し、空の節の上に拄へよ　(朱)後僧正之を口決す　歸命一(四)伊阿迦奢三曼多弩蘖多尾質怛藍、嚩囉二合達囉、娑嚩二合賀　○散念誦　佛眼　大日　本尊　八字　破障　軍タリ數　或は金剛藏　一字

○護摩　○本尊段召請、發遣芥子供同　三昧耶印言之を用ふ　○後加持　第三呪　伴僧同じ。

(三)南牟、一阿迦捨舒可の反

◎普賢

○阿利耶三曼多、婆陀羅、冐地薩怛縛　○眞如金剛　○普賢菩薩大サタ　金剛

(一)觀想云云　道場觀。

(二)一本に唵の字あり。

(三)三世云云　勸請の句。

部中諸眷屬　○吽　○五胎。

(一)觀想せよ、淸淨法界宮の大曼荼羅の中に阿字あり、變じて滿月輪となる、月輪の中に紇哩字あり變じて八葉の蓮花となる、花臺の上に吽字あり、變じて五胎杵となる、杵變じて普賢薩埵となる、大月輪に處して大寶蓮花に坐し、首に五佛の寶冠を戴き、身色水精の如し、右の手に五胎杵を執り、左手に般若鈴を執り、白象王に乘じて大菩提心に住せり、及び八金剛妃等の無量の眷屬前後に圍繞す。

○根本印二羽外縛して二中指を竪てよ、但し師說に云く阿・佉の各を開き立てよ、是れ五胎契なり　眞言　(二)三昧耶薩怛鑁　○正念誦大本尊上言

○又たの印言二羽金剛拳に作り、左を膝に置き、右手金剛杵を抽擲し、心上に置き右脚左を押せ　唵摩訶索佉嚩曰羅薩怛縛弱吽鑁斛索羅多薩怛鑁　○散念誦　佛眼　大日　本尊初言　降三　一字

◎八字文殊

○阿利也曼殊子利　○般若金剛　○(三)三世覺母大聖尊　八大童子諸眷屬　○息災に付て之を修す。　○行法金剛界に付く軌の說は、別行なり　經に云く宅內に舍利塔を安せよと文り　太白直

日に之を修すべし。

(一)壇中云云　道場觀。

(二)壇中に紇哩字あり變じて八葉の蓮花となる、花臺に阿字あり淨月輪となる、輪の中に曼字あり變じて青蓮花上の(二)五股となる、五股變じて大聖文殊となる、身色黃金にして大光明を放ち、師子王に乘ず、右には智惠の劒を操持し左に青蓮花を執る、花臺に智杵を立て、首髻に八智の尊ねます、暉光十方に遍くして(三)行仁の目に對するが如し第二院に請召童子等、八大文殊次第に之を廻り、皆な面を中尊に向へ、奉敬の勢の如くし、蓮花上に坐し各の師子に乘せり、圓輪の外の四角の中に四大明王あり、第三院に四攝十六大天等各の本方に住す、乃至無量の聖衆恭敬し圍繞す。

○鈴　○次に大日　○本尊　○八童子胎の如し

○印　內縛して(四)二大を立て並ぶるなり口傳あり此は是れ一切佛の所說と云云　經に大精進印と名くるは是れなり、四處を加持す。

○眞言常の如し　○正念誦大日本尊　常の如し

○又の印　口に云く八葉印なり。增益の時專ら之を用ふ。

○又た云く　祕なり　虛合にして二水を內に相ひ鈎し、二火背を屈して爪を合せ、二風を屈して二空の頭に着けよ。後入唐の傳。

眞言は上に同じ。　○散念誦　佛眼　大日　本尊或は佛惡護、或は破障、或は北斗　大威敬

○護摩　○本　○諸　大威　後火を改むるなり　印內三貼・二風を開き小呪を用ひて五處を印す。世

調伏の時は大威德三摩地に入る是れ祕說なり。

者洛　八字文殊種子の時、

佉曇嚩　此の如く之を用ふ。

吽羅尾

○師傳(朱)裏書

禍慶增益　室利　如意寶印　口決(朱)後僧正或は八葉

息災天變　曼　五古印　內縛して口にあり、大精神印と名く。

敬愛怨人　曇　青蓮花印　別にあり

惡人降伏　悉底哩　劒　印　小劒、羯磨會利菩薩の印なり　師說なり

○八大童子　請召童子（阿憶）　計室尼（頡唎夾）　救護惠（毘杵）（胎文殊院救護惠なし、但し蓋陰院を除く救護惠即ち是れ慈愍菩薩なり。）
烏波計設尼（底哩鉢）　光網（耽索）　地惠憧（枳唎、軀風なり）　無垢光（多蓮（未））　不思議惠（汙實）　敬を奉ずる者なり。

文に云く　現在に　一切の吉祥を成就して　諸事圓滿して　壽命長遠なり。
師子　此に一切無畏といふ。

○○五字文殊

○阿利也（アリヤ）曼殊師利（マンジュシリ）冒地薩怛縛（ボウダサトバ）（吉祥金剛般若金剛）　○(一)三世覺母大聖尊　蓮花部中諸聖衆

○息災に之を修すべし。（白月十四五日に修す。）

(二)壇上に師子座あり、上に月輪あり、輪の中に八葉の蓮花あり、花上に曼（タン）或は字あり變じて(三)智劒となる（火炎なし）劒變じて大聖文殊師利菩薩となる、種種の瓔珞を以て其の身を莊嚴す、頂に五髻（ケ）あり、右に智劒を持し左に青蓮花を執る、花の上に般若梵夾（クク）あり、身爵金（ウクコン）色にして一曼荼羅の聖衆前後に圍繞す。

○鈴　○本尊　○四攝　○八供　○印（二手(四)内縛して忍願を立て劒形にして身の五處を印せよ。）　(五)阿羅跋（アラハシナウ）左曼

(一)三世云云　勸請。
(二)壇上云云　道場觀。
(三)劒に云く、或は梵夾と。
(四)内　或は外。
(五)原本梵字、對譯文字は曼殊師利童子若薩五字瑜伽法に依る。

○又の印　五古契　瑜祇經說　圓城寺の用ふる眞言同なり。　○正念誦（或は佛眼）　大日本尊
○又の印（二手蓮合し二頭を折り屈し、大指を其れに入れ挾へよ）　(一)唵跋折羅底（チ）乞瑟（シツ）奢（タム）淡莎縛訶。　○散念誦　佛眼　大日　本尊　大威　馬頭　一字
○護摩　○火天段（常の如し）　大威德段（之を行ず）　○本尊段　○諸尊段　○世天段（後火天段之を略す火天の處に約を加ふ）　教令　大威　或は馬頭。
○禮佛　若しは梵號　心月輪上に是の如く之を觀ずべし。

娜　る師云く

者　阿　羅　曼（タン）金　曼合

跋　劒　梵箇

儀軌に云く(朱)裏書　念誦の數（カズ）五十萬反に滿つれば即ち無盡の辯才を獲、文殊師利の如く等うして異ることあることなし、虛空に飛騰して、所求の世間・出世間の事悉かに成就することを得。

花嚴經に云く　東北方に有る處を清涼山と名く、現に菩薩あり文殊師利と名くと文り、

(一)原本に梵字あり、今は省略す。

文殊經に云く　若し人此の五臺山の名を聞いて五臺山に入り、五臺山の石を取り五臺の地を踏めば、此の人四果の聖人を超えて近く無上菩薩たらん云云

香隆寺傳に云く　二羽蓮花合掌して火を水上に加へ、地を水下に入れて風空の甲上に加へて、猶ほ縛字形の如くせよ。

曩莫糝曼多沒馱引喃引瞞係係俱麼羅迦尾目吃底鉢他悉體二合多娑麼二合羅娑麼二合羅鉢囉二合

然娑嚩二合賀

◎◎彌勒

○(一)阿里也妹怛唎母地薩怛縛耶　○迅疾金剛。

○當來化主慈氏尊　都率天上內院衆　○梵或は𑖭　○塔

二卷軌に付くなり。

(二)須彌山の頂に𑖭字あり、八葉の蓮華となる、蓮華の上に𑖭字あり變じて七寶の宮殿となる、宮殿の中に圓明の月輪あり、三胎を以て界道となす、率堵婆を以て分齊となす、其の中央の圓明の中に𑖭字あり、變じて率堵婆となる、率堵婆變じて慈氏菩薩となる、身

(一)阿里也云云原本梵字なるも妹怛唎二合母引地薩怛縛耶二合恥れ慈氏軌上、慈氏菩薩根本呪中より抽出

(二)須彌山云云道場觀。

白肉色にして大光明を放てり、首に五佛の寶冠を戴き大慈三昧に住し、左の手に蓮花を持す、蓮花の上に法界塔印を置く、右の手は說法印を作して結跏趺坐せり、八圓明の中に四波羅蜜並に四供養の菩薩、各の本方本位に住せり、下の(一)右邊に降三世、(二)左邊に不動、上みに六箇の首陀會童子あり、乃至曼荼羅の聖衆恭敬し圍繞せり。

○本尊根本印　合掌して二風を屈し甲を合せ二空を以て其上を覆へ　圓城寺說には寶瓶の印と名く　唵毎怛嚂野阿莎訶　○正念誦　大日本尊

上言

○又の印　合掌して左に巡し轉ぜよ。　歸命摩訶瑜誐瑜擬寧瑜詣說縛利欠惹利計莎訶

○又の印　內三股に似たり、但し中を開いて二風を著け、二大を以て來去せよ、此の印言は帆にあり。　怛濕他鄔斛妹怛利妹怛利妹怛羅莽曩洗妹怛羅糝婆鉗妹怛嚕納婆鉗莽賀糝莽也薩跋賀

三　一　○護摩　○本尊段　召遣第三印言を用ふ　芥子供物第一言

○散念誦　佛　大　本　不數

或る傳に云く　彌勒は西方の語菩薩なり　其の趣之を知るべし。大師御日記云云

或は云ふ、　部主　無能勝　五胎五字之を用ふ云云

(一)右に作る。一本に左

(二)左に作る。一本に右

(一)須彌山云云道場觀。

◎大隨求

○摩訶鉢羅底薩洛（マカハラチサラク）　○與願金剛　○本尊聖者大隨求　無能勝等大明王

○行法　金剛界曼荼羅に向て息災に修すべし。

(二)須彌山の頂に金剛峰の樓閣あり、樓閣の中に大曼荼羅壇あり、其の上に師子座あり、座上に𑖀字あり八葉の蓮花となる、蓮花の上に𑖀字あり淨月輪となる、月輪の中に跋羅（バラ）字あり、變じて梵筴或は五古となる、梵筴變じて隨求菩薩となる、身黃金にして八臂を具足す、右の第一の手に五股を持し、次の手に鈴鉾（ボウム）を持し、次の手に寶劒を持し、次の手に金剛光炎あり、次の手に梵筴の手に鉞斧鈎（ヨウ）（タフフ）を持す、左の第一の手に蓮花を持す、上に金剛光炎あり、次の手に梵筴を持し、次の手には寶憧を持し、次の手には索を持す、大光明を放ちて十方世界を照す、斯の光に遇ふ者は解脫を得ざることなし、乃至八十俱胝の聖衆恭敬し圍繞せり。

○鈴　○次に三十七尊。　或は八印を用ふ。

右第一印　五古、内なり　唵縛曰羅夜婆縛賀

第二印　鉞斧。唵鉢羅婆縛賀　私に云く轉法輪に似るなり但し大指を返さず、背の方に於て兩大を合するなり。

第三印　索。唵波者婆縛賀　私に云く内縛して二中を立て之を圖の如くす。

(一)正念誦。
(二)根　根本印なり。
(三)原本梵字、對譯文字は隨求陀羅尼經御請來下卷に依る。

第四印　劍。唵佉驥嘰婆縛賀　私に云く佛部印に似たり、但し二風を著けず之を屈せよ。

第五印　輪。唵斫羅婆縛賀　私に云く　内縛して二水を立て小指を交へよ。

第六印　三古刃。唵底里瑟羅婆縛賀　二大指を以て二小の甲を押し餘は合し散せよ。

第七印　寶。唵真陀摩尼娑縛賀　外縛して二風を寶形にし二大を並べ立てよ。

第八印　體。唵摩訶尼鉢也陀羅尼娑縛賀　私に云く九品惣印に似る、但し大指を入れざるはこれ想へ、印中に法敎ありと。

八印とは此の菩薩八臂所持の物標なり、第一印を以て根本と爲す。

師說　○鏁　○率堵婆口傳　○內五　言　常の如し。　○(一)正大、金、本、小呪　○(二)根內縛して二水を立て頭を柱へ二風を立て、屈して左空を以て左火甲を押し、右の空を以て右火甲を押し、二風鉤の如くせよ。　眞言常の如し。　(三)唵引跋羅跋羅三去跋羅　跋羅、印捺哩二合野尾戍馱顎、吽、引吽、引嚩嚩左黎引娑嚩二合賀　○散　佛

大金　本小呪タラニ　八　無數　一

○護摩　○本尊段印、內縛言、常の如し　但し芥子の時　八印の中の第一言を用ふ。　○後加持小呪は常の如し。　○本尊聖者隨求菩薩　蓮花部中諸大薩埵

○又た小野　○阿　○率堵婆　○印五內　南麼三曼多勃馱南阿（ボウダナムア）　○正念上の眞言　又た八印の中の隨心眞言之を用ふ。　○散念　佛眼　大日台　經　本尊　馬頭

無能　一字　○護摩　○初火　本尊　○諸尊段六觀音を用ふるなり。

承安元年辛卯九月十日夜の夢想に云く、遇ひ奉るが故に御房十卷之を抄す中事等並に諸尊次第審かならず、悉く習ひ奉ると申す、殊に之を許容するの氣ありて皆之を受けたり、其の中隨求法八印等次第に結ぶに、文の任に相違なし、過ぎ了て第八印殊に之を口傳する由仰せらる、結び樣は虛合して二大掌に入れ、二風の間に並べ立つ、說て曰く胸に當つるなり云云。此れ定んで結び了て說くべからず云云。但し此の法は八印の本と、受け奉る樣に已に相違之れあり如何。

○地藏

○阿利耶乞叉底佉羅縛（アリヤキシヤナキヤラバ）　○悲願金剛　○地藏菩薩大薩埵　寶部手等諸聖衆。　○訶

○金剛憧

○行法息災白月四日十四五日　此の菩薩不可壞金剛三昧に入り、種種の法門を以て衆生を利益す云云

(一)壇上に蓮花あり、蓮花の上に訶字あり變じて金剛憧となる、金剛憧變じて地藏菩薩となる、外には聲聞の形を現じ、內には菩薩行を祕す、福智二嚴之を以て莊嚴となす、恒沙の萬德之を以て眷屬となす云云

○根本印二羽爭にして二中指を開く　唵賀賀賀毗（カカカビ）三摩曳（サムマエイ）莎訶　○正念誦大日本尊上の言

○又の印　虛心して二空を開き申べ、風の側に着け飲食の印と名く禪朴寺僧正說　歸命訶訶訶索怛帑莎訶　○散念誦　佛　大阿ミタ　本尊第一言　炎魔慈(二)救

○護摩　○本尊段　○世天段炎魔天（シヤタ）約を倍す想へ始め炎魔法王より諸の冥官冥道に同じく之を併し奉ると。

○(二)滅惡趣尊　○印惠の拳施無畏にて(三)合掌、上に向へて肩上に擧げ物を打つの勢の如くし、左拳を腰に安け

難（ダン）、阿毗（アビ）庾弱吽鑁斛娑縛賀。　曩莫三曼多沒馱南、特憍（ドウシヤ）娑

觀念せよ特憍字變じて除一切惡趣菩薩となる云云

或は說く、出罪の眞言を以て滅惡趣に用ひ供すれば、卽ち是れ惡趣を滅する眞言なるが故に、或は云ふ、金剛頂護摩を作し摧罪眞言を以て滅惡趣の眞言となす。

○轉法輪

○摧魔怨　本尊聖者轉法輪　八大菩薩諸眷屬。　本尊聖者　常轉法輪　八大

(一)壇上云云　道場觀。

(一)救　一本に護に作る。

(二)滅惡趣　小野大鈔下に曰く地藏なりと。

(三)合　合の字か

菩薩　諸大眷屬。

○行法（常の如し　十八道但し四無量觀を加ふべし。）　○調伏に付て之を修す（但し大鈎召の印、時に別觀あるべきなり。）　謂く十六大護並に日本の諸神等を勸請するの意なり。

○ふ　○輪（八輻或は千輻）　（朱）ハシ　鈷形なり。　○本尊壇中に箇を立つ。（向ふ方に說あり）（朱）師云く中瓶の前に立つるなり、即ち壇の方なり。

凡そ此の法は彌勒大慈三昧に住すべきなり。（中心羽字其の故あるか）

（一）壇上に𑖭字あり大蓮花臺となる、花臺の上に𑖭字あり滿月輪となる、月輪の中に𑖭字あり八輻の大輪となる、輪變じて本尊となる、身色青色にして右手金剛拳に作り腰に安し、左の手に三股杵を執り、相好圓滿せり、八輻の中に八大菩薩（理趣經の如し或は八大明王）あり、各の本幖幟を持して皆な本尊に向へり、外金剛の五類の諸天、並に妃后四方に坐す、如來の敎勅を蒙り惡魔怨敵を降伏して、自身並に某甲をして安穩ならしめん、是の如く觀じ已れ（七處を加持すること常の如し。）

○鈴　○次に大日　○本尊二種印言（小金剛輪を以て小呪となし、大金剛輪を以て大呪となす。）　○或は次に降三世（常の如し）　○或は次に十字佛頂（內縛して二風を屈し二空の背を拄へよ）　（唵縛日羅薩怛縛　悉地薩哩吠吒）　○或は次に十六大護等（大鈎召印）

（一）壇上云云　道場觀。

（言を用ふ）　○四攝等（常の如し）　○本尊印言（鄔說小金剛輪印を以てし大金剛輪眞言を用ふるなり。）　○正念（大日本尊　大呪）　○大金剛○印言　○小金剛○印言（或る師云く、眞言の終に娑縛賀の句を加ふと。）　○散念　佛　大　十字

本（大小）　三世一切成就明　一字　部主（大日祕又た寶生）　敎令（三世）

○護摩　○本尊段（勸請奉送は合藏の慈氏印明を用ふ。虛合して風を屈し二空を以て風の上を押せ。曩莫三曼多勃馱南、阿旨曼捨夜薩縛薩怛縛剌也納哦多娑縛賀。但し鈎召印は本尊小呪を用ふるなり芥子供物等、同呪なり）　○諸尊段（八大菩薩、鈎召の印言を用ふ、或は三十七尊常の如し）　○後火天（常の如し、或は十六大護等鈎召の印言を用ふ。）　○後加持（小金剛輪若は三世、伴僧同　或る說、大アサリ大金剛輪）

（朱）裏書曼荼羅の事　轉法輪御筆樣萬荼羅北院にあり（此の御筆は佛眼萬荼羅の轉法輪菩薩なり云云未だ詳にせず）　或は

金輪曼荼羅之を用ふ　或は理趣經轉法輪菩薩曼荼羅之を用ふ。

又た本尊に七重ある樣

六大輪　七不動（朱）或る人云く、彌勒最も祕、不動最も祕、淺深互なり）　謂く本尊曼荼羅其の說一に非ず（但し師說は轉法輪菩薩之を以て說を爲す。）

○筒の事（本說苦練木、近代銅を用ふ如何）　長さ十二指、周圍八指文中瓶の前方に之を立つ。彼の筒の廻りに、上には十大藥叉の形を畫き、下には三大龍王・三大天后並に日本の神等を畫け、若し銅を用ふれば彫り（ほり）鏤（ちり）せ、筒の上下の蓋に八輻輪あらしめ、輪の端りに十字佛頂（朱）无嚩三呪を書け。

(一)原本に梵字あり、今は略す。傍に云く十字の外に敦嚕吽の字を加へて說をなす也と

(一)唵縛日羅薩怛武瑟捉灑吽發吒なり、梵字の字。行人の前に向ふなり輪の齊の中に梵字を書くなり。

又た筒の中に白紙を入れ若しは絹に怨家の形本法五尺或は七寸を書き、兩足に於て怨家の姓名之を記す左に姓、右に名、又た行役神像五頭天王二肘の量を畫き、而して怨家の頭を踏ましむ、又た不動の尊像を畫いて其の腹の中を踏ましめよ此等最極秘事なり努め能く能く隱便ならしむべし

筒は行法の時は壇に安す紙を覆ふなり餘時は取て之を納む云云件の怨家の形、結願の時爐の火に入れて之を燒け。

○灑水の事　潮に蚍結の汁彼の皮なり。を灑水に和合し並べ居へて供物の上に灑げ別に散杖を加ふ

例の灑水の後に之を用ふ。

○供物の事　例の佛供菓子の外に干棗・蓮根を佛供となす。

○別藥の事　水青指石榴子花石木、蓮根、引生鹽若し潮なくんば例鹽を以て水に入れ之を用ひよ。(朱)或は藥種を用ふ。

已上の物は法成せざる時は、器に入れて細末にして供に塗る云云常に之を用ひず、

承仕に知らせず、件の佛供は人料に用ひざるなり云云引鹽或は蘇油を加ふ云云　此の說吉なり。

○乳木の事　例に百八支乳木苦練木なり の次に二十支之を燒く命木之を用ふ、師說は松木なり。

(一)傍に朱書して云く、或は藥種を用ふと。

○相應物の事　(一)附子を鐵末鹽に和して芥子の次に之を用ふ小金剛輪言

○部主の事　實生又は大日(朱)或は三世教令輪の事降三世大師の佛眼萬荼羅轉法輪菩薩の所に彌勒を闕す　又た法花開題彌勒の所に轉法輪菩薩云云

法花軌に云く、小金剛輪眞言を以て轉法輪眞言に用ふ、大妙金剛甘露軍荼利經に云く、彌勒を以て轉法輪菩薩となすと文り。

又た師云く、摧魔即ち彌勒、彌勒即ち因菩薩、因菩薩即ち轉法輪なり、此れ等は即ち一體の異名なり。

大妙金剛熾盛佛頂經に云く　爾の時に慈氏尊菩薩現に大輪金剛明王と作る、遍身黃色なりと文り。

醍醐には大輪金剛を以て本尊となすは此の意か、但し兩說違すべからざるか。

或はいふ、八大菩薩八大明王となる、其の中の彌勒は大輪明王となる云云

○本尊　大輪明王即ち三六仍て慈心三昧を用ふべきなり。私案に云く、降調尊の時、慈心定に入るが故なり。　三六に付て調伏すべき義なり。

又た勘へて云く、怖魔の眞言に梅多隷の句あり然るべきか、此の說甚深の勘へなり

彌勒即ち大輪明王なり、故に此の法を行ずる時、彼の印言を用ふ。

金剛瑜伽經に云く　毗盧遮那如來種種の身を現ず。　一正法輪の身、轉法輪菩薩の身を現ず。　一教令輪の身、不動明王の身を現ず。

大日經に云く、金剛薩埵の印を轉法輪菩薩の印といふ、故に知んぬ大日は即ち薩埵、薩埵は即ち法輪、法輪は即ち不動なり。

○筒を以て本尊と爲す事　問ふ、筒何が故ぞや。　答ふ、筒に十六大護を錺付くる中に、彼の姓名を籠むる事、此れ攝伏する心なり。

五類天とは　那羅延・日天・多聞・毗那夜迦・炎魔なり。

國譯澤見抄第四　終

國譯澤見抄第五

○愛染王　○不動鎮宅　○降三世　○軍荼利　○大威德　○金剛夜叉　○烏芻沙摩
○金剛童子

◎愛染王

○南無縛曰羅囉(バザラ)誐(キヤ)尼(ジ)儞(ニ)耶囉惹(ヤラジヤ)　○意生金剛　○金剛愛染大明王　三十七尊諸薩埵。

○ぁ　○五古(朱)種子三形是れ多く口決あり。

須彌山の頂に嚩字あり變じて七寶の宮殿となる、宮殿の中に壇場あり、其の上に紇哩字あり、變じて八葉の蓮華となる、花臺の上に阿字あり淨月輪となる、月輪の中に鑁字あり、率都婆となる、率都婆變じて大日如來となる、大日如來の心月輪の中に種子あり變じて三摩耶形となる、三摩耶形變じて金剛愛染王となる、身色日暉の如くにして熾盛輪日輪火焔に住す、三目威怒に視て首髻に師子の冠あり、利毛にして忿怒形なり、頂に五股鈎を安じ五色の花鬘を垂れ、天帶耳に覆ふ、左の手に鈴を持ち右の手に五峯

(一)傍に朱書して云く、口傳ありと

の杵を執る、儀形は薩埵の如し、衆生界を安立す、次の手に金剛弓、右の手に金剛箭を執り衆星の光を射るが如し、能く大染の法を成ず、左下の手には彼を持し、右には蓮をもて打つ勢の如くす、一切惡心の衆速かに滅すること疑あることなし、諸の花鬘索を以て絞結して以て身を嚴り、結跏趺坐を作す、赤色の蓮に住せしめよ、蓮の下に寶瓶あり、兩畔より諸寶を吐かしめよ、乃至三十七尊並に無量の眷屬圍繞し恭敬せり。

○振鈴以後羯磨會許りを行ずるなり、其の羯磨會は卽ち瑜祇經序品に付く行なり。

○印五外言　(一)吽(ムタキム)擿枳吽(短)弱(シヤク)三摩耶一字心なり。　○正大日、金、本尊　○次に外五　三昧耶一字

(二)眞を宗とす、　○次に內、中立二火、大根本尾を宗とす　○次に內五、根本一字後を宗とす、此の言大勝金剛品に之れあり　已上廣澤流。

又た五種あり眞言を用ふ口決　虛合して二水・二空を掌に入れ、二風を申べて火側に着けず。息災　先の印の二風を火に着く增益　先の印の二風を蓮葉にす敬愛　先の印の二風を三角に作る調伏　第四印に口傳あり。　先の印二風鉤　鉤召　已上(三)眞傳

○小○素○五　○種子○三形口決　○外五　大根本　○正大、金、大根本、　○次に又た外五三種の明を用ふるなり。　已上小野の樣。

○振鈴以後十七尊を行ず云云　又た或は說く悉地印內縛して二火を外に交ふ祕となすか。　內縛して中指を立て交ふる印、俱に是れ男女相愛の心なり、仍て敬愛之を用ふ。

○朱)裏書に云く、偏に人黃を持するを以て深祕となす云云　刻字第一命、情・非情に於て壽命を祈るに殊に用ふるなり。最後に鳥羽院の狀に申さる、但し刻字を以て其の中に入る(麝黃牛を以て彼の姓名とする也)

師口に云く、大日所變の時白蓮を持す。薩埵所變の時は赤蓮。

頂十字に人王六粒あり　五龍之を守る　明王之を攝伏す(口傳なり)　平等王部(金剛王軌の意)

行者人王內心の肝なり、生氣を奪はしめず、件の人王を持し給ふか。王といは黃なり、是れ眞如の理か、日の赤きに似て荼吉尼等生氣を奪ふなり。

裏書に云く　小野　名香(沈)乳木(合歡木三寸に切る四指なり)　相應物(染米)三摩耶一字心を用ふ正念誦(大根、本)、敎令(三世)

(一)◇百八の乳木は芥子の前に大根本明を以て百八枚之を燒く(之を祕すべし云云)

○道場觀(別にあり)　爐壇に八箭を畫く(常の如し)其の外に四花箭を四方に置く、先づ東方

(一)原本梵字、對課文字は第五品に出づ、愛染王三昧耶一字心明といふ。(二)眞或はいふ首の字か。

(三)眞一本に貞に作る。

(一)圖は朱を以てす。

(一)原本梵字、對譯文字は瑜祇經第二品所載による。

(二)那摩、傍に朱書して云く、姓名なりと。

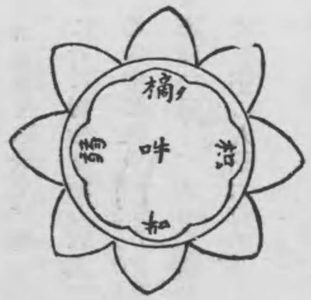
備考　下の圖は朱書す

下雌雄ツハ各の一枚上に節を置く南にハス　佛壇の下に物を置く口決師子口同

(二)(朱)唵引摩賀囉引誐縛日路二合瑟捉灑嚩日羅、薩埵弱吽鑁穀。某甲某甲ハシ縛始羯嚕拏娑縛賀。

此の如く書し又最も少さく疊みて彼の手に入れ、繪像ならば佛の裏に押し付け、或は彼の口唇に置く、五貼を以て加持し大眞言百反す。

(朱)唵引摩賀囉引誐縛日路二合瑟捉灑嚩日羅、薩埵弱吽鑁穀、蘇羯曩際尾始迦嚕拏冐地波羅弭枳娑縛賀。



爐底五寶上ヲシノツルギバヲ具シテ埋むるなり。上の眞言は此の具なり

又た師云く　(二)那摩を師子口に置かば、上の如く之を書き彼の口に置き、五貼を以て加持すること百八反せよ三昧耶一字心なり

是れ一切衆生の惑障を呑滅する義なり、故に大日經疏に云く、噉食とは謂く諸の忿怒等をして一切の毗那夜迦の類を呑滅す、言ふ所の如く諸佛は則ち衆生を殺す罪あり、今此の字の明義は所謂る毘那夜迦卽ち是れ能く障者たり、此の障は皆な妄想の心より生ず、若し噉食すれば此の如きの重障便ち心自ら開明す、當さに知るべし是れを眞言忿怒者と名く云云

(一)大聖云云の傍に朱書して云く、本尊聖者と。

師子冠とは一切瑜伽教中に此の法最尊最上にして王たるの義を表するなり。

經に云く　左下手彼れを持すと文り

是れ阿闍梨の所欲に隨ひて五種三摩耶を持すべきなり、然りと雖、今師云く、行者は人王內心の肝なり、生氣を奪はしめず件の人王を持し給ふか、是れ人王とは黃員六粒人王を祕して、或は日輪を書くか、怨家の頭なり、五古鈎して彼の手を向ふるは召罪の義なり、蓮花を持て打つ勢の如くするは罪を摧くの義なり、所求の事を書いて彼の手掌中に置き、其の上に人王ありと觀想すべきなり、無始の惑障を伏除し一切の悉地を成就す、衆星光を射る如くするは日月衆星光を放つの時、刹那の間に至らざる所なく、此の法を修せしめば、悉地速疾に成就する義なり。

◎不動

○阿利耶阿遮羅曩陀、○常住金剛　○大聖不動威怒王　四大八大諸忿怒

大悲不動明王　四大八大諸大忿怒　(一)大聖

○行法（大法に付く或は別行）　○息災調伏（隨時たるべきなり）

○憾𦊆（カンマン）（朱、法三御子傳法三傳）　○智劒（或は劒、倶里迦羅、又劒索）即ち龍なり（此の龍劒に纏するが故に倶利迦羅の名を得）　○惠劒印○明大惠刀○歸命憾○法螺印明（前印の風を空の甲の上にす）　○歸命閣　已上二箇の印明道場觀の前に之を用ひよ。

(一)壇中に吽字あり變じて瑟瑟（シシュ）の座となる、座上に種子あり變じて三形となる、三形變じて不動明王となる、身色青黑にして童子肥滿の形なり、頂に七結の髮あり七覺分を表す、左に一の辮髮を垂れたり、一子の慈悲を顯す、右の手に利劒を執れり、三毒の惑障を斷ず、左手に羂索を執り難調の者を繫縛し、遍身に迦樓羅炎を現ず、煩惱の惡龍を噉食することを顯す、寶盤山に坐するは淨菩提心の傾動（キヤウ）することなきを表す、左右に二の童子あり、右をば矜迦羅（コンガラ）と名く、恭敬小心の者、左をば制多迦（セイタカ）と名く、難共語惡性の者なり、乃至四大明王・十二大天・無量の眷屬圍繞せり。

○花座の次に寶山印言（内縛して空を水に著く）唵阿遮囉吽

○鈴　○次に大日　○本尊劒印（朱）左に轉ぜば眸除、右に慈救（朱）此の呪は大日經轉ぜば結界護身となる使者法に出づ　○(二)三三昧耶印明（金剛堅固にして内に相叉へ、檀惠を竪て開く一切如來所生印と名く、又た功德母印と名く。）　○(三)曩莫、薩縛沒馱母地、薩怛縛南、阿莽羅、尾

(一)壇中云云　道場觀。

(二)三三云云　註に云く梵語なり唐に三平等といふと(三)原本に梵字あれど今は略す。

迦羅多、帝爾阿羅逝、娑縛賀（句を加ふ）　○十九布字（定印を用ふ。）

已上の兩條前供養の禮佛の後に之を用ふ（廣澤の次第なり。）

○根本印（二羽相叉へ、二空を並べて二水の根を押し、二火の峰を空面に住めて二風を合せ竪つ、是れ大獨貼の印なり）　○眞言（火界呪有說。（朱）不動一字の明を加ふるなり。院）

○劒印（慈救呪裏書）若し五壇法の時五貼印、慈救呪を用ふ（（朱）中壇）　○正念誦（大日慈救）　或は火生三摩地に入る（定印なり）　○次に本尊印（劒印慈救）　○又た三三昧耶印言（前の如し）　○散念誦　佛眼　大日　本尊　四大明王　八字（（朱）大金剛輪　一字）

○護摩　○本尊段（劒印一字心明を以て一切に之を用ふ。）　○諸尊段（三十七尊皆忿怒形、口決あり、或は五大尊此の時は五古印慈救の呪、之を用ふ）　○禮佛（四攝次に四大明王本尊等なり）　○後加持　○慈救　○伴僧同じ。

○功能に云く（底里三昧經の文）若し能く常に念ずれば、一切の障を離れて火生三昧を得、一切無明煩惱を燒くと文り

○使者法に云く　一持の後　生生加護すと。○大日經に云く　若し纔かに憶念すれば等。文は之を略す。

○火生三摩地（（朱）火生三昧又は伽樓羅炎といふ。）　心月輪の中に羅字あり、變じて大智火輪となる、即

ち身中の惑障煩惱を燒盡す、其の火輪忽ちに大日如來となり法界に周遍す、大智の火聚りて、普ねく三界・五趣の中の所有の一切の作障者、尾囊也迦等を焚燒す、各の身心悶絶して皆な三寶に歸依す、器界の衆生自身他身を燒淨して、唯だ羅字のみを存して皎然明白にして自心の中にあり、卽ち薩埵不動金剛の身となると、是の如く觀じ畢り火輪印を結び火界の呪を誦す。

○裏書　不動明王とは　本と是れ大日如來久しく正覺を成ず、本願に依るが故に假りに使者童子肥滿の形となるなり。

首髮は赤(一)莎草の如し。　身色は紺青(コン)調伏なり。　頂は一髮無二の意を表す　左に七結を垂る七覺分を表す　面門に水波の文あり六道瘦(二)勞の相なり。　右の目を開く降伏の相なり　二牙は出現天魔相を示す　其の口を閉づ大慈にて能ふを表す。　右の目を閉づ諸の戲論を絕するなり　右手に銳劒を執る煩惱魔怨を摧害するの相なり。　左手に羂索を持す魔怨を摧縛し菩提を引攝するの相なり　遍身に火焰を現ず如來の惠火、外道の邪智を燒くなり　二童子侍(三)云順道の二道　瑟瑟座の事建立儀軌に云く五色の石云云藥覺在唐の記に綠石と云云

○不動曼荼羅の事　三角火光とは　右金剛眼、左降三世、下觀自在。不動は是れ菩提心大寂定の義なり。

(一)莎　コスケ、コケ。
(二)勞　一本勞の字に作る。
(三)云　一本に者に作る。

慨は是れ如來自在力なり。　訶は風、菩提點大空三昧と和合するなり。　事の因緣能く種種の法門に遍く、而も一切の諸障を摧く云云

又た正報盡とは、能く六月に延びて住する事。　或はいふ(一)弁破文の說の如し云云

竹は一よ破しぬれば餘は極めて安し、六月命ち延びぬれば何年と限らざる習ひなり、茶吉尼六月を兼ねて人の生氣を奪ひ飲むなり、仍て(二)是れを延ぶるといふ事、因緣ある事なり。

曩莫三曼多縛曰羅敕戰拏北方金剛夜叉、暴惡、　摩訶嚧灑拏東方降三世、忿怒、　沙頗吒耶南方軍荼利恐怖王、　吽怛羅吒西方大威德　唅(カン)𠰥中方不動、能く事業を成ず

觀念せよ、方便の索、辨事劒を以て堅て、諸の魔障を縛し一切の煩惱を摧破し、行者の意に隨ひて一切成就せしむ。(朱)殺若寺僧正自筆の樣

曩莫薩縛(ナウマクサラバ)怛他(タ)蘖帝(ギヤテイ)毗(ビ)藥(ヤク)歸命如來等　薩縛(サラバ)目契(ボクケイ)毗藥(ビヤク)一切巧妙　薩縛(サラバ)他(タ)惹(ジヤク)攝諸佛功德　怛羅(ラタ)吒(タ)吒(タ)攝煩惱隨煩惱　贊拏(センタ)暴惡の義　步擲明王　其の相を示現す。　摩訶路灑拏(マカロシヤダ)大忿怒の義　六足明王、其の體相を示現す。　欠(ケン)空の義　大唉明王　其の實相を示現す。　佉(キヤキ)嗢佉(キヤキ)嗢(ウ)食の義　馬頭明王　其の相を示現す。　薩縛尾(サラバビ)一切の縛を離るゝ義　大輪明王　其の義を出現す。　覲南(キンナン)智火の義

(一)是　或はいふか。辨　竹の誤りか。
(二)是　或はいふ其の字か。

(一)佛註朱書して云く、廣澤流は四大明王に付て慈救呪を宗とし、小野流は八大明王に付て火界呪を宗とするなり。

無能勝明王　其の相を出現す。降三世の前に置く、所以に無能勝は是れ佛部の明王、降三世は是れ金剛部の明王なり、無動明王。

吽(ウン)怖畏の義、卽ち眞言の體、無動明王、是れ佛部中金剛部となし、金剛部中佛部となす、三部各の三あるが故に、是を以て眞言の體を無能勝の後するなり。

但羅吒(タラタ)二部に通ずるが故に眞言の體を以て二明王の中に置く、堅固の義、降三世明王、其の相を顯現

感給(カンマン)本尊不動、定惠二身の義

祕密中の祕密。

(一)根本の印呪に二種あり、若し胎藏界に依て行ずる時は外五股印慈救の明を用ふべし、其の故は外五股印は、大日如來、法界の心字印は不動明王、大日如來の意業なる故に之を用ふるか、慈救の明の中に五大明王の種子あり乃至若し胎藏に依て行ずる時は四大明王といふべし、若し金剛界に於て行ずる時は八大明王といふべし、其の故は火界呪は法界體性智印を用ふ、二手虛心合掌して掌を着けざるなり、件の火界の明中亦た八大明王の種子あるなり、仍て兩界各別に不動根本呪印を用ふるか、但し十四根本は實體の本印に非ず、是れ相好莊嚴の印なり、不動尊に二呪二印ありとは卽ち是れなり、秘事なり、別行儀軌に依れば、人更に此の二呪の印を知らしむ可からずと云云。

石山抄に云く　不動立印軌祕二使者其の名を出さず、唯だ兩眞言あり、文に云く聖者不動尊一切の眞言を說く、其の第一呪は金剛印を用ふとは是れ矜羯羅の言なり。

後に次の眞言は渴誐印、是れ制吒迦の眞言なり、是の故に金剛智所譯の不動使者陀羅尼祕密法の中、此の眞言を別に翻じて矜羯羅制吒迦眞言とせり、智者能く之を解すべし。

○○鎭宅(朱)安鎭法なり。

○大聖不動威怒王　十二大天諸眷屬　○行法別行　○息災に之を修す。○氣或は氣

○獨古　○十二天の種子に通別あり師說　氣字通用　○尊像中央本尊四臂なり、廻りの圖十二天　○道場

觀十二天供法の如し　閻伽の後寶山印言を結ぶ金剛界にあり。　○次に荷葉印言常の如し　○振鈴の次に

大日　○本尊劍印慈救　○八供四攝等　○本尊加持二手金剛拳にして頭指・小指各の曲げて(一)劍形の如くし、口の兩角に安して相牙の如　○

正念誦大日、(朱)火焰輪止の印なり、口に云く遮火難の印と名く。不動一字明。　○又の印二拳背相ひ合せ各の空を火風の間より出せ　慈救呪但し終りに敷鳴字を加ふ、師說なり、(朱)祕事なり。

○次に佛眼印言常の如し　○散念誦　佛眼　大日　本尊慈救

○鎭宅呪　曩莫三曼哆縛曰羅敖、戰拏摩訶路灑拏、羅氣及ゝゝゝ給、薩縛訥瑟吒、鉢羅訥瑟吒、南縛曰羅跛播使多、滿馱野縛曰羅佉儼曩、馭破吒耶吽、怛羅吒哈給縛日里

(一)鉤　鈎か。

○加持所住處眞言（朱）不動なり。　歸命怛羅吒、娜慕伽賛拏摩訶路灑拏婆頗吒也薩縛尾覩南麽〻婆縛婆底、扇底始鑁茗婀左攞、黨矩嚕怛羅摩也怛羅摩也吽怛羅吒憾斡　○散念誦　四大明王　八字　地天　一字　○四智次に本尊讃を用ふ　○禮佛四大尊を加ふ　○護摩大壇に屬す　○本尊段不動一體、召請、發遣、牙印、一字明、芥子供物、同呪　○世天段常の如し　但し十二天之を供す　小壇の有無は時に隨ふ、若し用ふる時は十二天に之を供せよ。　○伴僧十二口或は慈救呪　或は八陽經を轉讀す、阿闍梨同じく之を讀む　○後加持之れなし。抑〻結願の後、本尊を細櫃に入れ梁上に安置せしむ、釘を以て一所を打ち付くるなり。

(一)壇中云云　道場觀。

◎降三世

○縛曰羅蘇婆儞　○最勝金剛　○大聖金剛降三世　四大八大諸忿怒　本尊聖者降伏三世　四大八大諸大忿怒

○行法金剛界に付く調伏に之を修すべし但し忿怒儀軌に四種法を說く。　○吽合圖大師　○五古五壇法の時五尊に通用、鈷は是れ師說なり。

(一)壇中に八葉の白蓮花あり、蓮花の上に吽字（朱）又は師說とあり、變じて五股金剛杵となる、杵變じて降三世明王となる、四面但し合圖は三面なり八臂にして身色青黑なり、火光體に遍ねく左の足に大自在天を踏み、右の足に烏摩后を踏む、乃至金剛部の諸尊、無量の眷屬圍繞せり。

○鈴　○次に大日　○本尊根本印言常の如し　○又の印外五　禪林寺傳祕と爲す、なり　小呪　さ蘇婆儞蘇婆吽縛曰羅吽發吒　○八供四攝等例の如し　○本尊加持根本印言前の如し　○正念誦大日本尊小呪　○又の印外五　小呪　寧　三婆に用ふるなり　○護摩　○本尊段小呪印言を以て一切に之を用ふ、抑〻此の時に本尊を勸請し坐立する事、口決あり。　○散念誦佛眼不動　大日本尊　或は四大尊八字　一字。　○後加持大呪　伴僧同じ。　○功能に云く深密法說　三世の有毒を摧いて　卽ち菩提を證せしむと。　○又た云く　彼の我慢を摧くが故に　足を以て頂に加ふと文り師云く高隆寺　五塵の煩惱を摧破して　精進を增長する義なり。

○禮佛皆な梵號なり。五大尊

◎軍荼利

○縛曰羅軍荼利　○甘露金剛。○甘露軍荼利大明王　四大八大諸(一)大忿怒

○行法金剛界或は別行○調伏に付て之を修す。

(一)大に作る。一本に无

○ぁ或は孔儀軌中に依ればぁ孔左ぁ右なり。○三古或は賢瓶

(一)壇上に寶樓閣あり、寶樓閣の中に𑖭(朱)貞觀字あり、兩邊にぁ字あり、變じて三股杵となる、變じて軍荼利明王となる、大悲方便を以て大忿怒形を現ず、四面四臂にして或は一面八臂東寺の講堂の像は集經の說なり。淨月輪中に住す、靑蓮華色にして瑟瑟(シツ)盤石に坐す但し集經は二蓮花の上に立つ無量の眷屬恭敬し圍繞せり。

○鈴　○次に大日　○不動　○本尊

○印言内三股、私に云く二風を以て二火の初節に付け二空を以て二水の甲を押す、三摩耶の印亦は護身印と名く。

(二)曩謨(ナウボウ)羅怛曩怛羅(ナウタラヤ)夜也(ナウマク)、曩莫室戰(シセンダ)拏摩訶縛曰羅、俱路馱野、唵虎嚕虎嚕、底瑟吒底瑟吒、滿吒滿吒訶曩(カナウ)訶曩、婀密哩(アミリティ)帝吽發吒、娑縛賀

○又の印言右手を舒べて大小を開き之を捻せよ、左手亦た此の如くす、右、左を押し臂を交ふ、羯磨印の本印と名くるなり。　唵婀密里(アミリティ)帝吽發吒

○八供四攝等　○部母麼麼計印明内縛して小・中・大を立つ、三股の如し。　唵俱覽駄里(クランダリ)鉢多(ハンタ)〻〻吽發吒

○本尊加持羯磨印言前の如し或說に大呪云云　○正念誦大日本尊　小呪　○又の印言内三股三摩耶の印なり　大呪同く用ふ。　○散念誦佛眼尊小呪　大日　不動　本　八字　一字

○護摩　○本尊段羯磨印言を用て一切に用ふ。　○後火天或は炎魔天に之を供す。印　虛合して二風・二地　唵吠縛娑を皆な月に入れ、二大を並べて二風の中節を押す。

(一)壇上云云　道場觀。

(二)原本に梵字あり、今は省略す。

縛多野(ソハカ)　○後加持大呪　伴僧同じ。　○功能　儀軌に云く　甘露軍荼利は能く諸の魔障を摧くに、悲惠方便を以て大忿怒形を現ず、甘露水を流注して藏識の中を洗滌し、雜種子を薰習して速かに福智を聚集す。

○○大威德

○焰鬘特迦(エンマトキヤ)　○大威德金剛又た持明金剛　○焰鬘特迦威怒王　四大八大諸忿怒

○行法大法に依る或は別行　○調伏壇に付く儀軌に云く三角を作て西に向へと文り　○𑖭貞觀寺ぁ　○如意棒或は股　或る祕說に云く、三字明を用ひて種子と爲す(ぁ)　六首六臂(ぁ)六足

(一)壇中に𑖭字あり、變じて如意棒となる、如意棒變じて焰鬘德迦明王の身となる、其の六首・六臂・六足・六趣を淨め、六度を滿し六通を成ず、靑水牛に乘じて種種の器杖を持し、髑髏を以て瓔珞頭冠とし、虎皮を裙とせり、其の身長大にして無量由旬なり、遍身に火焰あり、洞然として劫燒の如し、四方を顧視して師子奮迅の如し、乃至無量の眷屬前後に圍繞す云云

○鈴　○次に大日　○不動　○本尊印内縛して二火を立て合す、根本印なり、師云く棒印と。

(一)壇中云云　道場觀。

○大心眞言儀軌には勝根本の眞言を說く、但し師說に依て之を用ふ。　唵紇里瑟室梨尾紇里、多娜曩、吽薩縛設咄嚕娜捨也、薩擔婆也、薩擔婆也、娑發吒娑發吒、ソハカ

○又の印内三貼、師說大指を縛す。　心中心呪　唵瑟致利迦攞、嚕跛吽欠莎訶。　○八供四攝等

○本尊加持根本印、前の如し　大心眞言　○又の印内三貼、前の如し　心中心呪　○又の印前印に准じて

二風を開き立つ、心中心印と名く　三字明(朱)或は初の一印に三呪を用ふ、小野の祕傳なり。　已上三種印明の次第は宗叡僧正の傳なり。

○正念誦大日本尊心中心呪なり。小呪　○根本印先づ三字明を誦して己身に置け、(一)謂く頂に唵、口に𑖭、心に𑖨三字を想へ、次に七字を我が身分に置け。唵縛羅多鉢納摩吽　謂く頂・額・目左右・口・心・(二)臂左右・齊なり、印を以て身の五處を加持する等本尊に同じ。　○心印前の如し内三古なり　大心眞言　已上三種印言次第は大師の御傳なり。

○散念誦佛眼、大日、不動、本尊(大小)八字、三世、(朱)或は慈護、師說なり。一字、　○後加持心中心呪を用ふ。　○伴僧同じ。　○功能　儀軌に云く　十地の諸の菩薩　明王の敎に順ぜざれども　猶尙ほ能く消融す

○護摩　。本尊段心印　心中呪を以て一切に用ふ。

何に呪んや餘の障者をや。　加持の力に由て　皆悉く現ぜず　究竟して消

又た云く　若し惡夢あらんも

(一)朱書して云く三所に遍ぜば卽ち本尊を成ずと。(二)臂　或はヒザといふ。

滅す。

○裏書　大威德八大童子祕印智拳印なり。　波羅賀波羅賀吽泮吒

焰魔特迦龍魔及び諸の怨敵を降伏す云云。

或はいふ、水牛上に坐して一切の諸惡毒龍惡風雨を興して、有情を損する者を摧伏するが故にと云云。

○棒印の事師口に云く、其の中に怨家を觀ずるなり　法成せざる時は　壇中に不動尊を安せよ云云。　小野流に云く、棒を其の上に臥せて釵を立て之を觀せよと云云。

◎金剛夜叉

○縛曰羅藥叉此に金剛　眼醯經に云く、金剛鈎鬼尊と文り或は護法金剛　○金剛夜叉大明王　四大八大諸忿怒。

○調伏に付て之を修す本軌に云く、三角壇を作り惡人の方に向へよ。儀軌に云く、若し此の呪を行ぜんと欲はゞ不動儀軌作法の如くせよと文り

○行法大法に付く或は別行　道場觀以前に惠釵・法螺・印明を用ふべし。　○𑖨或は師說貞觀寺文　○五古師說或は釵又は牙

(一)壇中に蓮花あり、花臺の上に種子あり、變じて五股となる、五股變じて金剛夜叉と揚觀。壇中云云　道

なる、五眼忿怒形にして三面あり、六臂三首にして馬王の髻あり、瓔珞をもて其の身を莊る、威猛暴惡にして火焔熾盛なり、乃至金剛部の眷屬前後に圍繞す。

○鈴　○次に大日　○不動

○根本印 戒・方・忍・願・を内に叉へて鉤となし、檀・惠を曲げて鉤の如くし、進・力・を竪て合せ禪・智を並べ附け由は笑眼形の如くせよ、是れを根本印と名く、　唵摩訶夜乞縛羅薩怛縛弱吽鑁斛波羅吠舍夜吽發吒 夜發吒、經に三字之れなし、師說に依て之を加へ用ふ。

○八供四攝等

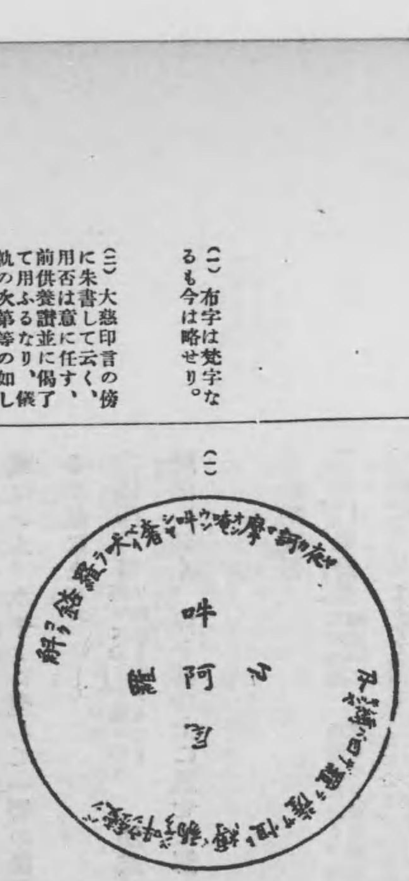
○(二)大慈印言 合掌して進・力・を屈して(三)谷に作り之を摔せよ　曩莫三滿多沒馱南、伽尾波羅設咄(シヤツ)嚕吽娑縛賀

○本尊加持 根本印言 (朱)觀念せよ五塵の煩惱を摧破し增長し精進するの義なり、香隆寺前の如し

○正念誦 大日 本尊小心呪 唵縛日羅摩制(ゼイ)麼(又)弱吽鑁斛惡吽發吒。の說

唵嚩日羅藥乞叉訖　○散念誦 佛眼 大日 不動 本尊 根本 三世 八字 一字　○叉の印言 外五鈷なり五眼印と名く、卽ち

○叉の印言 左右拳に於て二頭二小を牙(朱)左右偃め立つ



金剛界三昧耶身なり、根本明之を用ふ、或は同會の牙著薩の印明を用ふ、(朱)大御室御說

○護摩　○本尊段 根本印、小呪を以て一切に用ふ　○諸尊段 三十七尊、或は五大尊　○後加持 大呪　○伴僧同じ。

(一)布字は梵字なるも今は略せり。

(二)大慈印言の傍に朱書して云く、用否は意に任す、前供養讚並に偈了て用ふるなり、儀軌の次第等の如しと。

(三)谷の下、一本に口の字あり。

○功能　經に云く

此の一千八を誦し　隨順し而も攝伏せば　三千世界中上み有頂の類に至らん。

大日心月輪内に五字の明あり、次に本尊呪あり、右に旋て布列せり。編者曰く、圖は前頁にあり

此の本(一)明の中、字轉じて牙形となる、牙形變じて本尊となる、金剛夜叉の形卽ち是れ大日尊、大日卽ち我身、故に我れ本尊となる。

○○烏芻沙摩

○烏樞沙摩　○不淨金剛　又云く火頭金剛　○穢積金剛大明王　金剛部中諸眷屬

本尊聖者烏樞沙摩　金剛部中諸忿怒　本尊聖者火頭金剛　部類眷屬三部界會

此の法は四種に通ず、　但し不空の軌の說は東方に向ふ。○師說は息災に付く

○名香　安悉

○行法 大法に付く　○𑖮　○三𑖭　○道場觀 兩軌に付く 二臂像に之を用ふ。或は赤色 須彌山頂に大蓮花臺あり、臺上に寶宮殿あり、殿内に𑖮字あり、變じて八葉の蓮花臺となる、臺上に𑖮字あり、變じて三𑖭金剛杵となる、杵變じて本尊明王となる、青黑にして忿怒なり、諸の毛孔よ

(一)本の下に一本に尊の字あり。

り火焔を流出し、四臂を具足し、右の上の手に劒を持し、下の手には索を把り、左の上の手に棒を持し、下の手には三胎叉を把る、一一の器杖に皆な火焔起る、麼莽計等の金剛部の聖衆、訶利帝母及び其の愛子八方天等、諸龍阿修羅前後に圍繞す云云。

○鈴　○次に大日　○本尊

○根本印（二手内縛して掌を開いて下に向へ、二小指・二大指の端相拄へて合せ申べ、餘の六指は掌の中に互に申べて掌に着けよ、二大の拄へたる端は心前に向へ、二小の端は外に向へ獨古の兩の頭の如くす、此の印卽ち獨古の如し云云）　○根本呪　ゑ吽發吒　○金剛母（合掌して戒・方・巡・力之を合す）　唵矩嬭駄里滿駄滿駄吽泮吒　○本尊加持（内獨貼　不空軌の如くて合せ針の如くす）　○根本の印と名くるなり、（朱）私に云く二風立　大心眞言　唵縛曰羅、俱路駄、摩訶摩攞、訶曩娜訶跛者尾、駄望、娑也、烏樞苾麽俱路駄、吽頗吒、娑縛賀

○正念誦（大日本尊）　唵俱嚕駄曩吽惹　○又の印（針印を鉤結す）　三種の印此所に用ふべし（但し小呪）

○散念誦（佛眼部母）　（大日（上にあり）　不動　三世本尊　八字　帝母　一字）

○護摩　○本尊段（召請、發遣、初の根本印呪を用ふ、芥子供、之に同じ。）　○諸尊段（五大尊に之を供す）　○後火天段（帝母を加ふ）　○後加持（心呪を用ふ、或る説に不動）　○伴僧同じ。

穢積法に云く　此の呪を誦する者は、諸惡鬼神皆能く害せず、永く諸の苦を離ると文り

不空軌に云く　其の法勝るゝを以ての故に淨と非淨と俱にと文り　又た云く、永く一切の障なく、所願皆な心に遂ふと。　一卷軌に云く、（一）調難調のために此の明王體を現ずと。　此の尊の功能は二卷軌の上卷之を見るべし。

（一）調の下、一本に伏の字あり。

（二）怒の下、一本に尊の字あり。

（三）大海云云　道場觀。

○○金剛童子

○縛曰羅俱摩羅　○金剛童子忿怒（二）　金剛部中諸聖衆。○ゑ　○三胎　又た獨古。

（三）大海の中に寶山あり、寶山の上にゑ字あり三胎杵となる、杵變じて聖迦尼忿怒金剛童子となる、身吠瑠璃色にして六臂を具足す、面に三目あり、首に寶冠を戴く、狗の牙上さまに出でたり、口は下唇を咬へたり、眉を顰めて威怒す、右の第一の手に底里帝佉金剛杵を持し擲ぐる勢を作し、右の第二の手に母娑羅棒を持す、謂く棒の一の頭鐵杵の形の如し、右の第三の手に鉞斧を執る、左の第一の手に棒を把り、左の第二の手は擬る勢の如く金剛拳に作り頭指を舒べたり、左の第三の手に劒を持し、一の大虵を以て身上に角絡結繫せり、又た一切の毒虵を以て膊釧臂釧と作す、腰に條環珞及び耳璫、髮を繫く、又た大虵を以て腰に繞すこと三迴、背に圓光あり大焔圍繞せり、火焔の

外に於て其の雲電あり、以て相輔す、左足を以て寶山を踏む、山の上に妙蓮花あり、以て其の足を承く、右足は海水中にあり、其の半膝を立て沒れたり、乃至無量の眷屬前後に圍繞す云云

○本尊加持根本印虛合して、二羽に於て二水を交へて虎口に入れ、二風を鉤して二空の下を捻し、地輪を竪てて牙の如くせよ。(二)吽縛曰羅俱摩羅迦尼度尼吽吽泮吒　○正念誦大日本尊小呪(二)唵迦駄度尼吽(朱)隨心眞言なり　○印言前の如し　○散念誦佛眼觀音大日金剛手本尊慈(三)救一字

○護摩　○本尊段上印　小呪を一切に用ふ　○禮佛　南無摩訶毗盧遮那　南無觀世音菩薩　南無金剛手菩薩　南無沒馱盧舍儞　南無聖迦尼金剛童子三反　南無三部界會一切三寶

○後加持第一言　○伴僧同じ。　軌上に云く、我今未來の有情、及び末法の時の福德なき者のためにと云云。　下卷に云く　衆魔の便を得る所と爲らずと文り。　○三十萬反又は九十萬反を滿せ。末法に衆生を利益し佛法を護持す。

形像に二樣あり。　黃童子二臂、化身軌に出づ初心の行者のためにと云云　青童子六臂、三卷軌に之を出す東寺の門人多く之に歸依す。　金剛童子新譯　執金剛古譯　釋迦忿怒云云

觀音の眷屬なり、仍て如意輪之を具す。

(朱)或は彌陀の化身、或は金剛手の化身、或は釋迦の化身。

(一)原本梵字あり今は省略す。
(二)同前。
(三)救　一本に護に作る。

國譯澤見抄第五　終

國譯澤見抄第六

○毘沙門　○吉祥天　○炎魔天　○水天　○地天　○聖天　○十二天　○訶利帝
○十五童子　○北斗

◎◎毗沙門

○吠室羅摩拏摩訶提婆囉惹耶　○(一)本尊界會多門天王　五部太子諸大眷屬。　○(二)
○寶捧

(二)壇中に𑖭字あり變じて七寶の宮殿となる、其の中に二肘の壇あり、其の上に荷葉座あり、座上に藥刄の二字あり、變じて二鬼座尼藍婆となる、座の上に種子あり、變じて三形となる、三形變じて本尊毗沙門天王となる、七寶莊嚴の甲冑を着る、左手に塔を持し右の手に如意棒を執る、吉祥天女五部太子八大藥刄將廿八使者、及び無量の藥刄衆等、諸大眷屬前後に圍繞す。

(朱)足下の三藥刄とは、一に地天、二に尼藍婆、三に毗藍婆。

(一)本尊云云　勸請。

(二)壇中云云　道場觀。

○請車輅　○次に召請印右手を前にして左の手の腕を抱き頂上に於け、左手の四指を來去せよ。　曩謨吠室羅摩拏、娑夜摩底瑟多羅娑夜室多、鉢波怛、鉢他、娑縛賀。

○次に四天王結護印二手の小指を屈して(一)掌中に入れ、右、左を押し二中無名を竪て相離すること一寸、二風指を拄へて二大指を並べ屈して掌中に入れよ。(朱)台軌は此の印を以て多聞印とせり。

唵波帝夜半荼鉢荼憾吽室娑縛賀。○次次例の如し。

○振鈴　○次に大日　○本尊二手内に刄へ二水を立てゝ相合し二風を屈して鉤の如くし之を招け(朱)二空を以て二大の下を押す。　○小呪之を用ふ。

○本尊加持前の如し　○又の印(朱)伽駄棒の印　内三鈷の如し　大呪を用ふ。

(二)曩謨引囉怛曩怛囉夜也、曩謨引失戰荼縛曰羅幡拏曳、摩賀藥乞刄細曩鉢多曳、曩謨阿他骨嚕藥、室拏薩也、摩賀囉引惹摩囉絡怛藍鉢羅尼沙旃、薩嚩薩怛嚩吸底瑟多南、怛儞也他唵摩尼嚩駄囉也薩嚩賀　布嚕拏嚩駄囉也薩縛賀、摩拏嚩駄囉也薩縛賀、摩拏嚩託也薩嚩賀、悉定迦囉也薩嚩賀、吠失羅末拏也薩婆賀、難曩駄也薩嚩賀。

○正念誦大日本尊小呪　○又の印虛合して二地・二火を掌に入れ、各の背を合せよ、二水・二風を豆許り端去れなを鈎の如くして二火の側に付け、一寸許り着けず。　大呪を用ふ(朱)大師の御傳

日　梵天　帝釋　本尊大小　天女　童子　夜叉夜叉女　四天惣呪　慈

(一)當　掌の字か

(二)原本梵字、對譯文字は多聞天心眞言にして彼の別行軌所載による。

護

○護摩　○火天段　○諸尊段（已上常の如し）　○本尊段（召請、發遣印。內縛して二水を立て合せ、二風を以て之を招け、芥子等皆な小呪を用ふ。）

○世天段（已上四段なり。靈巖傳には三段之を行じ、諸尊段を除くなり。）　○功能　普滿如來の偈（毗沙門像法經に出づ。）

唯だ願くは北方毗沙門　我が三祕を加持し護念して

罪障を滅除し福惠を增し　一切の所願を滿足ならしめたまへ。

○吉祥天

○功德天　○本尊聖者　吉祥天女　蓮花部中　諸大眷屬。　○室利（シリ）　○如意寶

（一）壇上に寶宣（セム）臺の座あり、座の上に滿月輪あり、其の中に室利（シリ）字あり、變じて如意寶珠となる、寶珠變じて吉祥天女となる、面貌端相にして莊嚴微妙なり、左手に寶珠を持し、右手は與願の勢に作る、首に摩尼冠を戴き、後に圓光あり、紅色の蓮花に坐せり、左に梵王ありて寶鏡を持す、右に帝釋ありて散花供養す、天女の上の空中に千葉の寶蓋あり、蓋の左右に諸天あり、妓樂供養す、上の空の中に寶雲あり、雲の中に白象あり、象鼻に馬腦の瓶を纏ひ取て、瓶口より七寶を流下す、四寶山あり花菓茂盛

（一）壇上云云　道場觀。

なり、四天王等の諸眷屬恭敬し圍繞す。

○迎請の所に吉祥天印（八葉）を用ひ、眞言の末に翳薩曳（エイサイエイ）嚩の句を加ふ。　○次に馬頭の印言（常の如し。辟除結界をなす、以下例の如し。）

○又の印（內三鈷陀羅尼を用ふ）　○本尊加持（八葉印に似たり四處を加持す。）　心眞言　唵摩訶（マカ）室利（シリ）耶曳（エイ）莎哥。

但儞也他唵室（シリ）哩泥室哩泥薩嚩迦哩（ヤ）也娑駄儞悉儞（ニシ）〻〻儞〻〻

○散念誦　佛眼　大日　聖觀音　本尊心眞言　馬頭　梵天　帝釋

四天惣呪　隨求　哥利帝　慈護　（朱）經　○讃（十二名讃之を以て讃とす。）

羅吽（ラム）　○又の印（虛合して二水を掌に入れ、二空を以て各の水の甲を（一）押す）　心眞言を用ふ。　○施珍寶印（左右の中指無名指を相叉へて掌に入れ、二小指を外に向へ相叉へ、右、左を押し、右頭指を曲め竪て（二）右の指頭を直く竪て、二大を相屈して掌に入れよ。（朱）師云く二大並べ立てよ。）　大呪を用ふ。（即ち陀羅尼なり。）

○護摩　○本尊段（召請、發遣印、八葉心眞言惣呪なり。）　○功能　（ロ）聖觀世音　吉祥天を示現して　能く行者の心を觀じ　無邊の願を成就す。

○炎魔天

（一）押す（原本になし但し一本にあれば今挿入す。）（二）右（一本に左に作る。）

（三）原本梵字、封課文字は寶樓閣經下に出づ。（ロ）聖の上に大の字脫せるか。

(一)原本梵字、對譯文字は瑜伽護摩軌に依る。(二)本尊聖者云云 勸請。

(三)壇中云云 道場觀。

(四)原本梵字、對譯文字は瑜伽護摩軌所載による、但し軌には唵を歸命に作る、故に今は載せず。

○(一)焰摩天 ○先づ供物を辨じ備へ蠟燭を挿む、隨位の次第に之を立てよ。

○(二)本尊聖者 炎魔法王 泰山府君 五道大臣

○行法十八道、息災に付く、師說は爽の鈔を以て之を供すと。 ○焰 ○檀茶幢

(三)壇中に𑖭字あり七寶莊嚴の宮殿となる、殿の內に曼荼羅壇あり、其の中央に焰字あり、變じて檀茶の印となる、印變じて炎魔法王となる、身相肉色にして左手に人頭の幢を持す、右の手は與願なり、黃豐牛に乘せり、左右前後に后妃・妹女・太山府君・五道の冥官等の眷屬圍繞すと。此の觀を作し已て穆欠の眞言を誦し七處を加持す。

○獻座但し二意あり、一に水牛座、二に荷葉座。 ○印虛合して、二風・二地を相背けて月に入れ、二大之を並べて二風の中節を押す (四)唵焰麼耶娑嚩賀

○正念誦上の呪 ○次に印大旨前の如し、但し二空は兩風の中節の上より指を超えて二中指內に至る、第三節は相ひ挂ふ。 歸命梅嚩娑嚩哆也、莎㘑 ○次に泰山府君印者印なり 歸命質怛囉矩跋多野娑縛賀 ○散念誦

佛眼 大日 釋迦或は地藏 本尊 后妃 太山增數 五道 司命 司祿

擊吉 遮文 成就 毘那 慈護。 或は金剛般若經心經

○祭文は表白の次に金二打して之を讀む、第二夜よりは先づ金二打し讀み了て神分あるべし。

備考 圖中の數字は原本に朱書す。

火鉢便宜に隨て之を置くことあるべきなり、銀錢は每夜之を燒くべし、燒く時は法身の偈並に心經等を誦す幡は七箇夜に一度燒く。

○眞言等

炎魔后 歸命沒哩底野吠娑縛賀

炎魔妃 歸命摩哩怛野娑縛賀

太山府君　歸命質怛羅矩跋多野娑縛賀
五道五臣　唵閻摩羅闍、嗚揭羅鼻利耶阿揭車娑縛賀
司　命　唵阿慾耶琰魔莎訶
司　祿　唵部琳耶琰莎訶
拏吉尼　歸命頞利訶娑縛賀
遮文荼　歸命護嚕護嚕左門拏娑縛賀
成就仙　歸命悉馱尾儞也陀利南娑縛賀
毗那夜迦　唵摩訶誐拏婆多曳莎訶

已上自餘の眞言常の如し。

◎水天

○(一)嚩嚕拏天　供物を辨じ備ふ。

當さに四肘の水壇を作れ、其の壇は北面して水天の坐を安し、青色の幡(長さ五尺二流)を本尊の左右に之を懸け、青色の糸を壇の中心に之を置け、(作法口傳)十六盤の飯食(大飯八杯、五穀小八杯)

(一)原本梵字、對譯文字は瑜伽護摩軌所載に依る。

菓子(八杯)小豆羹(八杯)燈明(四盞)五穀の餅八杯(但し後夜に用ふ)例の如く八供養之を備ふ、四角に四瓶あり、但し栢の葉柳等之を用ふ、薫陸香を(一)燈し、呪師は北に面して坐す云云

(朱)口傳、青色の糸を蛇の形に結びて頭とをぼしき方をあげて、鉢に水を入れて蛇形の糸を浮ぶ、又た說く、水に入れず、傍に置く事も之れあり云云。栢は榧にあらず、日本には白檀といふ木なり、本草を考ふべし。

○先づ着座し護身す等　○次に香水を加持す等　○次に供物を加持す　○次に驚覺印言　○次に表白神分　○次に五悔發願(本尊聖者后妃天女)　(二)嚩嚕拏天諸大龍王　○次に五大願・三力等　○次に勝心　○次に大金剛輪　○次に地界　○次に墻界

○次に道場觀(如來拳)　壇中に𑖭字あり變じて甘露水となる、其の水の上に鉢羅字あり變じて龍索となる、龍索變じて水天となる、其の身淺緑色なり、右の手に刀を執り、左手に龍索を持す、頭冠の上に五龍后妃天女あり、諸大龍王等悉く圍繞す云云

○次に大虛空藏　○次に金剛輪　○次に送車輅　○次に請車輅　○次に大鈎召(但し眞言の末に縛嚕試野嚩醯曳吽の句を加ふ。)　○次に虛空網　○次に示三昧耶　○次に閼伽　○次に獻座(四葉蓮花印毘摩羅耶娑縛賀)　○次に四攝・拍掌　○次に振鈴　○次に水天印言(沛說、內縛して二𑖭を開かに合せよ。)　唵阿播鉢多曳莎訶　○次に水天妃(合掌して二風を屈し二空の頭を押す。)　唵縛魯地曳莎訶　○

(一)盤　一本に燒に作る。

(二)原本梵字。

次に廣目天左右拳して胷けて合せ、風を衆にして空を招け　唵尾(ヒロ)嚩(ハキ)博乞(シヤナウ)叉(キヤ)那(ナウ)伽(キヤ)地(ハタ)跛(ヘイ)哆曳莎訶　○次に諸龍二羽を散して五輪を舒べ、二空を相叉へて右を以て左を押せ　唵銘伽捨儞曳莎訶海伽正、五龍の種子之を用ふ　○次に五供等　○次に讃

(一)四智讃天　阿演(エンタ)都泥(ナイ)嚩(ヒ)、左(キヤ)訖(ソ)索羅(ラ)、緊(キナ)那羅(ナウラ)那羅(ナウラ)乞(シヤ)鑠(キヤ)迦羅(ラ)那野(ヤ)、鉢(ハ)羅(ラ)鉢羅達(タラマ)摩(キヤ)麗(リ)多(タ)地(チ)迦羅(キヤラ)、尾(ヒ)達麼左鉢羅捨麼、操(ソ)(二)爾(ニ)地、儞(ニ)銘(メイタ)多(タ)部(ボウタ)多(タ)銘(メイタ)多鉢羅迦捨夜、但儞賀室羅摩(シツラマンタ)拏也駄(タマン)鉢

○次に普供養三力祈願等　○次に禮佛

南無摩訶毗盧遮那佛　南無釋迦牟尼佛

南無觀自在菩薩　南無金剛手菩薩

南無毗盧博叉提婆　南無縛嚕陀提婆三反

南無金剛界一切諸佛　南無大悲胎藏界一切諸佛

○次に本尊加持右拳を腰に、左拳の風を直く立て少しき(三)屈せ　唵(ヨ)嚩嚕拏野、沙嚩訶　○正念誦上の呪云く、集經に呪を誦し一千八十反を滿足し祈れば雨を得と文り　○身印言合掌して二風を屈して二空の頭を押す。集經に云く、此の印を作せば水天身を現ず。　曩莫三曼多勃駄南、阿(ア)牛(ハン)波多曳娑縛賀　○又の印言内縛して二(ニ)を四に合す。　迷伽奢儞曳(エイ)莎賀　○散念誦　佛眼大日　廣目　水天　妃　諸龍　一字。

(一)讃一本に諸の字に作る。
(二)爾一本に企に作る。
(三)屈一本に屈に作る。
(四)原本梵字、對譯文字は唵伽護摩軌所載に依る。

○次に後供養　○次に讃普供養三力祈願禮佛廻向等　○次に發遣　唵嚩嚕駄野穆乞(ボツキ)叉(シヤボツ)穆　○次に三部被甲等　○次に下座　禮拜二十一反す。其の詞に曰く、

天下國土　炎旱消除　甘雨普潤　五穀成就

○地天

○衆土天　○本尊聖者　堅牢地神　部類眷屬。　○畢(ヒ)哩(リ)　○鉢(コン)

○行法十八道に付て一を修す　金壇の上に七寶の宮殿あり、殿内に荷葉座あり、座の上に畢哩字あり變じて寶瓶となる、寶瓶變じて堅牢(クンラウ)地天となる、肉色にして首に髮囊(ナウ)を着す、身に竭磨衣を着し莊嚴微妙なり、左手に鉢を持し花を盛(モ)る、右手の掌を外に向ふ、眷屬圍繞す。

○荷葉座印左拳を腰に置き、右の五指掌を仰けて之を上げよ　歸命噁　○鉢印合掌して風以下の四指を柱へ、前方の大を開き二空各の風の側に著けよ　唵畢哩(ヒチ)體微(ヒ)曳娑縛賀　○正念誦上の言　○又の印腕を合せ、二頭指及び二小指を反け刄へ、掌中に在き右、左を押し、二中指及び二無名指を以て直く立て、頭相ひ拄へ、二大指を以て並べ立て二頭指の側を押し、大指來去せよ。　唵波(ハ)孫陁(ソタ)里陁(リタ)那陁(ナウタ)、惹(シヤ)鉢囉(ラ)〻〻但(タン)娑縛賀(朱)集經の呪なり。軌同じ　○散念誦　佛眼　大日　不動　本尊二　慈護　心經。　或は釋

迦　地藏　觀音等、用否意に任す。

○功能　經第十に云く　地能く萬物を持し、一切の物之に依て生長す、當に知んぬ卽ち是れ佛心猶ほ如來心、能く萬物を持す。

普通藏品の疏に云く　亦た是れ釋迦方便の化身なるのみと。　註に云く、若し人誦持し修習せば、久しからずして如來心地を得るなりと。此の三昧を名けて善戴三昧と爲す、以て大地に同するが故なり。　或はいふ、大黑天神の本地なりと。

寶遺經に云く　堅牢地身とは文殊の化なり。

攝事經に云く　大地の中に於ける大黃龍王とは堅牢地神なり。

攝壽經に云く　地德狐とは堅牢地神是れなり、此の菩薩の體高さ千丈、九億四千の鬼神を以て眷屬とせり、此の菩薩は八手を以て一切衆生の願に隨て福德を與ふ。

胎藏梵密號の下に云く　堅牢神dhi（梵號なり）此の天は東北方に住すと。

又た金軌等に、西方に亦た地神ありと。

○○聖天

○阿哩耶提婆（ディバ）　上堂、着座以下壇供加持に至るまで常の如し　○（朱）次に火を扇ぐ、

唵嘊入嚩囉吽　○次に多羅油を取て少に置き、大呪を以て加持す百反

○印（惠手を拳に作りて中指を申べ、頭指を以て中指の上節に附く）　眞言　唵娜（ナウ）翼迦（ヨクキヤ）娜翼迦尾娜（ナウ）翼迦尾娜翼迦怛（シヤウ）羅翼迦怛羅翼迦餉佉賀悉底（シヤウキヤナ）餉佉迦只（シタ）多扇底迦羅娑縛賀（朱）師說に依れば略に之を用ふ　○或は又た心呪加持百反

印同じ　唵儗哩（キリク）虐吽娑縛賀　（朱）本尊印明を結ぶ、八葉印、四葉なり　唵縛曰羅蜜攞那陀賀娑縛賀　○次に多羅を取て壇中に置き油中に天像を安置し畢れ。　○次に一禮拜す但し（一）安天行者左に立つるなり　○次に啓白略神分五悔等常の如し　○發願　至心發願　唯願大日　十一面者　大自在天　大聖歡喜　夫婦二天　四部八部　諸眷屬等

不捨本誓　降臨道場　所設妙供　哀愍納受　共生歡喜　護持某甲　消除不祥　增長福壽　所求悉地　決定圓滿　及以法界　平等利益

○五大願普供養三力等常の如し　○次に勝心　○大金剛輪　○地結　○墻界　○次に道場觀　壇中に𑖭字あり、變じて瑠璃の寶地となる、其の上に𑖭字あり、變じて七寶の宮殿となる、殿の中に白圓壇あり師云く、是は息災に付くか、（朱）或は赤の八葉壇、敬愛　上に七寶の多羅あり、上妙の香油を湛ふ、油の中に（二）白蓮花寶座あり、上に虐虐の二字あり、變じて三形（藕葡根若しは歡喜）

（一）安に作る。一本に女

（二）白蓮花　朱書して曰く、或は八葉の赤蓮花。

圖あり、三形變じて大聖毗那夜迦王雙身となる、象頭人身にして其の形肉色なり、無量の眷屬隨從し圍繞す。

○次に大虛空藏　○小金剛輪常の如し　○次に迎請内縛三鈷、大指（朱）二中二風に付く　を以て來去す　唵鉗迦羅（シュタ）（ナイ）（ハ）（タヤ）（エイ）（ケイキ）主拏儞囉哆野翳醯枳莎訶　○次に降三世　○虛空網　○火院　○示三昧耶等　○次に閼伽　唵利惹耶娑縛賀或は心中（一）呪

○次に花座其の印を高く擧げざるなり　唵縛曰囉（ヤ）密羅也陀賀（タカ）莎縛訶　○次に天本印明内縛三鈷なり、二風を中指に付け、二大指を頭指の下に附く。（朱）此の印を以て成典僧正悉地を得と云云牙印と名く、有說は一寸開く。唵鑁哩虎莎縛賀　○師說　八供養印明之を用ふ　○次に塗香等前の唵利惹耶莎縛賀之を用ふ、或は心中呪　○次に讚　唵誐娜簸底扇底、娑囉悉底、摩賀誐娜簸底、娑囉賀　○次に普供養・三力等　○次に禮佛　南無摩訶毗盧舍那佛　南無十一面觀世音　南無軍荼利明王　南無大自在天　南無誐那簸底帝縛羅惹三反　南無三部海會一切聖衆　○次に天印を結べ四處を加持す　前の牙印なり　唵儼哩虎莎縛賀心呪と名く　○正念誦心呪　○次に本尊印明其の形なり、密印となす。　唵虎々吽莎縛賀心中心呪と名く。

○次に杓を取て油を酌んで二頭身を浴せしむ一杓一呪數百反油を下す時慇懃に祈願すること百遍、終りに讚一度す、次に摩尼等なり、是の如く

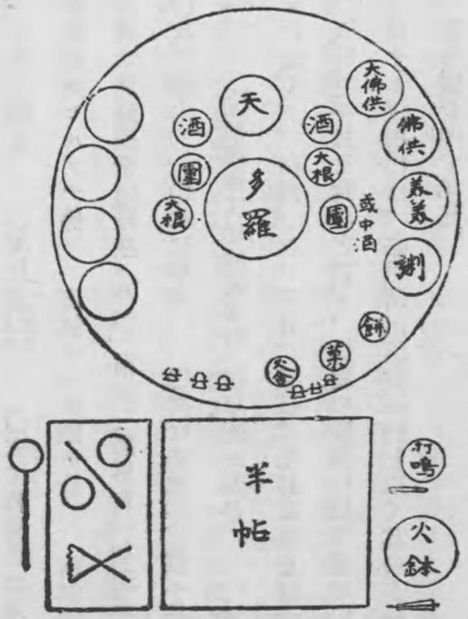
（一）播一本に拭の字に作る。
（二）次に云云の一項は一本に存す。
（三）心中心呪朱書して、或は心呪といふ。

四百遍に滿せ心呪二百反心中心呪二百反＝午三百遍心中二百反、心中呪百反、二時を合せて七百反なり。

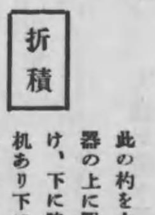
○次に天像を本座に歸す油中より天像を請出し紙を以て二播淨し本座に安置す。　○（二）次に本尊加持　○散念誦

佛眼　大日　十一面　軍荼利　本尊身呪　（三）心中心呪　肝心呪　悅與呪　調和呪　大自在　慈護　心經等　○次に後供養　唵利惹耶莎縛賀

朱　香隆寺粥日中にも用ふ。



（朱）此の天人心に歡喜を得しむるが故に酒を供養す、此を歡喜水と名く。



此の杓を土器の上に置け、下に脇机あり下に紙を入れ机の下に置け

一一之を用ふ　○次に讃上の如し　○次に普供養三力等　○次に禮佛

南無摩訶ヒルサナ佛　南無十一面觀世音　南無軍荼利明王　南無大自在天

南無誐那簸底帝縛羅惹三反　南無三部界會一切聖衆

○次に廻向　○次に解界　○次に發遣前の迎請の印内縛三鈷、大を以て之を撥し仰て三度、(朱)魂は云ふ、後夜に發遣せず云云日中に

必ず用ふ　唵簸迦羅主拏禰縛多野、藝車藝車莎訶　○次に護身等　○出堂

文に云く　白月一日、三日、五日、七日に之を修せよ。

天等(一)平旦を食時と爲す。供養の勝劣に依て悉地の差別あり云云。　天像を造り安置する住所には、必ず所出所食の物を以て其の上分を取り、之に供養すべし、障を除き富を增す云云。

儀軌に云く　其の像は夫婦二身相ひ抱き立つ、各の長五寸或は七寸、並に象頭人身に作る、白鑞銅木等を用ひて之を鑄、之を刻むも並に得、白月一日を以て此の法を作せ云云　壇高かるべからず云云　巧匠に價を還すことを得ざれ。

裏書　○先づ淨水一桶三鈷印を以て加持すること七反、唵吉里吉里跋折羅吽泮吒　○次に多羅に彼の水を入れ、杓を以て之を洗浴す湯を以て浴するなり。　○浴像眞言七反　唵阿拏婆折唎波跢羯拏訶

(一)平旦朱書に云く、或は寅時を平旦とす或は晨朝又云く、日中午時なり、吉祥時と爲すなりと文り。

浴し了て紙を以て像を拭ひ壇上に安置せよ但し中間に之を用ひず、初後許りなり。　洗浴の時觀想せよ、本清淨水を以て毗盧舍那最後等流の身を洗浴し、鑁字言說不可得の水を以て阿字本不生の體を洗ふ云云

大聖歡喜天とは　本地を尋ぬるに無所不至大日如來最後身なるが故に、云く大垂跡の故に聖と名く、今持念し供養すれば世出世安樂悉地を得るが故に歡喜の名を得、而も天相を示現するが故に天と名く。　或る天は大の名を得て聖の名を得ず、大梵天の如し。　或る天は聖の名を得て大の名を得ず、聖妙音天の如し、唯だ歡喜天あつて大聖の名を得るが故に、大權の垂跡たることを知るなり、輕蔑すべからず云云。

○立天の樣。　普通には雙立なり行者の請の時は女天、新廟を摺る　愛敬の時鼻を摺る、增益之に同じ。

離別の時背け立つ男女に隨ふべし背を摺るなり。　諸祈成ぜざる時は耳下をかく。　若し夢中に驚怖の事あらば、大自在天の明之を用ひよ。　○印二小・二無名を以て掌内に於て相叉へ、二中指を竪て頭相ひ拾し、二頭指を以て各の中指の背の第一節の下半分に加へ大指を來去せよ。　懺悔すべき事あらば調和呪を用ふ又た心經等

○八十二天

(一)壇上云云　道場觀。

○三四天　○本尊聖者　不動明王　十二天等　諸大眷屬。　○息災若しは增益に之を修す。　○哈　○獨朮

○行法常の如し　三力の偈畢て○大金剛輪○地結○方結○道場觀等なり。

(一)壇上に𑖭字あり變じて七寶の宮殿となる、其の中に曼荼羅あり、中央に哈字あり變じて獨朮杵となる、杵變じて四臂不動となる、青肉色にして前の二手牙印に作り、次の二手に劒索を持す、各の本位に荷葉の座あり、東北方の葉上に伊字あり、三戟及となる、變じて大自在天となる、東方の葉上に因字あり獨朮杵となる、變じて帝釋天となる、東方に𑖭字あり寶瓶となる、變じて火天となる、南方に焰字あり檀荼印となる、變じて炎魔天となる、西南方に地哩字あり劒となる　變じて羅刹天となる、西方に縛字あり龍索となる、變じて水天となる、西北方に縛字あり風幢となる、變じて風天となる、北方に吠字あり寶棒となる、變じて毘沙門天となる、內の艮の隅に沒字あり蓮花となる、變じて梵天となる、內の乾の隅に畢哩字あり鉢となる、變じて地天となる、內の巽の隅に阿字あり、日輪となる、變じて日天となる、內の坤の隅に遮字あり月輪となる、變じて月天となる、各の無量の眷屬と前後に圍繞す云云。

(一)壇上云云　道場觀。

但し師說は十二天の種子は短吽之を用ふ、閼伽の後に寶山印を結ぶ　次に荷葉座

次に燭燭を立つ圖の如し　必ずしも五穀ならず、只だ白飯を用ひ胡麻を飯上に置くなり。

○印大指を以て中指、無名指の甲を捻し、小指頭指之を立て、兩手を分つ。　○言不動一字の明　○正念誦　自六　帝七　火八

大日、不動一字の明　○又の印大鈎召印、先づ不動呪、次に鈎召の言の末に翳醯曳吽の句を加ふるなり。　梵二　日四

○散念誦　佛眼　大日　不動　十二天各別　毘十三　不一　焰九

吉祥天　慈護或は光明眞言　心經　地三　月五

風十二　水十一　羅十

○○訶利帝

○訶利帝　母利帝母鬼子母神　揵陀山中諸眷屬。　○吽或は嚩　○吉祥菓或は刀、但し呪賊經の時なり

○行法十八道　東方に向て之を修す。黑月一日若しは五日に之を供すべしと文り。　文に云く、人をして此の像を見せしむることを得ず、及び作法を知らしめば必ず效驗を失せん。

(一)壇上に阿字あり、寶宣臺座となる、座上に吽字あり變じて吉祥菓となる、吉祥菓變じて訶利帝母となる、形像金色にして妙天衣を着し、頭冠瓔珞を以て身を莊嚴す、宣

臺上に坐して右の足を垂れ下す、兩邊に二の㚖子を畫す、宣臺に傍ふて立て、二膝の上に於て各の一子を坐す、左の懷中を以て一つの㚖子を抱けり、右手中に於て吉祥菓を持す、眷屬圍繞せり。

○召請印（合掌して二大指之を招く）　唵致尾致顚莎訶　○根本印（右手の指を以て左手の背に於て交へ刄へ入れて左手の掌を抱き、左手を身に向けて三たび招け）　唵努努魔里迦吽帝㤲嚩賀　○正念誦（上の呪）　○印（金剛合掌）　眞言（前の如し）　○又た愛子印（二手を以て合掌して二大指を並べ屈して掌中に入れよ。）　心眞言　唵知尾知顚娑嚩訶　○散念誦　佛眼

大日　本尊　愛子　呪賊經（盜賊を祈る時なり）　藥師　延命　破障　慈護　○禮佛　南無摩訶毗盧遮那佛　南無訶利帝母（三反）　南無五百愛子　南無一切三寶

○發遣（前の召請印　二大指を用ひて之を出す。眞言は上の如し。）

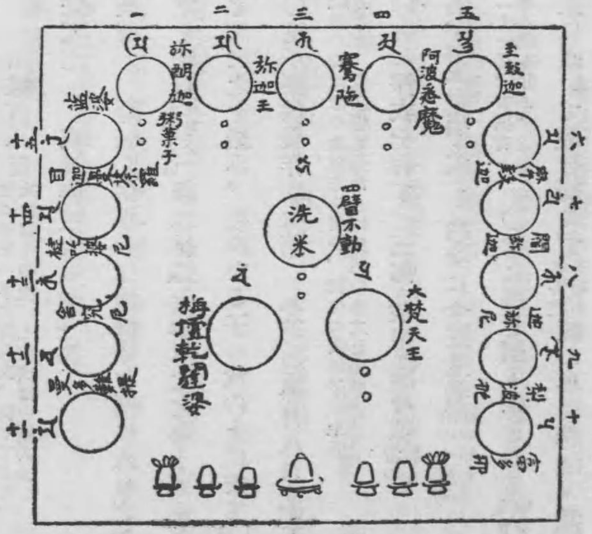
我れ心眞言あり　由し摩尼寶の如し　能く一切の願を滿す　閻浮提の　諸の善男女等を利せんためにと文り。

凡そ母は貴女形、子は鬼形。　加妙增喜自在飛行安住同蘇愛授（シュ）香味得財（已上九子の名なり）

若し人、九子の鬼名を知らざる時、供し禮すと雖、敢て受用せず、能く名號を知て之を供すれば、前生の貧報ありと雖、多く福利を得。

○十五童子

○三五童子　○本尊聖者　不動明王　(一)梵天婆王　諸鬼神等。○表　○獨古



○中央不動（有說）　前は梵天（沒羅）　後は栴檀乾闥婆王（戍）　通三方十五鬼神（各別種子或は吽字圍繞す。）

○印言等　○不動（二手金剛拳にして頭指小指各の曲げて鈎形の如くし、口の兩角に安じて牙の如くせよ一字の明を用ふ。）　○梵王（左の水空相捻し舉げ右の手を腰に安す。）　唵沒羅唐摩寧曳莎縛賀　○婆王（內縛して水輪を（三中）べ、頭を合すること勿れ。）　歸命尾戍馱薩縛羅縛係儞莎縛賀　○正念誦（本尊）　○又の印（釵印、慈救一字明）　○散念誦　佛眼　大日　不動（慈救）　婆王　讀經　八字　三世　慈護

(一)梵天婆　傍に朱書して大梵天に作る。

備考　圖の周りの數字原本に朱書す

(二)中　一本に申に作る。

(一)等　一本に王に作る。
(二)苑　宛の字か

結線百八反先づ不動一字明百八反、結し了りて、次に婆王の呪、七結或は一結云云

梵天王　南無栴檀大鬼神(一)等　○禮佛　南無釋迦牟尼佛　南無大

裏書　師云く供畢らば壇供等を桶に入れ之を封じ(二)苑鎭作法の如し。施主の許に送り生氣方に之を埋む天一太白方を除く經は結線を以て之を卷き紙をして裹ましむ、上下に封を書き、其の上を又た之を裹み、生れたる子の枕の上に安す或は頸にかけしむるなり。

○童子經供養作法次第　先づ白黑月八日・十五日。晨朝に花水一桶を酌む。生氣方の水なり或師云く、姙胎の間は母の生氣方を用ひ、誕生の後は子の生氣方なり。(朱)但し煩あらば房內の水之を用ひよ。

○次に淨衣を着す　三部・被甲・護身等常の如し　○次に東方に向て立ち、栴檀乾闥婆の名字百反を唱ふ。　○次に十五鬼名各の七反經說の如し。　○次に淨硯に彼の水を入る三點印を以て加持すること二十一反、吉里吉里の明を用ふ。　○次に墨を摺り筆を執る主の二字を誦す寫經の間に燒香一盃を盛り儲け、机上に置いて煙を絕さず名香之を用ふ經の奧に釋迦・梵天・婆王等の種子を書くべし、桑の木を以て軸とするなり。

○次に五色線燒香を薰じて机上に置き、加持すること二十一反、不動一字の明を用ふ。　此の間供物を辨じ備ふ圖の如く東に向へ洗米十七杯大二杯小十五杯　乳粥菓子同じ專ら柘榴を用ふ若しは黑大豆　御明(ミアカシ)二燈或は四燈　供物の後ごとに、十五鬼の名を書

き札を立つ艮を首とし三方に旋り前方を除く、不動並に婆王は札を立てざるなり。壇敷並に供師の座は薦を用ふ。

○次に着座○塗香○以下の作法常の如し　○次に事由　○次に經の題名並に釋　○次に祈願寶號等　○次に六種　○次に廻向

裏書　佛說護諸童子陀羅尼經。　爾の時に如來初て正覺を成ず、一大梵天王あり、來て佛所に詣り佛足を敬禮して是の言を作さく、

南無佛陀那　南無達摩那　南無僧伽那　我れ兩足尊を禮したてまつる、照世の大法王閻浮提に在して最初に神呪を說き給ふ。

彌酬迦　彌迦王　騫陀　阿波悉摩羅　牟致迦　摩致迦　閻彌迦　迦彌尼　梨波坦　富多那　曼多難提　舍究尼　揵吒波尼　(二)因佉曼荼　藍婆

佛陀に南無したてまつる、此の呪を成就して諸の童子を護り、惡鬼神のために燒害せらるゝ所とならず、一切の恐怖悉く皆な遠離したまへ、蘇婆哥。時に梵天王此の呪を聞き已て歡喜奉行しき。

護諸童子經

(一)因　一本に目作る。

(一) 鈴　一本鐃に作る。

(二) 朱書に云く、先づ智拳印勃嚕吽の言と。(三) 無の下、一本に名の字あり。(四) 屬　一本に屈の字に作る。(五) 囉の下、伊の字あるか。(六) 殞　一本に孺に作る。

○北斗

○指尾法。　○一字金輪遍照尊　北斗七星諸曜宿　○行法別行に付く　○息災に之を修す。　○金輪　○勃嚕吽　○輪八輻なり。　○北斗　○嚕　○星形

壇中に嚕字あり寶莊嚴の宮殿となる、其の中に紇哩字あり、變じて寶蓮花臺となる、臺上に勃嚕吽字あり、轉じて金輪佛頂となる、其の後邊左右に七荷葉座あり、座上の各に嚕字あり、卽ち北斗七星となる、前に荷葉あり、上に土・星・日・月・火・水・木・金・羅・計の十二宮神、二十八宿並に諸眷屬等、重重に圍(一)給す。

○鈴　護摩に付て之を用ふべし、供時には之を用ひず。

○(二)召北斗印言　虛心合掌して大指を以て二無(三)の甲を鈴し、二中指・二小指蓮葉の如くし二頭指小しく開き(四)屬し來去せよ。　曩謨三曼哆、那羅曩嚩醯枳頗伊賀伊、那伊迦伊、囉(五)謨囉二合哆羅伽囉哈、薩嚩賀

○七曜惣印呪　虛合して二大を離れ立てよ　亦た一切執曜印と名く　或は二頭指開き立てよ　亦た十二宮印と名く　唵薬羅醯入嚩哩耶、鉢羅婆多、而偸底羅摩耶、莎哥

○二十八宿惣印呪　二手合掌して二大二中指相叉へよ。　歸命諸乞叉怛羅(六)殞那寧曳莎哥。

○八供四攝等　○本尊加持　○先づ頂輪王智拳印勃嚕吽呪　○次に北斗印言內縛して二頭指立て合せ二大を並べ立てよ　唵颯多而曩野、伴惹密惹野、染普他摩、娑嚩訶曩、羅訖山婆嚩都、莎嚩賀

○又の印　初の召北斗印なり、上の眞言　○正念誦　頂輪三勃嚕吽北斗呪　○印　外縛して二頭指を實形にし二大を並べ立てよ　眞言普通

○又の印　左右の火空を相鈴し、二水を立て合せ二地・二風を張り立てよ、祕印とす　(朱)阿陀密經に出づ　眞言常の如し

○散念誦　佛眼　大日　頂輪王　曩謨三曼多、那羅那羅、破左羅吽。　白衣

唵濕吠帝濕吠帝半拏羅縛悉儞莎縛賀。　延命　八字

本尊千反　本命星三百反　當年星三百反　本命曜三百反　本命宿三百反　本命宮三百反　七曜惣呪　二十八宿惣呪　破諸宿曜　一字供時或は蘇讀に用ふ

○護摩　六段に之に行ず　香隆寺次第の如し(朱)段木數十四　○火天段　常の如し　○金輪段　自身觀樂て智拳印を以て勃嚕吽呪を誦し、四處を加持し、花を投げ呪を誦し、金剛佛頂を請す奉請並に奉送は智拳印一字呪なり、供物同じく之を用ふ。　○北斗段　白花七葉を取て壇中に投じ七荷葉の座となる、座上に七の嚕字あり七星となる、但し本命星を中央に觀じ餘の六を伴となす。

祿存文曲　籠貞武曲　破軍尊星　今爲某甲　災厄解脫　壽命延命　得見百秋　今作護摩　唯願垂哀　降臨此處　納受護摩　擁護某甲　悉地從心

○召請發遣は召北斗印言を用ふ(朱)發遣、大鈎召印言　芥子供物は普通の言なり、但し燒供は

小杓を以て七度之を供す（例大小杓各の三度供し畢る乳木の間なり）（朱）三切各の七杓之を供す　○諸曜段　九曜・十二宮・二十八宿皆な此の段に攝す、而して三重各の吽字を安坐すべきなり。○大鈎召印を結び諸曜宿の惣呪を誦して曰く　（一）麼囉二合薩濕縛二合哩也二合鉢羅二合鉢多二合殊底羅摩野翳薩嚩吽四七囉九囉

（二）諾乞灑二合怛囉二合、濕寧吉儒那捉曳翳薩嚩嚩吽十二宮二十八宿

嚩薩縛多羅鉢羅底訶帝多他哦當俱舎冐地遮唎耶鉢利勃羅迦翳薩曳嚩嚩吽鑁斛娑縛賀諸眷屬惣呪

○供物の言　唵嚕伽嚕伽羯羅耶莎縛賀諸宿曜等に通用するなり。奉送には只だ大鈎召の言を用ふるも咎なきのみ。

○後火天段常の如し　○世天段八方天日月梵天地天等なり。　○印言は例の如し。　○後加持北斗呪常の如し

○伴僧同じ　○禮佛漢號

裏書　北斗儀軌に曰く　謂く北斗七星とは日月五星の精なり、七曜を囊括し八方の上に照臨し、天神を輝かし、下も人間を直る、善惡を司るを以て禍福を分つ、群星の朝宗する所、萬靈の俯仰する所、若し人有て能く禮拜供養すれば長壽福貴す、信じ敬せずんば運命久しからず、是を以て祿命書に云く、世に司命祿あり、虎辛の日に至る毎に上み天帝に向ひ、衆人の罪惡を陳說するに、重罪の者は則ち算を撤り、輕罪の者は則ち紀を去る、算盡き紀失しぬれば卽ち命を亡ふに至る、是の故に如來末世の薄福短命夭死の衆生のための故に、是の一字頂輪王召北斗七星供養護摩の儀を說く、則ち供養をなせば其の屬命星をして數死籍を削り還た生籍に付けたまふ。

世天段の種子、或はいふ乾かと。

北斗段

（朱）七星なり

（朱）廿八宿

後火天段

智の火天金なり。

世天段

十二天種子 或は各別

若し諸の國王、自の空中に於て曼荼羅を作り、如法に護摩し禮拜供養すれば、北斗歡喜して擁護となるが故に、久しく勝位に居し恒に安穩を受く。

北斗七星とは、四は如斗、三は似柄（西國斗は柄に差ふなり）又た妙見とは尊星王なり。

或は云ふ、尊星王とは四臂の不動なり、故に五並べたる星の北の端の軸星を尊星王といふと云云 件の星五尺内を廻りて其の外に出でずと云云 餘の四は隨時に廻るなり（北斗此の星は相順して廻る云云）

覺成法印所習の折紙を以て之を書寫す、元と別紙爲り、予類聚して六卷と爲す、

本抄の原本は東京護國寺より拜壁し之に依りて國譯せり。（編者）

國譯澤見抄第六 終

國譯澤抄第一　如來部

○阿閦　○寶生　○阿彌陀　○釋迦　○藥師　○佛眼

◎阿閦

○(一)大圓鏡智阿閦尊　金剛部中諸眷屬　○(二)吽　○(三)五股

壇中に八葉の蓮華あり、蓮華の上に誐字(ギヤ)あり變じて白象となる、象の上に𑖭字あり、變じて淨月輪となる、月輪の中に紇哩字あり、八葉の蓮花となる、花臺に𑖀字あり、變じて五股金剛杵となる、杵變じて阿閦佛となる、觸地(ソク)の印に住して身不動なることを得、頂より青色の光を放ちて諸魔を摧伏す、乃至四親近の菩薩及び金剛部の諸尊、各の本幟(ヘウシ)幟を持して、前後に於て圍繞す。

○本尊根本印　觸地の契、四處を加持す、是を能滅毗那夜迦諸惡魔鬼神の印と名く　眞言に曰く　唵惡乞芻毗也(アキシユヒヤム)吽

○正念誦　大日(カー)本尊の上の言　○又の印　獨古の印　無動如來大身印と名く　眞言　唵嚩曰羅枳惹囊(キシヤナウム)吽

○散念誦　佛眼　大日　本尊第一言　降三世　一字

○護摩　○本尊段　召請、發遣、供物には第二印言を用ひ、芥子は第一言を用ひよ。

◎寶生

○平等性智寶生尊　寶部內證諸眷屬。○怛洛(タラク)　○如意寶

壇中に娑(サ)字あり馬座となる、座上に阿字あり滿月輪となる、月輪中に紇哩字あり、八葉の蓮華となる、花臺に怛洛字あり、變じて如意寶珠となる、寶珠變じて寶生如來となる、頂より金色の光を放ち、如意寶珠を雨(ふら)して悉く一切衆生をして、所求を滿足せしむ、及び四親近の菩薩、寶部の諸尊恭敬し圍繞す云云

○根本印　右の羽を施願にせよ。　眞言に曰く　唵羅怛曩(アラタンナウ)、三波嚩(サムバハ)怛路(タラク)。　○正念誦　大日本尊　上の言

○又の印　外縛して火を寶形に作れ。　眞言に曰く　唵嚩日羅枳惹唵怛路(タラク)。　○散念誦　佛眼

大日　本尊第一言　寶菩薩　鬼會　軍荼利　一字

○護摩　○本尊段　召請、發遣、供物には第二印言を用ひ、芥子には第一言を用ひよ。

◎阿彌陀

○梵號　阿哩野彌跢婆耶怛他蘖多　○密號　清淨金剛大悲金剛壽命金剛　○勸請　極樂教主彌陀尊　觀音勢至諸薩埵　○種子　𑖀　○三昧耶形　八葉赤蓮花（梵語を以て蓮と爲す。）　○敬愛に付て之を行ず。

○道場觀　壇上に滿字あり、孔雀座となる、座上に阿字あり、淨月輪となる、其の上に訖哩字あり、紅蓮花となる、花上に又た訖哩字あり、八葉の赤蓮花となる、獨股を莖とせり、變じて本尊となる、卽ち身色紅頗梨にして大光明を放てり、相好圓滿して奢摩他の印に住し、無量の聖衆圍繞す云云

○鈴　○次に大日智拳印（一）唵縛日羅二合駄引都鑁　○本尊定印小呪（二）唵阿密栗二合多・帝際賀羅吽引

○八供養印言並に四攝等金剛界の如し　事供已下禮佛了て入我我入　或は觀音三摩地に入るなり、具さには儀軌の文の如し。略觀本尊は大日所變の彌陀　行者は彌陀所變の觀音なり。

○本印外縛して二中指を立てよ　大呪七遍、小呪一反。曩謨囉怛曩怛囉夜耶、娜莫阿哩野旃跢婆耶、怛他蘖跢夜、囉曷帝三藐三沒駄耶、怛儞也他唵、阿密栗帝、阿密栗姤、納婆吠、阿密栗多三婆吠、阿密栗多蘖陛、阿密栗多悉弟、阿密栗多帝際、阿密栗多尾訖磔帝阿密栗多尾訖磔多誐旃寧、阿　栗多誐誐曩吉底迦囉、阿密栗多娜弩邪、娑嚩囉、薩嚩囉他、娑駄寧、薩嚩羯磨訖禮捨乞灑孕迦囉娑嚩賀

（一）眞言原本梵字、對譯文字は大日經第三所載による。

○又の印左の手を相捻し、空の端、環の勢の如くせよ、右は又た此の如くし、左仰け右覆せ兩の手の甲を合するなり。　眞言小呪は前にあり。　師云く、此の印言に依て本尊と行者と同體不二なり。

大金剛輪印言之を用ふべし。　○正念誦大日金剛界本尊小呪　○定印　大呪一反　○又た前の外縛の印を以てす　小呪一反　或は決定往生の印言を用ふ內縛して火風空各の開き立てよ　眞言　阿密栗姤、納婆吠吽　○六八印內縛して大小指各の開き立てよ說法利他の印と名く。　眞言　（一）阿去聲呼味羅餅欠　○三三品往生印定の手を仰け惠の手を覆せ合せ、惠の大指を掌に入れ、餘の九指を搖動せよ。觀あり口授。　眞言小呪を用ふ。　○佛眼印言常の如し　○散念誦佛眼大日（胎）本尊（大呪・小呪）正觀音馬頭一字　決定往生敎令輪馬頭　○護摩勸請・供養・芥子・發遣皆な小呪を用ひよ。　○御加持大呪伴僧同じ

（一）大日眞言原本梵字、對譯文字は金剛頂蓮華部軌等所載による。（二）小呪原本梵字、對譯文字は儀軌の或本所載による。

◎釋迦

○一代敎主釋迦尊　十方分身諸如來　本尊聖者釋迦如來　十方分身諸佛善逝

○婆　○寶鉢

(一) 悉底 或る本に此の二字なし。

壇中に高妙座あり、四方均等なり、其の上に訖哩字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺上に𑖦字あり、淨月輪となる、月輪中に婆字あり寶鉢となる、寶鉢變じて釋迦如來となる、身色黃金にして三十二相八十種好を具足す、敎法を流布して衆生を化度せんがために說法の相に住せり、及び普賢・文殊・觀音・彌勒等の諸大菩薩、乃至舍利弗・須菩提等の諸賢聖衆前後に圍繞す云云

○根本印 定惠各の五輪を舒べ、空火相ひ捻し、左は心の前に仰け、右は左の上に覆せ相ひ着くること勿れ。　眞言に曰く　曩莫三曼多沒馱喃、婆、薩嚩、吃哩捨、涅素娜曩、薩嚩達摩嚩始多、鉢羅鉢多誐誐曩、三摩三摩、莎訶

○又の印 右の手外に向へて之を立てよ。　眞言に曰く　唵阿目伽、悉弟唵　○正念誦 大日本尊　踏命婆

○又の印 二大・中・小の六指を各の竪て、頭相ひ拄へ、二食指を以て內に向へ相ひ叉へて、右左を押せ、無名指亦た相り、腕を開くこと四寸　唵薩婆(二)悉底鷄、毗輪、陀羅泥莎訶

○散念誦　佛眼　大日　本尊第一言並に小呪　降三世　一字

○護摩　○本尊段 召請・發遣・供物には鉢印の小呪を用ひ、芥子には第四言を用ひよ。

○藥師

○十二上願薄伽梵　日光月光諸薩埵。　○行法 金剛界に付く　增益若しは息災隨時なるべさなり。　○堂莊嚴の事 別記にあり、但し大御室は堂莊嚴を用ひしめず、只だ息災を修せしめ御すなり。　○吽　○壺 口決あり

阿日俄亞亥神哈和戌紇哩彌酉縛安申摩摩未怛覽素午

遮月賀因巳摩波辰覽摩卯阿眞寅吽照丑鉢毘子

壇上に誐字あり、變じて白象となる、象の上に訖哩字あり、蓮花臺となる、臺上に阿字あり、月輪となる、月輪の上に藥の壺あり、壺變じて本尊藥師如來となる、七佛八供四攝、日光月光八大菩薩、乃至十二大將前後左右に圍繞す。

○金剛王の次に勸請の印 內縛印なり、コロコロの明を用ふ を作るべし。　○振鈴の次に　○大日金　○本尊根本印 法界定印を用ふ　口傳あり。大呪を誦すること一反して想へ、十二反を成するに鉢口より七佛妙藥を出すと。　○日光菩薩　○月光菩薩 右手の空・風指を相捻して持花の夢の如くし、餘の三指を立てゝ少し開け、外に向へて上に擧げ、左は二風・二空の頭相ひ拄へ圖に合せ、餘の六指を散し舒べて旋轉せよ。唵鳴裘爾庾多莎訶　○十二神將 右を拳に作て、頭指を鉤せよ。拳に作して腰に安け、歸命戰拳羅鉢羅婆野莎訶　○八供四攝等已下 帶の如し　○本尊印 內縛して頂上に散せよ　口傳あり。小呪を用ふ、陀羅尼集經に出づ。　○正念誦 大日本尊の小呪　○又の印 法界定印大呪七反　○散念誦　佛眼　大日 胎　本尊大中小　二菩薩　八字　三世　十二神　一字

○護摩 爐底に藥壺、若しは種子之を書く。　○本尊段 召請、內縛印同じ　供物に大呪之を用ふ。　○諸尊段 卅七尊に二菩薩を加ふ、總印別言　小呪 芥子之に小約

(一)南謨云云　原本尊眞言なり。原本梵字、對譯文字は藥師瑠璃光七佛本願功德經下卷所載による、但し細字は原本に出づ。

(二)婆　原本にはなし。

(三)等　一本藥に作る。

(四)(五)遊・社　原本梵字「セイ」に作る。

(六)梵本云云　原本にはなし。

(七)沒駄云云　原本梵文は對譯文字は金輪時處軌所出に依る。

(八)月輪云云　道場觀。

各の三度之を供す　○後火天段十二藥叉に之を供す、印言上の如し　○後加持大呪伴僧同じ　○敬令輪無能勝、或は降三世

(一)南謨敬禮薄伽伐帝世尊鞞殺社藥鑁嚕師薩瑠璃瑠璃鉢剌(二)婆光曷羅闍也王咀他如揭多也來阿羅喝帝應三藐正三(三)等勃陀也覺已上歸命の句咀姪他所謂唵鞞殺逝藥鞞殺(四)遊藥鞞殺(五)社藥三沒(六)梵本異本無し、安然の記に之を載す揭帝上勝莎訶

三藥を擧ぐるは、謂く理智敎の三藥を以て、衆生の業病・鬼病・四大病の三を除くなり、善根の藥を以て業病を治し、呪藥を以て鬼病を治し、醫藥を以て四大病を治す。又た三身藥を以て三病を治すること、之を知るべし。

○心呪　唵鞞殺逝鞞殺逝鞞逝社三沒揭帝莎縛賀

◎佛眼

○(七)沒駄引路者儞　○殊勝金剛　○金剛吉祥佛眼尊　八大菩薩諸眷屬　本尊聖者金剛吉祥　佛眼佛母諸大眷屬　○行法常の如し。三力偈より一字金に至る伴僧は本尊の呪を誦ずべし。　○欠

○佛頂眼或は金剛眼謂く一古の左右に眉並に目あるなり。

(八)月輪の中に紇哩字あり、三層八葉の蓮花となる、花臺に於て欠字あり、等虛空不可得門なり、白色の光明を放てり、變じて獨鈷金剛杵となる、法界の體にして邊際あることなし、一切の如來は杵の內にありて間隙なし、杵變じて佛眼如來となる、兩目微笑して定印に住す、身の色素月の如し、寶冠師子冠寶衣・天帶・あり、首を飾るに衆寶・珠瓔珞・五色の花鬘索あつて微妙に嚴身す、光明熾盛にして一切の支分より十凝河沙倶胝の佛を出生せり、內院の八葉の前に一字頂輪王あり、右に旋て七曜の使者あり、第二の八葉に金剛手等の八大菩薩理趣經の如し第三の八葉に右に旋て八大明王あり、又た花院の外の四方に於て八供養四攝の菩薩あり、是の如くの諸尊各の師子冠を戴けり。又た外の四方に八大護天、二十八宿等恭敬し圍繞す云云

○振鈴の次に　○大日金　○本尊印、大呪、常の如し　○金輪內縛して二中を立て合せて鉢形の如くし、二風を屈して二中指の上節を捻し、二大を並べ立てよ歸命、勃嚕吽　○八大菩薩金剛合掌　歸命、迦、薩縛他、尾麼底尾枳羅停達摩駄賭、涅佐多參參訶娑婆訶　○八大明王金剛部の印の如くなり。　曩莫三曼多、嚩曰囉敕、吽吽發吒、發吒髯々娑嚩賀　○七曜惣印呪合掌して二風・二空を開け。　唵欠羅醯入嚩里耶、鉢羅波多而偷底、羅摩耶

莎訶　○八供四攝金剛界の如し　○事供等常の如し　○次に大日印言金

○根本印二手虛心合掌して二頭指を屈して二中指の上節に附け、眼笑の形の如くせよ、二空各の忍願の中節の文を捻し、亦た眼笑の形の如くし、二小指復た微しき開いて亦た眼笑の形の如くせよ、是を根本の大

(一)唵云云 原本梵字、對譯文字は金輪時處軌所載に依る。

印と名く。　曩謨引婆誐嚩覩婆誐嚩覩（當の如し）　○正念誦（小呪を用ひ）。　○又の印（金剛合掌して二頭指を並べ屈して印を合せ、大指を並べ竪てゝ各の頭指を押し、四處五處を印せよ）　心呪　（一）唵沒馱引路者儞娑縛二合訶

○次に大日外五　言五字明　○散念誦　大日胎　本尊大呪　頂輪王　七曜惣呪

八大菩薩惣呪　八大明王惣呪　破障　不動　三世　成就明（唵吒吒吒烏吒烏・鑁智鑁智・吒烏吒）

烏吒烏吒烏縛曰羅娑怛儞・嚩吽鑁穀・縛哩郝吽半吒吽

○護摩（召請等の印言第二を用ふ、芥子等同言）　○本尊段（一尊に之を供す。）　○諸尊段（中央金輪右に置て七喰、次に八大菩薩、次に八大金剛（印言大鈎召之に供せよ）　○後火天（有說）　○御加持（大呪を用ふ。伴僧同じ）

○曼荼羅の事　中央は佛眼　前は金輪　右に旋て日・月・火・水・木・金・土。　次に金剛手、文殊、虛空藏、彌勒、觀音、虛空庫、金剛拳、摧一切。次に步擲（フチヤク）、三世、大威德、大笑、大輪、馬頭、無能勝、不動。

次に八供四攝なり。此の尊に二あり。一、大日變（大日經の普通眞言藏品に見えたり。）　二、金剛薩埵變（埵獻經金剛頂吉祥大成就品に見えたり。）　觀行作法は檜尾の口決にあり。

○念誦の事　或は振鈴已前に伴僧大日五字を誦し、次に鈴以後佛眼眞言を誦す（小野の樣）

國譯澤抄第一　佛部終

國譯澤抄第二　佛頂部

○大佛頂　○金輪　○尊勝　○光明眞言　○後七日　付加持香水

(一)想へ云云　巳下道場觀。

◎大佛頂（息災に付く）

○一字金輪轉輪王　三十七尊諸聖衆　○種子　勃嚕吽（ボロン）　○三形　金輪。

○(一)想へ壇の上に𑖭字あり、法界に遍して大蓮花となる、蓮花の上に唵字あり、七寶の宮殿となる、殿の中に七師子の座あり、其の上に白蓮花あり、其の上に勃嚕吽（ボロン）字あり、變じて金輪（コン）となる、輪變じて攝佛頂輪王の身（即ち大日なり）となる。如來の形紫金色にして大丈夫の相なり、法界定印に住す、其の上に八輻の花輪を持す、右に旋て佛身、光聚佛頂・發生佛頂・白傘蓋佛頂・勝佛頂・除障佛頂・黃色佛頂・最勝佛頂・無邊音聲佛頂あり、此の外に七寶圍繞し、八恒河沙俱胝の諸佛如來圍繞す云云

○讃四智　次に不動　○印（業障除、五處を印せよ。）　○眞言　怛儞也二合他唵引阿曩嚩、阿曩嚩、尾舍那、尾舍那、滿馱（マンダ）滿馱滿馱儞、滿馱儞、吠引（ヘイ）、囉（ラバラ）嚩曰羅、二合（ハツ）播捉、泮吒吽、引（ハツタム）恢（ロム）啾、二合泮吒娑婆

二合訶

○正念誦　唵摩賀嚩曰囉悉捉灑吽怛嚧縛囉惡吽。　○又の印智拳　師說　○言怛儞也他の呪を用ふ　○散念誦　佛眼　大日　大陀羅尼　不動　難勝　忿怒

一字

○護摩　○本尊段一尊に之を供す、召請は業障除、印言上の如し、芥子等は正念誦の明を用ひよ。　○諸尊段八佛頂之を供す、或は中に大日を置き、普通佛頂印言

○後加持怛儞也他の呪を用ひよ。

此の法相應の物衆多なり、然して師說には之を用ひず、只だ普通の息災法なり、但し大壇・護摩壇は之を並べ行すべし小壇を用ひず伴僧八口若しは大陀羅尼を誦すべし。振鈴以後なり、一時別七反云云

○本尊の事　大佛頂曼荼羅を用ふるなり、中尊大日金輪、後に釋迦、金輪は七寶を廻らし、左右に竹草ある是れなり。大佛頂とは大日金輪なり。最勝佛頂を一字金輪と名け、一字金輪を大佛頂と名くるなり。大日金輪とは、謂く七獅子を以て座となし、首に寶冠を着し、智拳印に住するなり、釋迦金輪は螺形にして須彌山を以て座とせり、是れ天等の主なり定印の上に輪を置く此の大佛頂曼荼羅は、一字金輪の法に共通するなり、但し金輪曼荼羅は之を用ふべからず。一字金輪を以て本尊とするは大師の御傳なり、白傘蓋佛頂を以て本尊とするは後入唐の傳なり。小野は之を記す。

○普通佛頂印二手虛心合掌して稍〻深く交へて中節に至り、花の掌中にあるが如くせよ。眞言　歸命一摩鉢羅底賀多、舍引娑上囊南二唵斫訖羅二合轉舌底唵吽引三

◎◎金輪

⊙翳迦一鄔瑟捉灑訖羅韈底轉輪　○一字金輪遍照尊　八大佛頂諸轉輪　本尊聖者一字金輪　(一)八大佛頂諸大轉輪。　○增益に付て之を修すべし。時處軌に云く。瑜伽者は面を東にすと文り但し普通息災に付くは師說なり。　○行法常の如し。但し三力の偈の後ち、佛眼眞言、振鈴以後、後鈴本尊呪に至るまで一字金を打たざるなり。廣澤流

(一)壇の中に噁字あり、變じて七寶の宮殿樓閣となる、樓閣の中に七師子の座あり、座の上に紇哩字あり、八葉の白蓮花臺となる、臺の上に日輪あり、輪の中に勃嚕吽字あり、變じて八輻の金輪となる、輪變じて金輪王遍照如來となる、形ち素月の如し、一切の相好を以て用て法身を莊嚴す、金剛の寶冠を戴き輪鬘を首飾とせり、衆寶の莊嚴の具をもて種種に身を校飾して智拳印を持す、輪王の前の葉上に佛眼を觀す、餘の七葉の上に右に旋て七寶を布列し、眷屬圍繞す。

○振鈴　○次に大日　○本尊勝身印唵僕欠　○佛眼小呪印　○無能勝內縛して二頭指を竪て頭相ひ拄へよ。有說

(一)八大最勝に作る。一本に

(二)壇の中云云巳下道場觀。

○眞言有說　○阿閦（鳴古印　唵縛日乞叉羅吽）　○八供四攝等常の如し　事供等畢る。　○印（智拳言同）　○正念誦（大日、金言、本尊呪）　○又の印（智拳、敎唱吽を用ふ）　○次の印（勝身の印、謂く金合して中指を竪て合せ蓮の如くし、頭指を以て各の中指の背の上節に安け。）　唵僕欠　○次に佛眼（印言は常の如し。）　○散念誦　大日金　佛眼　本尊　孔雀　不動　無能

○護摩壇の底の輪の中心に敎（嚩吽字を書くべし。）　○本尊段（一燈に之を供す。智拳印一字の呪を用ふ、芥子同なり。）　○後火天段（中心に佛眼を置き廻りに七星、鈎召印言）　○後加持（一字呪伴僧同じ）　○禮佛（南無一字金輪三反　南無諸大轉輪一反）

一字頂輪王經に云く、菩提子の念珠、決定して上中下の悉地を成就するを得と文り

○念誦の事　或はいふ、振鈴以前には佛眼眞言を誦し、鈴以後は本尊呪、一字金の所誦は大日五字眞言と。（小野の説なり）

○尊勝

○梵號　(一)尾枳囉拏烏瑟尼灑　○密號　除魔金剛。　○尊勝佛頂轉輪王　八大佛頂諸轉輪　○行法（息災に付く）曼荼羅を觀すべし。

○(二)壇の上に大圓明の輪あり、三古を以て界道と爲し、寶瓶を以て分劑（ザイ）となす、其の中の圓明に唵字あり、法界率都波となる、變じて大日如來となる、五佛の冠を戴き瓔珞をもて嚴身せり、智拳印に住し七師子の上に於て結跏趺坐す、左の圓明の中に覽字あり、變じて白傘となる、傘變じて白傘蓋佛頂となる、右の圓に止（シ）字あり輪となる、輪變じて最勝佛頂となる、中圓の前に訶（カ）嚩（リン）字あり鈎（コウ）となる、鈎變じて尊勝佛頂となる、兩手齊下にして禪定に入るが如し、掌中に蓮花を承く、花上に金剛鈎あり、五佛の冠を戴き、蓮花臺に於て結跏趺坐す、中圓の後（クシロ）の圓に怛（ナ）陵字あり、佛頂の印となる、印變じて光聚となる、尊勝の左圓に苦（セン）字あり劒となる、劒變じて勝佛頂となる、尊勝の右圓に吒（タ）嚩（ロン）吽（ン）字あり五古となる、五古變じて廣生佛頂となる、光聚の左圓に室（シュ）嚩吽字あり蓮花となる、蓮花變じて發生となる、光聚右の圓に吽字あり商佉となる、商佉變じて無邊聲となる、下の左邊の半月輪の中に吽字あり五古となる、五古變じて降三世となる、右邊の三角の赤色の光中に賃（カン）字あり劒となる、劒變じて不動となる、像の上（かみ）に六箇の飛天ありと、是の如く之を觀想すべし。

師說に云く　中臺の大日の種子唵字變じて金剛鈎となる、鈎變じて法界體性智の尊勝となる、智拳印に住して七師子に坐す。

(一)尾云云　原本梵字、對譯文字は胎藏界軌所載除障佛頂眞言による。
(二)壇の上云云　道場觀。

(一)訶利云云原本梵字、對譯文字は胎藏龍軌による

(二)訶利云云原本梵字、今は胎藏龍軌除障佛頂眞言より對譯文字を拔出す。

(三)光明眞言の前に或はいふ、此の間に缺行ありと。

此の時には智印を用ひよ有說眞言は胎言

○鈴　○次に大日　○本尊　○七佛頂　○三世　○不動　或は又た卅七尊

常の如く、之を用ひよ

○印智拳、鈎　眞言　歸命(一)訶利二合尾枳囉拏半祖烏瑟尼二合灑、娑嚩二合賀引

○又の印二風を屈して掌內に入れ二大を以て上を掩ふ　眞言陀羅尼を用ふ　○正念誦大日本尊、胎言　○又の印智拳印、步嚩吽を用ふ。　○又の例鈎印　胎の言なり。　○散念誦　佛眼　大日本尊陀羅尼小心呪

八字　二明王　一字

○護摩召請等芥子の明は鈎印(二)訶利半祖烏瑟尼灑を用ふ　○火天　○本尊一尊を用ふ　○諸尊或は九佛二尊諸尊に供し了て八佛三尊は小約を以て各の一約　○後火有說　○世天　○禮佛　南無尊勝佛頂三反　南無諸大轉輪

○後加持陀羅尼を用ひよ伴僧同じ。　小心呪に曰く　唵阿密哩多諦惹縛底娑嚩賀

○(三)光明眞言

○勸請金剛界の如し別に本尊の句なし　○行法息災に付く台マタラを懸くるなり。　○種子　謨　○三形　索

或は嚩塔　○印外五　言台の五字　○正念誦大日本尊台光明の言　○又の印外五光明の言

四八八

○又の印片印なり右手五指を開いて想へ、五智の光を放ちて五道の衆生を照すと。光明の言　○散念誦　佛眼　大日先づ金剛界百反、次に胎藏三百反許り三時千反に當る　光明千反或はアミタ　不動或は炎魔天　八字　一字

○護摩　○本尊段召請の印、惠の五指を申べ風指を以て之を招く、光明眞言之を用ふ、供物同じ、芥子は胎五字の言なり。　○諸尊段八葉九尊等之を供す次に小約を以て普供養眞言を誦すること三度之に供せよ、曼荼羅の諸尊に供する意なり。五古印　台の五字の言之を用ひよ。　○後火天段滅惡趣尊に之を供せよ、印言は胎の如し　○後加持光明眞言　伴僧同じ

○或る說　金剛界曼荼羅を懸くるなり。

○智拳能滅衆罪と名く大光明印　光明眞言

○塔　○大日金　○智拳　妙高山の頂に高臺あり、其の上に阿字あり、變じて寶瓶と

○(一)彼法觀是れ本書の文に非るなり。

なる、寶瓶の中に如意寶珠あり、此の寶珠六十六箇國に往いて悉く五穀を降し、還り來りて寶瓶の內に入り、堅牢地神となる、大地に於て能く平福ならしむ云云

此の法は兩界に付て之を行ず、甲の年は胎藏、東に向へ伴僧の座は東を上となす乙の年は金剛、西に向へよ伴僧の座は西を上となす。

○息災護摩不動胎藏　爐底に劍を畫き行者北に向ふ。　○火天段常の如し　○本尊段招發鉢印同じく一字の明を用ふ芥子供物之に同じ。　○諸尊段五大尊に之を供せよ各別種子觀五古の印を以て惣して之を請す、眞言は慈救供物同じ　○後火天段地天に之を供せよ豆瓶鉢印、眞言は唵畢里底毘曳娑縛賀

(一)彼法觀傍に朱書に云く後七日と。

○世天段常の如し、但し火天の所杓を加ふるなり。　振鈴以後之を修せよ。

○増益護摩吉祥金剛　爐底に寶珠を畫く　行者東に〈〉向ふ　○火天段常の如し　○本尊段招請印　八葉に以たり　眞言　唵摩訶室利耶鬼娑縛賀　芥子供物同じ

○諸尊段四天王に之を供す、内縛して左右の火風開き立てよ尾吠（棒）多司。（戟）廣目。底哩（刀）持國。尾（刀）增長。或は各別の明、或は惣印呪に之を用ひよ。唵盧迦鉢里帝惹夜惹夜吽

○後火天段息災の如し　○世天段又た同じ　振鈴以後之を修せよ。

○五大尊供供物を箱へ次第に之を禮す、初夜一時或は三時に次第に懸けよ。甲年中は不動、乙年中は降三世　草草念誦法常の如し　次に智拳印唵縛曰羅駄覩鑁を以てす。次に不動印慈救呪並に四大明王印言を之に結び加へよ。　護摩燒供する裡に之を寄す。

○聖天供常の如し、後夜日中の二時に法の如く之を修す、北の庇行者東に向て之を修す、或は北に向ふ、云云

○十二天行法を修せずして供物を備へ次第に之を拜せよ、東の壁の北の端に多聞、次に伊舍那等常の如し、南の折壁に日天・月天（東は日、西は月）北の折壁に梵天・地天（東は梵天、西は地天）

護身法等常の如し次に大鈎召印、不動慈救呪並に大鈎召の言、若しくは十二天各別の言等を用ふるなり。

○神供初中後三ケ度之を供し、唆の南の築垣内に於て之を行ぜよ、胎は巽、金は坤。　○勸請發願本尊の句なし。　○(二)念誦　佛眼

大日　藥師　觀音　延命　不動已上は各の百反　吉祥天千反　一字

○讃　胎藏心略にて唵を加ふ　金剛四智不動　○禮佛兩界共に五大尊不動を加ふ三反。後夜の偈甲の年は之を誦せず。　○後酒

(一) 向　本文に北とあり誤たらん。

(二) 念誦　散念誦

持初夜後夜なり、御衣を渡さる　不動慈救呪之を用ひよ　○發願の句　本尊界會　大聖不動　四大八大云云

○香水發願に云く先づ大阿闍梨、香水桶の前に立ちて香水杖を捧げて發願する　伴僧同じく床子に立ちて同じき杖を捧げて作法せよ。　至心發願　加持香水　得大良藥　天衆地類　倍增法樂　護持聖王二反　玉體安穩　寶壽長遠　天下太平　萬民豐樂　及以法界　平等利益。

○次に五大願　次に慈救呪を以て同音に之を加持せよ。十二日丑の剋、豫め僧に仰せつけて香水を汲ましめ新桶に入れて八足の上に置き、楊枝杖等を之に在く神泉苑水云云先例に酒を造る司の水を汲む　は例に非ず云云十二日後夜の時より三日九時に香水を加持す。御加持以後なり。

○十四日御結願の事、此の日十五日後夜日中の二時を運んで御結願あるなり。御卷數あるべし、之を用意せよ。大阿闍梨平袈裟を着して上堂、入堂の弟子三衣笥を持して左脇机の上に置き、毎時相持して上堂し之を退出す。但し近來の作法伴僧は小袈裟を着す　此の法は本尊に於ては宗家の祕事たるに依て、長者大阿闍梨に非るよりんば之を知らざる所なり。

同夜大阿闍梨香水を加持せんために内裏に參せらるゝに、大師請來の袴衣を着し、曩祖付屬の五脂を持し、兼ねて又た水精の念珠を持するなり。兩達磨若し御物忌の時は南殿

の儀を行せらる、云云 多くは清冷殿の儀なり、長者大阿闍梨若し參御せば齊會の時に布施堂より諸僧共に內裏に參し、然らざる時は諸僧右兵衛の陣に參會して後、眞言院より參じ、先づ諸僧共に床子に着く、阿闍梨立てば床子より香水の机下に寄り長跪して坐す。但し南殿に於ては立ち乍ら作法す。次に五貼を香水器の右に置き、後に三部被甲護身等、次に五貼を取て先づ右器を加持すること廿一遍、次に左器を加持すること廿一遍す。又た惣じて兩器を加持することは氣色に隨ふのみ、次に散杖を取て香水に入れ、寛・鍐を以て各の加持すること廿一遍して後、散杖を器の上に置く、是は右器なり、次に左器又た此の如くして散杖を置く。次に先づ右の散杖を取て三度御前に灑ぐ。主上に灑ぎ奉る 次に左の散杖を取て先づ自身に灑ぎ、次に他身及び宮中法界に灑ぐ、此の間、五古を左手に持す 次に五貼を取て惣じて加持す、順逆各の三度 而して後ち軸中に於て五貼を持して、兩手を額に上げて少し頭を低げ、目を閉ぢて心一山を想へ云云

作法了て後ち本の如く床子に着す、其の後餘事等之れあらば御論議等なり。

國譯澤抄第二 佛頂部 終

國譯澤抄第三 經部

○孔雀經 ○仁王經 ○請雨經 ○法華經 ○理趣經 ○六字經

○孔雀經 支度並に伴僧夾名一度之を覽せ進らす。

○先づ大阿闍梨、宿所に付けしむ。二十口の伴僧各の宿所に行事僧之を沙汰す。○其の後堂莊嚴の事 大壇 護摩壇 聖天花瓶一口後方に之を立てよ委しくは口あり。 十二天花瓶なし 各承仕差分之を沙汰せしむ。○次に大阿闍梨、法を知る者を撰んで大壇を莊嚴せしむ。輪羯磨 用否は心に在るのみ。 又た中央の花瓶或は之を用ひず、尾瓶同じきが故か。 此の中の香藥各の本の書き付けを切り棄て、更に五方の字を書き、承仕に之を給ふ。有る說

○次に伴僧の夾名各の所作 護摩 聖天 十二天 神供 下番發願 を書き、並に上下番を大慢上に押す 但し上番の座は末程か。 事調へ了て大阿闍梨並に伴僧平袈裟を着して 但し伴僧は初後許り之を着す 皆壇所に參す 各の隨身に孔雀經 下臈伴僧を以て三衣の筥を持せしめ、筥上に孔雀の尾三筋を差し、左脇机の上に置て

後、後に經机に置く。是れ御加持料經は筥に入る。

○次に主上を御所に着せしめたてまつり了て承仕金を打つ。　○次に大阿闍梨法の如く三度禮拜して着座す、以下の作法は常の如し。　振鈴の後下番退出但し近來は早く出づるか　正念誦千反了て高聲に念珠を揉しむるの時護摩、阿闍梨座を立ち前後大壇を遶す　禮盤に着す作法は常の如し、但し投花には說あり。混屯供の時小壇兩壇各の表白・神分・祈願等あり　阿闍梨各の寄す、初夜は十二天、後夜日中は聖天　施天壇の時は神供師立つ。

○次に大阿闍梨念誦毎時一萬反了て下座し讀經す毎時一部、但し堪へざる人は一卷、初夜上卷、後夜向ほ上卷、日中は下卷、並に開白上卷、一部を足すの意なり、但し結願の時、禮盤上に於て念誦了て後ち下卷を讀む。大阿闍梨、天阿蘇羅の句を上げしむるの時、下番の金を打つ、仍ほ下番參會して後、大阿闍梨着座の後、供養・廻向・方便了て金を打つ時、即ち下番發願し了り、五大願伴僧の役なり了て打金せば即ち下座し了る。御加持伴僧上番許りなり了て退出す。○後夜の時。　大阿闍梨並に上番參會し着座し了て金を打つ、下番廻向し了て金を打つ、令法久住を唱へしむるの時、下番退出。○結願の時、下番の廻向これなし。　大阿闍梨並に上番參會し了て、　時に承仕、放慢張文、硯筆を相具し、大阿闍梨より次第に註を付けしめ、卷數の都合了て御卷數を書き入る。伴僧・下臈の所作一通案ずるに一通を脇机に置くを大壇の左方に立てよ。其の後ち大阿闍梨着座し御結願了る。○御加持經の下卷の小陀羅尼之を加ふ。大阿闍梨五貼・孔雀の尾を持して、漸漸に御前に近づき三衣の筥を取る、筥を居るに於ては暫く伴僧に持せしむ、若し勸賞ある時は大阿闍梨並に伴僧各の退出して更に束帶を着し參せしめ、御加持す、縱ひ勸賞なくとも、公家御修法結願御加持の時、御座あるの時は吾な束帶なり。故成就院大僧正、二間に於て御加持の時、本淨衣なるは聊か由緒あるか。近代此の議なし、只だ壇所の上に於て幔を曳かしめて布施す、皆な淨衣平袈裟なり。若し勸賞の勅使來告の時は凡人は禮盤より下て之に奉す。　法親王は只だ禮盤上ながら承け給はらしむ、頭を傾くるは少し情氣あるか。

大孔雀明王慈悲尊　七佛慈氏諸眷屬　三世佛母　大孔雀明王　七佛慈氏

緣覺聲聞　八方天等　諸宿曜等

○瑜或は鑁　○半月有る說。○印蓮花三昧耶印の如し但し口決　○(二)又た印言の用否いかん。

(一)劔印　又た印　大日

(二)眞言　孔雀明王の眞言の末に存を加ふ、是れ孔雀明王と金輪と同體なるが故なり。

(三)須彌山云云　道場觀。

○(三)須彌山の頂に紇哩字あり、八葉の蓮花となる、其の上に四肘の大壇あり、蓮花胎上に於て種子あり三形となる、三形變じて孔雀月王となる、白色にして白繒の輕衣を

着し、頭冠瓔珞をもて種種に莊嚴し、金色の孔雀に乘じ結跏趺坐して、白蓮花上に慈悲の相に住せり、四臂有て右の一手に開蓮花を執り、二手に俱緣菓（枳ち木瓜に似たり）を持す、左の一手は心に當て掌に吉祥菓を持し、二手には三五莖の孔雀の尾を執る、佛母の右邊より右に旋る。の蓮花葉の上に、始め微鉢尸如來より乃し慈氏等に至るなり。又た蓮花の外內院の四方四隅に於て辟支佛・四大聲聞衆あり、其の外に十二大天・二十八大藥叉並に諸宿曜等あつて之に坐す、卽ち道場の四面に開道ありて、其の邊の寶樹には無量の靈瑞鳥あつて佛德を讚嘆す云云

○振鈴　○智拳印言常の如し　○本尊印言常の如し　○七佛印言常の如し　○彌勒印言常の如し　○聲聞印言常の如し　○緣覺印言常の如し　○八供四攝常の如し　○前供養　○讃四智本尊普供養・三力・祈願等用心あるべし　○禮佛常の如し四攝の次　南無摩訶摩瑜利三反　南無毗婆尸佛　南無尸棄佛　南無毗舍浮佛　南無鞞句村那佛　南無鞞諾迦牟尼佛　南無迦攝波佛　南無釋迦牟尼佛　南無昧怛嚩野　南無波羅底契　南無阿難陀　南無羅睺羅　南無舍利母陀羅　南無迷努誐羅也　南無蘇菩提

○正念誦大日本尊千反　○散念誦　佛眼　大日金　本尊萬反　經下座するなり　不動或は用ひず。　八字　無能勝　(一)一字

(一)一字傍に註して百反といふ。

(一)召請云云召請、供物、芥子の傍註朱書に、言叉を加へずといふ。(二)發遣傍の朱註に、外縛の印常の如しとあり。

(朱)故永嚴法師、島羽院の御時、一時金輪の法を奉仕したまふ時（日蝕の御祈天陰に法驗あり）壇上に三寸の孔雀明王を安置せり（中瓶の奥に之を置く）是れ金輪と孔雀明王と通用するが故なり、大壇・護摩壇なし、只だ常の如くの修法には護摩壇計りなり、聖天壇あり（覺印之を修す）

○振鈴　○智拳印言金剛界の如し。　○本尊印左右の手內に相ひ叉へ、二大指を各の直く竪て頭相ひ註傳は外縛なり。へよ、卽ち結を成ぜば心に當て明七遍を誦せよ、但し師

眞言に曰く　唵麼庚引羅引訖嚩二合帝娑嚩賀　○七佛印言金剛合掌　歸命薩嚩沒馱冐地薩怛嚩紇哩捺野儞也吠奢儞曩莫薩嚩尾泥娑嚩賀　○彌勒印言金剛合掌右耳に轉ずる三たび左之に同じ　歸命摩訶瑜伽瑜擬寧瑜詣訖嚩唎欠惹唎計娑嚩賀　○聲聞印言梵餐印　歸命係睹鉢囉底也野、尾藥多、羯麼怛惹多吽　○緣覺印言內縛して火輪を立て峰圓に合せよ。　歸命嚩

○八供　四攝等常の如し　○護摩　○初火天段常の如し　○本尊段　(一)召請(二)發遣には本印言を用ふ　供物言同じ　芥子千遍同言　○諸尊段七佛　慈氏　緣覺　聲聞に之を供す　中央本尊　右より之を繞て　七佛慈氏等なり。　七佛阿五古　慈氏瑜賓瓶　四方四辟支佛婆錫杖　四隅四大聲聞計梵餐　召請發遣　大鈎召印言　供物言同じ　○後火天段常の如し

○仁王經

○三世佛母般若尊　五菩薩等諸薩埵　本尊界會般若佛母　五大力等諸大薩埵

○(二)地結の上、金剛墻の内に寶樓閣あり、無量の莊嚴周遍し羅列せり、内に大曼荼羅あり、曼荼羅の内に三重の界道あり、界道の外、壇の四角に於て四の寶瓶あり、四門に各の四寶の香爐あり、無量の供具周遍し陳列せり、内院の中心に蓮花臺あり、臺の上に遮羯羅字あり、字變じて十二輻の金輪となる、輪變じて金剛波羅蜜多菩薩となる、隨方光を放ちて普ねく曼荼羅を照すに、四大菩薩八供四攝、光に隨て顯現す云云

○中方般若　○種　吽　○三形　十二輻輪　○東　唵　五股　○南　怛洛　寶　○西

滿　劒　○北　吽　牙

○印　兩手の背を相ひ附けて二頭・二小を掌中に屈し、大母指を以て各の二頭・二小指を押し、餘の四指を直く立てよ。(是れ師說なり、軌の文は六指)想へ、此の印を菩薩に置くに其の中に八萬の法藏ありと云云。

眞言　唵地引室利二合輸嚕二合多尾惹曳娑婆二合賀

○正念誦　同言　○又の印　金剛縛して風を申べ針印の如くし四處を印せよ。　眞言　前の如し　○散念誦　佛眼　大日　本尊　五大力　不動　三世　一字

○護摩　梵護印言に用ふ。　○本尊壇一尊　○諸尊壇四大力　大鈎召印言を用ふ供具の時は各別の言　○後加持　前言を用ふ伴僧同じ。

(二)地結云云　道場觀。

遍照寺の傳は蓋幡等を用ひず。　敷曼荼羅は金剛波羅蜜を以て本尊となす時、之を用ふべし。

小野傳　祕密敎若持明者五大力等諸薩埵　五大尊に付て之を修す。　本尊不動尊　但し索手に輪を持せしむるなり。　劒印　祕となす

眞言　慈救呪

○護摩　○本尊段不動　○諸尊段五大尊　御加持　慈救　八色の幡之を用ふ　北に向へよ。　東白巽紅色南黑坤烟色西赤乾青色北黃艮赤白　已上瞿醯の說。

東方金剛手忿怒無畏十力吼菩薩眞言　唵嚩曰囉二合薩怛縛二合三漫多、跋捺羅二合縛日羅二合幡停三羅乞及二合合鉢四吽

南方金剛寶忿怒龍王吼菩薩眞言　唵嚩曰羅二合囉怛囉二合二阿迦捨薩婆耶二合摩訶摩抳三羅乞及鉢怛落

西方金剛利忿怒無量力吼菩薩眞言　唵嚩曰羅二合底丁以反乞及拏二合曼殊室哩二合摩訶庾駄羅乞及二合合鉢淡

北方金剛藥及雷電吼菩薩眞言　唵嚩曰羅二合藥乞及摩羅鉢羅摩嚧嚩曰羅戰拏羅乞及鉢

中央般若金剛菩薩明　唵嚩曰羅鉢羅惹婆羅訶多曳尾輸駄達麼他都嚩曰羅斫羯囉囉乞

又鈴吽

○五大力　一、金剛吼菩薩（執に云く金剛手菩薩）　眞言　唵嚩曰囉二合薩怛嚩阿入　二、龍王吼菩薩（執に云く金剛寶菩薩）　眞言　唵嚩曰囉二合囉怛那二合唵　三、無畏力吼菩薩（執に云く金剛利菩薩）　眞言　唵嚩底二合底乞瑟拏淡　四、雷電吼菩薩（執に云く、金剛藥叉菩薩）　眞言　唵嚩曰囉藥乞叉吽

五、無畏吼菩薩（執に云く金剛波羅蜜菩薩）　眞言　唵薩怛嚩二合嚩日里二合吽

○本説四香（最も用ふべきか。）　又た或る師云く　沈香東　白檀南　薫陸西　蘇合北

○○請雨經

○釋迦如來の印。眞言常の如し。　○種子　婆　金剛手菩薩例の如し。　○種子吽　正觀音の印、例の如し。　○種子　娑。

○一切龍印　二羽を覆せ空を絞む。　眞言に曰く　曩莫三曼多沒馱南難陀波曩多曳娑縛賀。　唵阿半波多曳娑縛賀。

諸事口に在て之を傳ふ　長暦三年二月十九日　傳授阿闍梨僧正法印大和尚位　仁海

先づ奏聞、公家五龍祭三箇日は陰陽寮の所爲なり。又た私に龍王の形（其の體は遠皆の如く茅を用ひよ）を造りて種種の妙法を供養して池中に放つ、卽ち大師の御時に龍王出現の處なり（但し當東門は地中の石上にあるなり）露地に於て作壇すとは（室屋の中に於て之を修せず、須らく池邊に於て修すべし、青幕を張りて之を修するなり）塗壇等の作法は本法の如し（諸説不同なり、但し阿闍梨心を用ひよ。）曼荼羅の圖二種に相ひ分つ、謂く大曼荼羅、敷曼荼羅なり。龍宮の中に釋迦・觀自在薩埵・輪蓋・難陀等（大となす）を畫き五龍王（數となす）を畫け。但し道場觀の時は、五龍の中、中心の龍王に至ては釋迦の前に觀ずべし。俗士とは俗に例ふなり。三(一)日食とは（乳・酪・粳米なり）四(二)聖とは（四方なり）八弟子とは（伴僧なり、但し諸説不同なり。）遺一呪師とは（護摩阿闍梨なり。）然れば護摩の時は如何んが釋迦・龍王等に供し奉るべき（增益に依る。）

本尊壇釋迦（種三・印・言・胎藏の如くなり。）　諸尊壇末觀自在薩埵輪蓋難陀等（薩埵在りと觀ぜよ、印・言・種・三・常の如し・輪蓋印・合掌・難陀印は胎藏の如し）

普世天壇五龍（諸龍の印言を用ふ胎藏の如し）　西門より出入來去して、其の餘の三門は輙ち入ることを得ざるはいかん。答ふ、龍の方なるに依るなり。

又た神供の處一説に非るなり、（但し道場建立の前池邊と云云）　修中の間、伴僧上下を禮拜す云云。　誦に曰く　天下法界　炎旱消除　甘雨普潤　五穀成就

敬て眞言敎主大日如來、四方四智四波羅蜜十六尊四攝八供、殊に別ては大恩敎主釋迦

(一) 日　白の字か

(二) 聖　一本に望に作る。

如來・觀音金剛薩埵等の諸大菩薩摩訶薩埵、三千世界主輪蓋龍王難陀拔難陀等の諸大龍王、並に五大龍王等の、不可說不可說若干の大小龍王等、惣じては兩部界會の諸尊等に白さく（常の如し）

摩訶毗盧遮那佛　四方四智四波羅蜜　十六八供四攝智　敎令輪者降三世

大恩敎主釋迦尊　觀音普賢の諸薩埵　五大龍王の諸眷屬　兩部界會の諸の如來

に歸命したてまつる。

國主を護持して御願を成じ　寶壽を增長して恒に受樂し　甘雨普ねく潤ひて五穀を成じ　國民萬民を安穩ならしめたまへ（以下常の如し）

五大願の末に云く（諸大龍王增法樂護持國主成御願、以下は常の如し）

至心發願　眞言敎主　大日如來　四方四智

四波羅蜜　十六菩薩　八供四攝　大恩敎主

釋迦大師　觀音普賢　輪蓋龍王　難陀拔難

五大龍王　諸大龍衆　兩部界會　諸尊聖衆

外金剛部　護法天等　還念本誓　降臨壇場

所設妙供　哀愍攝受　護持國主　消除不祥

消除災難　增長寶壽　恒受快樂　甘雨普潤

五穀成就　國土安穩　萬民豐樂　天下法界

平等利益

○五大願（常の如し）　南無摩訶毗盧舍那佛　南佛阿閦佛　南無寶生佛　南無無量壽

佛　南無不空成就佛　南無四波羅蜜　南無十六大菩薩　南無八供養菩薩

南無四攝智菩薩　南無沒馱　南無釋迦牟尼　南無觀世音菩薩　南無金剛薩埵

南無輪蓋龍王　南無難陀拔難陀　南無五大龍王　南無諸大龍王　南無金

剛界一切諸佛　南無大悲胎藏界會一切諸佛

所修功德　廻向三寶願海　廻向三界天人　廻向輪蓋龍王

廻向難陀拔難陀　廻向五大龍王　廻向諸大龍王　倍增法樂

離業證果（二句三反）　廻向國內明神　廻向行疫神等　廻向一切神等

廻向登霞聖靈　廻向貴賤靈等　廻向聖朝安穩（三反）

唯願本尊　大恩敎主　釋迦如來　觀音普賢　輪蓋龍王　難陀拔難　五大

龍衆　(一)兩部界會　諸尊聖衆　外金剛部　護法天等　還念本誓　同心加持　同心加護　消除不祥　消除災難　增長寶壽　恒受快樂　除災旱拔　甘露普潤　五穀成就(二句三反)　國土安穩　萬民豐樂　廻向天下安穩　廻施法界　廻向大菩薩

已上は觀音院根本僧都の傳なり。

△請雨經御修法支度　五間三面の屋一宇　三間一面の屋一宇　二寸半の板三枚　經机十前料　三寸釘十連　已上修理職。

五間菰屋一宇　三間の屋二宇　大壇　護摩壇　十二天壇　聖天壇　脇机六脚　燈臺十二本　禮盤二脚　棹十二　已上木工寮。

五色の糸各の二丈五尺納殿　蘇　蜜　名香納殿　五寶金銀瑠璃眞珠水精　五藥積椰子　訶梨勒遠志桂心甘草　五香安悉　薫陸白檀丁子龍腦　已上納殿

五穀大豆小豆粳胡麻　録　大炊寮　曼荼羅二槇(ナキリ)　御衣絹各四幅　折敷一枚　大青瓷器六十二　足桶二口　小青瓷(三)卅六口　花瓶十二已上内藏寮

閼伽器十一前三十六　火舍十一口　金青十二兩直布二段納殿　油七斗主殿寮　米廿一石　大炊寮壇供　幡三十旒一丈六尺五尺一流　一流一丈一流廿七流(六尺)　紺幕一帖紺布三段御牒　布二十二段納殿

二段金青直　一段佛師の淨衣　五段承仕五人の淨衣　十段駈仕十人の淨衣　二段見丁二人料　一段

已上納殿　紺布六段打敷三段壇敷三段

牒絹二十五疋　廿二疋淨衣料　阿闍梨二疋　伴僧二十人廿疋　幡卅旒四疋五尺一丈六一丈

絹二丈一丈五尺　五尺(七尺)　紺幕、大藏寮

掃部少充　鋪砂左右衛門各の五兩　鋪設掃部寮　已上藏人折紙案

米八十石　油七斗

○御修法所　○奉供　大壇供二十一箇度　護摩供二十一箇度　神供七箇度。

○奉讀　請雨經若干卷　佛眼眞言〻〻〻　釋迦眞言〻〻〻　觀音眞言〻〻〻

金剛手眞言〻〻〻

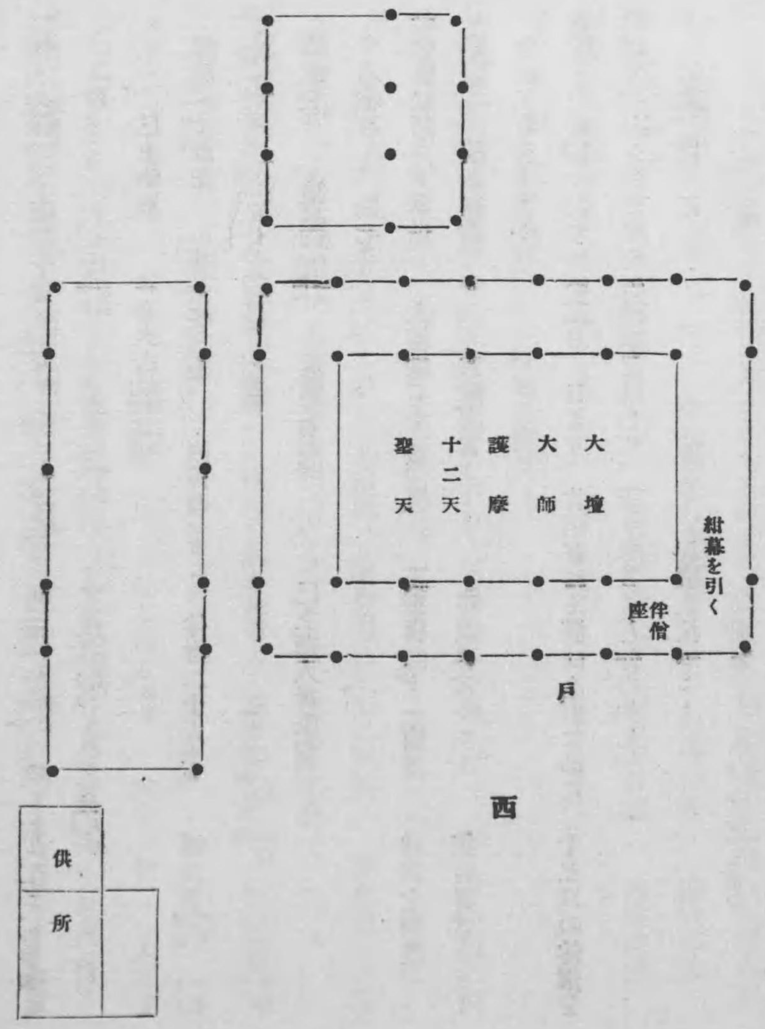
右は　宣旨に依て始め某月　日より、甘雨普ねく潤はんがために、十五口の伴僧を率ゐて、七ヶ日の間殊に精誠を致して、祈り奉ること件の如し。

年號　月　日　行事大法師〻〻

阿闍梨〻〻(小野僧正なり)

(一)兩部界會　傍に諸大龍衆に作る

(二)卅　一本に四十に作る。



長元六年癸酉六月十四日、神泉苑に於て請雨經を修し奉るに、始めて十八日より甘雨普ねく潤ふ。　同十九日、大極殿に於て五百僧を以て仁王經を讀み奉るに、無供にして一日之を行ず。

夏日に雨を賀する詞を書いて、左金吾の閤に獻ず前きの大僧正慶命

東南の風起て北雲生ず　旱を愁ふるの情、雨を賀するの情となる

陽石鞭に似て條灑の處　醴泉應さに酌むべし、靜かに降るの程

物、皇澤に霑ひ三農賑ふ　人、恩波に浴し四海平かなり

未だ秋天に及ばざれども皆な導と作る　茲より聖代永く西に成らん

餘威未だ休まず重て　平字大僧正慶命に次ぐ

玄德旁、湊て惠澤生ず　一句雨に感ず萬民の情

龍闕地久無爲の裏　鳳曆天長有道の程　禾穀豐にして登人樂み苏へ　煙塵斂りて盡く世は和平

明王賢相應さに合體すべし　聖日觀文自作成ず

台嶽和尙雨を賀するの詞を贈らるゝを見て酬ゆ　左金吾

雨は炎旱を消して物全く生ず　是に於て明王己を責むるの情
惠澤遍く覃ぶ千里の外　仁風遠く扇ぐ四夷の程
丹祈鄭重冥感を動す（大極殿に雨を祈る日、和尚を上とするが故にいふ）玉韻鏗鏘太平を歌ふ
君の文に答へんと欲し何をか憶ふ所　才華仰慕漢康成ず。　重ねて以て門下の侍郎
に奉呈す、
憶はざるに東山明月生ず　人皆な雨を請ひて丹情を盡す
周庭鳳舞す垂仁の昔　秦嶺松傾く進爵の程
皇澤彌〻催す田稼穡　民烟遍く識る代昌平
聖日に牽かる賢才の友　獨り拙筆を耕し纔に勤成る
天台座主雨を賀するの詩を作て、左金吾源ノ納言に奉呈す、余之を視て忽ち感ずる所
あり、仍て本韻を押す。　大内記　橘孝親
旱天豐澤蒼生を惠む、遠近惟だ呼ぶ幾適の情、七日上林行法の後（今年春夏雨らざるを憂ふ五月十四日公家神泉に於て請雨經法を修せらるるに十八日より雨脚忽ちに降る云云）一朝中禁轉經の程（同十九日、僧綱申請して五百の僧を大極殿に於て會し、仁王經を轉讀するに、即時に之に沛然たり雲の如し）
秋稼丹田の契、雨を賀するの聊詩白樣平（樂天、雨を賀するの詩あり、集の首にあるが故に云ふ）　柱下の小臣須らく早記
す、斯の文還て妬む先づ吾成ずるを。
側問す、天台座主と左金吾納言の雨を賀するの贈答の作、偷かに鄙懐を抽てゝ戸部
の尚書簷事正春宮大夫に奉呈す。
炎旱慘田發生し難し　詔來祈請するに驗、情に隨ふ
黎民業に感ず雲位の後　智者樂餘れり月暗きの程
陰漢の新聲上德に因る　陽臺の昔夢豈に昇平ならん
猥に賀雨の拙詩句を呈す　淡水自然に芳契成る
和端中納言、賀雨の詩に感じて神筆を揮ふの計　長秋監濟信
田園乾燥して未だ蘂生せず　高く宸襟を動ず稅穀の情
阿耨の遠波遙かに譟するの後（無熱地善く龍類の如く神泉苑に通ずる緣起に由て弘法大師遺誡云云）　上林の苑月始め陰きの程
油雲垂布して天膚厚し　甘澤遍ねく施す地乳平なり
獨り恥づ近來含潤の裏　詞華枯れ盡して韻遲く成ずるを。
近曾天台和尚賀雨の詩を作てより和する者多し、其の中に戸部尚書の草文あり、體

奇麗華實相ひ兼ぬ、情感に耐へず鏘を追獻して之に和す。

權大僧都　仁海

炎光赫赫大雲生ず　誰か神泉に向て情を致さゞる
密教東流して池湛へての後　聖皇南面して道行程
花を投じて雨を請ふに龍蛇見る（修法第六日赤蛇壇下に現ずるが故に云ふ。）　結水霑を分て井色平かなり
此の道何の因か斷せざるを知る　八旬老たりと雖も已に功成ることを。

玄宗の末年亢旱連月、金剛智を請して祈雨の法を行せしむるに、霈然として洪澍す、一人珍敬し四海稱歎して開府儀同位（是れ正一品なり。）を賜ふ。弘法大師凡僧たるの時、始めて宣旨を蒙て神泉苑に於て祈雨の法を修するに少僧都に任じ、並に東寺を給ふて一門庭と爲す、大僧都元杲　宣旨を蒙て同法を修し奉ること三箇度、毎度驗あり、始めて律師に任じ次に神泉苑に於て少僧都を蒙る、宣命の後ち權大僧都の職を賜ひ私師の元方に贈る、方今仁海　宣旨を蒙ること三箇度、祈雨の靈驗毎度掲焉たり、初め律師に神す、法今の兩年未だ其の賞を蒙らず。

敬て逸籟の樓歌一首を呈す。

龜山乃口に問波也世乃中を舊支流波絶ゆべき加若し。
法務和尙予が賀雨の和を視て、和漢兩箇の詞を綴り、花鳥一雙の思情を書す、感抑へ難く、能めんと欲して能はず、聊か本韻を繼ぐのみ。　白衣弟子藤濟信

敎法區分物に隨て生ず　詔命を含み乍ら幾か情を抽んず
先づ二羽を靡して持花するの裏　更に孤雲を吐いて雨を致すの程
業計緣嚮民戶潤ふ　德は薰じて紫禁泰かに階平
明の時唯だ逐ふ流跡の如きを　大器嗟く莫れ是れ晩成
山高み萬歲世呼ふ聲奈禮波問ふ人有らば答へ散らめや
禪林寺前の大僧正御和歌十月十八日到來
あめのした、ふりてよろこぶなかれをば、たゞもや壽留とおもふべしやは。

◎法華經

○梵號　釋迦冐地怛多藥他　○密號　寂靜金剛　○大恩敎主釋迦尊　證明一乘多寶佛　阿逸多等八大士　十方分身諸如來　舍利弗等諸內證　多聞持國十羅刹

(一)定印　法界定印。

(二)種子朱書して云く、𑖭は釋迦の種子なり、𑖪多寶の種子は𑖭

(三)印註して云く無所不至の印をば用ふるは平等大惠なりと。

(四)種子云云註に云く已下小野說なりと。

○釋迦　種子　婆(バタ)　○三形　鉢　○印智拳　○言歸命婆

○多寶種子　阿　○三形　塔　○印(一)定印言火界の呪の歸命の句の後に阿々暗惡の四字を加ふるなり。

○道場觀成就院抄の如し。　已上普通の次第此の如し。

○祕傳　○曼荼羅を觀ずべし。　○金剛界の大日を直に本尊と想ふなり。○(二)種子𑖭(朱)右智左理　○三形　率都波二佛同座　平等性智多寶　成所作智釋迦、法性塔内に住す。

○(三)印無所不至口傳あり　眞言　歸命縛日羅駄覩鑁　○正念誦大日本尊　金(朱)唵縛日羅駄覩鑁軌に說て云く

曩莫三曼多沒馱南、婆薩嚩吃里捨涅素娜曩、薩縛達摩、縛始多、鉢羅鉢多、誐誐曩、三摩三摩莎訶

○又の印智拳　言歸命𑖭　○散念誦佛眼の如く　大日(朱)金剛界許りなり　本尊(朱)釋迦　多寶(朱)前　歸命𑖭𑖪𑖭　經　降三世　一字　教令輪　三世

○護摩奉請印　智拳　芥子明　歸命𑖭　○御加持多寶の言を用ふ　伴僧同じ　曩莫薩嚩怛他蘖帝毗庾、尾濕(シムハ)嚩目契毗(ヒヤク)藥、薩嚩(サラタ)他、阿阿暗惡　已上廣澤流。

○(四)種子　𑖭　○三形　八葉赤　○胎大日本尊と成るなり。　○印法界定印　眞言

𑖭𑖪𑖭開因𑖭𑖪𑖭示行𑖭𑖪𑖭、𑖭悟證(ニリハ)𑖭𑖪𑖭入入𑖭佛の知見

○正念誦大日本尊　胎歸命婆　○又の印外五鈷　眞言胎大日　○散念誦大旨先の如し、但し降三世を以て不動に替ふるなり。

○護摩加持物　胎大日の言を用ふ　○本尊段二佛相並べて之に供せよ。釋迦𑖭鉢多寶𑖭塔　勸請供養は皆な多寶の印明を用ひよ無所不至の印𑖭𑖪𑖭𑖪𑖭　○諸尊段　八大菩薩之を供せよ中央の坐本尊、印言は胎藏の諸菩薩之を用ひよ。

○世天段　持國、十羅刹等を加供するなり。

曼荼羅は西方に向ふるは、增益に依るべきか、但し行者の願求に依て息災等又た咎なし、餘法皆な以て此の如し。

○御加持不動慈救呪

(朱)世天段に七曜、二十八宿を供し了り、十一杓を之に供せよ、所謂る持國と十羅刹となり。

多聞は十二天の内にこれあり、仍て持國許りを供するなり。十羅刹眞言は惣呪にて十杓之に供す。ゐ阿帝伊利野ソハカ

○師說　一乘敎主釋迦尊　多寶分身諸如來　普賢文殊諸薩埵　身子迦葉諸聲聞

梵釋多聞十羅刹　靈山會中諸聖衆

○略說　大恩敎主釋迦尊　證明法花多寶佛

此の法道場觀の以前に必ず寶山の印言を用ふべし、此の印を結ぶ加持力に由て、即ち此の寶山、其の壇中に於て轉じて鷲峰山となる。

大壇の中心には法花經一部を安置し奉るべきなり。又た讀經以前に先づ智拳を結び、十方佛土中の四句の偈を誦せよ、又た經中の妙義を思惟する者は、壽量品中の、常在靈鷲山の偈を差へよ。（謂く如來常に靈鷲山に在して、妙法を演說して衆生を化度したまふ。）

又た經を誦せん時は、先づ(一)普賢の印を結び、普賢三摩地に住し了て經を誦すべし、其の時に觀念せよ、舌端に於て八葉の蓮花あり、花上に佛有て結跏趺坐したまひて猶ほし定にあるが如し、想へ妙法蓮花經の一一の文字、佛の口より出でゝ皆な金色と作りて光明を具し、虛空に遍滿し持經者を圍繞すと、經を誦し了れ（或は一部若くは一卷、最略は一品、任意なり。）虛空に遍列すと、想へ一一の文字みな變じて佛身となり、虛來の頂法　等持して諸佛禮す

○智拳印を用ふる事　金輪軌に云く　(二)十方佛土の中　唯だ一佛乘あり　如(三)是の故に智拳印と名くと。

○或る師云く（小野）　曼荼羅の中の塔は、法界宮中の一大塔なり（二佛同座　塔法身多寶應身）

(一) 普賢印　外縛して二中指を立て合す。言語道斷印

(二) 十方云云　或はいふ此の文に依れば法花の法は智拳印を用ふるなり

(三) 是の故云云　已に智拳印を用ふ是の故に金剛界大日を以て本尊とするなり。

釋迦化身是れ三身卽一の義なり。此の法トロハ香、祕事となす（或はトロハ沈水香と文り蘇油に入る云云）

煎じて鉢に入れ中瓶の後に置く（結願了りて之を服せよ云云）

讀經者先づ不動の呪を誦して後に法花を誦すべし云云。十羅刹中、黑子（コク）は卽ち不動云云

(一) 藍、已下十字の外に梵字あるも乃ち之を略す。

○十羅刹眞言　唵阿帝伊利野（アティーリヤ）ソハカ。散念誦の時、無量壽命決定如來眞言を加へ誦すべし云云。　芥子供の時は五字眞言を用ふるなり（朱）（是れ小野の說なり。）

◎理趣經

第一段　金剛手　左拳は腰に安し　右は乳に當てゝ三度上下せよ。　吽

○第二段　大日　智拳印（但し如來拳印なり此れは智拳印といふ。）　唵

○第三段　降三世　五古印（內外共に之を用ふ、但し外は云云）　吽

○第四段　觀自在　二手金剛拳にして右の小指を以て、左拳の小指より之を開け、開くに隨て一一紇哩（二合）を誦せよ。　紇唎

○第五段　虛空藏　外縛して二風相ひ合せ寶形の如くにして頂上に安せよ。　怛覽

(一)右云云或はいふ、右拳を以て左拳の上に安し兩拳相合するなり。

○第六段　金剛拳　二手金剛拳にして(一)右を以て左の上に安せよ。唵

○第七段　文殊　左拳を左膝上に安して梵夾を持するが如くし、右拳を以て右膝上に立てゝ劒を持するが如くせよ。　暗

○第八段　轉法輪　小金剛輪印但し小指を鉤せず　吽

○第九段　虛空庫　左右劒印にして左を內、右を外にし互に胸を抱く如くし、胸前に一たび舞し亦た交へて頂に安せよ。　唵

○第十段　摧一切魔　左右の空を以て左右の水火の甲を押し、二小・二風曲め立てゝ口に當て、左右牙形の如くして三たび來去せよ。　郝

○第十一段　普賢　金剛合掌　吽

○第十二段　外金剛部　外五古印　底哩

○第十三段　七母　外縛して右の風三たび來去せよ。　毗瑜

○第十四段　末度迦羅　金剛合掌　娑縛

○第十五段　四姉妹女　金剛合掌　憾

○第十六段　無量無邊段圖は五部具會行金剛界曼荼羅をいふか。　印言なし或る師の說く印言あり、謂く吽の明を用ふ、金剛藥叉印云云

○第十七段　五祕密　五種の印あり　言は皆な重の吽字を用ひよ。　吽

○一、初段の印　二、蓮華合掌して、二小・二大を開き立てよ　三、左手大を以て水の甲を押し右は腰に安せよ月天の印に似たり　四、梵夾の印左手を仰けて右手を覆せよ　五、外縛印

○總印　外五股印或は三摩耶會金剛薩埵の印。謂く二中を立て合せ、二空・二地を開け　吽

○次に大樂眞言を誦するなり。唵摩訶蘇法、縛日羅薩埵夜、薩縛蘇怛吠尾瑜、弱吽鑁斛

◎六字經

大聖慈悲六字尊　蓮花部中諸聖衆　○道場莊嚴の事　○行法常の如し調伏に付て之を修す、或は息災

三力の偈の後ち、六口の伴僧、口別に一時に六卷、都合三時に百八卷なり、一字金之を打たず。

○種子　娑　○三形　獨古或は蓮花　○尊形正觀但

○道場觀　觀想せよ、鑁字八功德水となる、廣く法界に遍して涯際あることなし、其の中心の欠字變じて寶山王となる、四寶の所成なり。其の上に大樓閣あり、高うして中邊なし、諸大妙寶王種種に嚴飾せり、其の中に紇哩字あり、變じて蓮花座となる、

座上に娑字あり、轉じて獨古杵となる、杵轉じて觀自在菩薩となる、蓮花部の聖衆乃至天龍八部等、前後に圍繞す。

○鈴　○次に本尊内三古、有る說。眞言は常の如し　○不動鉤印慈救　○大威德棒印三字明　○八供四攝常の如し　○本尊加持先づ印言四處　○正念誦大日本尊

○又の印二手各の大指を以て中指の頭を捻し、而して左手掌を仰け、右手掌を覆せ、頭か左の大指中指の間に入れ、右の小指を以て左の無名指の頭を押し、右の無名指を以て左の頭を押せ、成ず、四處を加持す

眞言　佉知佉知毗知、縛壽縛壽、多知婆知

○散念誦　佛眼　大日　正觀音　六字時別に五百反、結線は百反に一結、三時に合せて十五結なり、但し結願の時八結、仍て七ケ日に百八結となるなり。（糸の長さ三尺五寸なり、所入五六尺許りか。）　大威德　經時別に一卷或は三卷　一字

○護摩

○本尊段招請等の印、内三古、眞言、常の如し　供物芥子同じ、百八の乳木了て三類形之を燒く、大威德の呪之を用ふ、（唵嚩哩なり）　夫に微妙物を以て生鹽に和し之を燒く、本尊の呪之を用ひよ。

○諸尊段六觀音・不動・大威德等なり、但し或は正觀音所入金輪、智拳印を以て敎鳴吽言を誦せよ、召請・供物之を用ふ。

○大威德段印内三古、常の如し、眞言　唵紇哩の呪　○世天段火天の處に約を加ふべし。

護尊了て鈴杵等を本の如く取り置き、後に六方結有る說、七矢の事、東南西北上下に六字あり障羅の諸鬼神等を射去るなり、其の後ち大金剛輪眞言之を滿すること廿一反せよ。眞言は吽發吒を加ふ。師說に云く六方に作てよ。

○禮佛　南無六字章句觀世音三反　○御加持本尊の呪常の如し

又說　勸請・莊嚴・道場觀・行法次第は前に同じ但し尺鏡を用ふることあり。　抑、傳に三樣あり。一、正觀音本流　二、曼荼羅小野　三、明王なり、今は是れ明王に付てなり。小野流

○種　哦　○三　多寶　○尊形黑色　六臂　或は赤肉色　○印輪印前の如し　○言常の如し　但し唵婆縛賀なし

○鈴　○次に大日　○正觀　○本尊　○八供四攝等　○正念誦上の如し

○散念誦　佛母　大日　本尊結線の事前の如し　正觀音　八字　大威德唵紇哩の呪　經一字

○護摩　○火天　○大威　○本尊内三古の印、之を用ふ、眞言は常の如し　○諸尊三十七尊常の如し、或はマタラ　○世天　○御加持本尊呪　○六觀音觀置の樣觀宿僧都は逆に之を置く。明詮僧都は順に之を置く。

○壇上の弓箭の事桑弓七張、長け一尺二寸、莖の箭四十九隻爐廻・各弓に一箭、七に之を編して順に置く、三角の爐の左右に各の三具、前のは金剛盤の下に置く、此の外また一具、左の脇机上に之を置く射る料なり、結願の時弓を射ての後ち、壇の廻の弓箭七具、並に脇机の弓箭等は、爐中に於て之を燒く。

○莊嚴の弓箭並に大刀の事例の大弓一張、箭六隻あり、また佛の右邊に大刀一腰を立つ、佛の左邊に之を立てよ。同じくソヤ六隻の内、（四筋は槪に副へ立て、二筋は鳥居に立てよ）

○乳木の事百八枚並に十二枚みな莖の箭なり、長さ四寸八指の量なり、紙を以て羽となす。

○三類形の事天孤地孤人形、但し師說は人天地に之を燒くなり、各の七枚、紙を以て三寸許りに之を彫り形木を以て之を擂る、師云く怨家を鉤召するに五大無碍觀を成ず。

結願の時には、護摩了て未だ物具を取り置かざる以前に之を燒き、其の灰を土器に入れて糸を相具し、施主の許に送る、糸は帶に之を持せしむべし、彼の灰は水湯(スモユ)を以て之を服せしめ、酒を以て服するなかれ、但し近代は此の事を用ひざるか。

○六字付曼荼羅　觀想せよ、心前に阿字あり、字變じて七寶莊嚴の宮殿樓閣となる、樓閣の中に七大月輪あり、月輪ごとに各の蓮花座あり、中央の蓮花上に勃嚕吽(ボロン)字あり、字變じて金輪となる、金輪變じて一字佛頂輪王の身となる、法界定印に住し、微妙の莊嚴を以て其の佛身を飾れり、餘の六蓮花座の上に各の蓮花あり、蓮花變じて六觀音となり、前後左右に圍繞せり、敎令輪不動大威德の二尊侍衛し合掌し、天子飛天等前後にあり、及び蓮花部中の聖衆みな壇上にあり、乃至天龍八部等前後左右に圍繞す。

○勃嚕吽　○劒一字金輪を以て本尊の樣とするなり。　○印智拳印　○言上の如し　○護摩　○本尊段召請等の印言は上の如し。　○諸尊段六觀音二明王(イ說)　○後火段大威或は常の如し。

息災に付て行ずる時は、葦の矢を用ひず、只だ例の乳木なり。調伏の時には爐底に劒を畫くなり。

曼荼羅の下○は鏡なり、大國の作法、深山に入る時は方尺の鏡を用ふ、其の鏡の面に惡獸の影を現ずるに、仍ち自形を見て惡心自然に退す、此の義を以て本尊の前に鏡を置くに、呪詛の神等自の影像を現ずるに、之を見て威神自然に弱くなるなり、是の故に之を置くか。

師說に云く、鉤召の印を以て怨家を鉤召するに五大無碍觀を成ず云云。卽ち想へ、法性內の五大と世界外の五大と無二無別なり、法界の五大と自身の五大と無二無別なり、故に法界卽自身、自身卽法界なり無碍の故に鉤召を安するか。

國譯澤抄第三　經部終

國譯澤抄第四

○聖觀音　○千手　○馬頭　○十一面　○准胝　○如意輪　○不空羂索　○白衣
○葉衣付鎭記　○大勢至

◎聖觀音

○(一)阿去引哩耶去嚩路引吉帝引濕拂二合羅正法金剛又本淨金剛　○大慈大悲觀世音　蓮花部中諸聖衆。

○行儀の二樣一、禪行儀軌別行に依るなり。一、念誦儀軌大法に依るなり。　○息災に之を行ず。○娑　○未敷蓮赤師說は獨貼を以て莖となす。

(二)壇中に𑖭字あり、八葉の蓮花となる、寶鬘蘂を具せり、其の上に阿字あり淨月輪となる、月輪中に娑字あり、黃金色にして無量の光明を具せり、其の字變じて未敷蓮國貼を莖となす。となる、變じて觀自在菩薩となる、身色黃金にして光明赫奕たり、輕穀衣を被、赤色の裙を着す、左手を齊に當て未敷蓮を執り、右手は胸に當てゝ開花の勢を作す、頭冠瓔珞あつて首に戴けり、無量壽佛及び蓮花部の聖衆前後に圍繞す。

(一)阿云云　原本梵字、對譯文字は小野眞言集所載に依る。

(二)壇中云云　道場觀

○印言內縛して右の大を立てよ。　唵阿盧力迦娑嚩賀　○正念誦大日本尊(朱)上の言

已上は觀行の儀軌に付て別行を說くと雖、今は金剛界の大法に依て之を行ずべし念誦儀軌の意なり。

○又た紇哩○　八葉蓮花　外縛して二頭蓮形にし、二大並べ立てよ是れ三昧耶の印なり。　(一)

唵嚩　曰囉、達磨紇哩ソハカ　已上念誦儀軌と文り今は前の說に付く、但し後の印言之を加へ用ふ。

○鈴　○次に大日　○本尊二　○八供四攝等。　入我我入の所に劒印を用ふべし。儀軌にあり、大日眞言口決

即ち觀ぜよ、自心の中に八葉の蓮花あり、中に於て阿字を想へ、金色の光を放ちて印と相應すと。彼の阿字を想ひて了りぬれば、一切の法本來不生なり、即ち眞言を誦せよ娜莫三滿多母馱南惡尾羅吽欠、眞言を誦すると八反して、印を以て身の五處を加持せよ。

○散念誦　佛眼　大日　無量壽　本尊上二　延命　白衣　八字　大威德　馬頭　一字。

○護摩　○本尊段初の印言を以て一切に用ひよ。　○後加持初の言を用ふ、伴俗同じ。

(一)唵云云　原本梵字あるも今は省略す。

(一)娑賀云云原本梵字、對譯文字は小野眞言集所載の千手心眞言に依れり。

(二)妙高山云云道場觀。

(三)散念誦無量壽佛並に多聞は必ずしも之を用ひず、但し小野は殊に之を用ふ。

◎◎千手

○(一)娑賀薩羅二合歩惹引阿引哩耶去嚩路引吉帝引濕拏二合羅大悲金剛　○千手千眼觀世音

蓮花部中諸聖衆　○息災に之を修す小野は敬愛に之を行ず。　○行法本軌に依れば金剛界に付く、仍ほ大師の御夾第等此の如し。

○紇哩　○紅蓮華但し師說は所求の物に依る云云。或は如意珠、此の法三形を用ひず(口決)

(二)妙高山の頂に八葉の大蓮花を想へ、蓮花の上に於て八大金剛柱あり、寶樓閣となる、蓮花臺の中に紇哩字を想へ、字より大光明を流出して遍ねく十方世界を照すに、所有の受苦の衆生、此の光に照觸して皆な解脫を得。又た大光明の中より紅色の蓮花或は如意珠を涌出す、蓮花變じて千手千眼の觀自在菩薩となる、相好圓滿にして威儀具足せり、十波羅蜜及び八供養等の菩薩、各の本位に住せり。又た樓閣の四隅に於て白衣・大白衣・多羅・毘俱胝等の四菩薩あり、各の無量の蓮花部の聖衆と前後に圍繞す云云。

○鈴　○次に大日　○本尊　○阿閦　○八供四攝等

○本尊印言二手金合して忍・願・相ひ合せ、檀・惠・禪・智・之を折り開いて、各の直く竪てよ。　唵嚩曰囉達磨紇哩　○正念誦大日本尊

○又の印八葉、秘印となす。　小呪を誦す前の如し。　○(三)散念誦　佛眼　大日　無量壽

正觀音　白衣　本尊大小　馬頭　八字　大威　(朱)大威德　多聞

一字。

○護摩　○本尊段初の印言を以て一切に之を用ふ。　○後火天段多聞天に之を供す、印は內に叉へて二水を立て合せ、二風鉤の如くして之を招け、小呪は常の如し

○後加持陀羅尼　伴僧同じ。

◎◎馬頭

○大聖馬頭觀世音　蓮華部中諸聖衆　○行法常の如し　息災に之を行す小野の說は調伏　○

含白馬頭小野は黑馬の頭之を用ふ。

(一)須彌山上に寶樓閣を觀せよ、中に蓮花臺あり、上に紇哩字あり、火光明を放てり、光明の中より馬頭威怒王の身を涌出せり、四面あり皆な忿怒し、虎牙上下へ出現す、八臂各の器杖を執れり、寶盤石の上に、蓮花の座に安坐す、彼の中面上、碧馬・頭髮螺焰の如し、身色赫奕として恰も日輪の如し、遍身の火焰劫火の威に逾たり、無量の眷屬と四方に圍繞して曼荼羅會を成ず。

○鈴　○次に大日　○本尊印呪の二は下に說くが如し。　○阿閦　○八供四攝等

(一)須彌山上云云道場觀。

○根本印 虚合して二風・二水屈して各の背を合せ、二大を微しく屈して相ひ去れ。師説に云く、二大を屈して二風の端、二空の甲と少し許り相ひ離せよ。　同呪　歸命含
吽佉那野、半惹薩囤吒耶莎訶　○正念誦 大日本尊心呪　○又の印 外縛して大指を立てよ、諦印となす。　心呪
唵阿密利都納嚩嚩、吽發吒、莎訶　○散念誦　佛眼　大日　本尊心呪或は兩呪　白
衣　八字　大威　一字。
○護摩 小野の説、壇は息災に塗り而も調伏に行ずるなり。　○本尊段 心印呪を以て一切に用ふ。　○後加持 根本呪　伴僧同じ

◎十一面

○大慈大悲十一面　蓮華部中諸聖衆。　○行法 常の如し　○息災に之を修す。　○迦　○
(一)軍持
(一)軍持 三摩耶形にして水瓶なり
(二)大海の中に須彌山あり、四寶所成なり。山の上に寶樓閣あり、其の中に曼荼羅壇場あり、壇の中に八葉の蓮花あり、其の上に淨月輪あり、月輪の上に迦字あり變じて軍持となる、變じて十一面觀自在菩薩の身となる、四臂を具足す。右の一の手に念珠を把り、第二手は施無畏なり、左の第一の手に蓮花を持し、第二の手に軍持を執る。十一面といふは、當前の三面は寂靜の相、右邊の三面は威怒の相、左邊の三面は利牙出
(二)大海云云　道場觀。

現の相、後の一面は(一)怒笑の容、最上の一面は如來の相、頭冠に各の化佛あり、種種の瓔珞を以て其の身を莊嚴す、蓮花部の聖衆及び護世の大威德天等悉く圍繞す。
○印 合掌して印を以て頂上に置け、即ち成ず。口傳あり。　小呪　唵摩訶、迦盧尼伽、娑婆賀　○正念誦 大日本尊上の呪
○又の印言 八葉、祕となす。唵嚕鷄入嚩羅紇哩　○散念誦　佛眼　大日　無量壽　本尊大小
正觀音　白衣　八字　馬頭　一字
○護摩　○本尊段 初の小呪印を以て一切に用ふ。　○後加持 大呪　伴僧同じ
但儞也他、唵那羅那羅 地哩地哩度嚕度嚕 壹知縛知、者鍐者鍐、鉢羅者鍐者鍐、炬蘇銘、矩蘇摩嚩鍐、壹里、旃里、(二)止里止致 惹羅摩跛曩也、跛羅摩 秫馱薩但縛摩訶迦嚕尼迦娑嚩訶
(一)怒笑 一本に笑怒に作る。
(二)止里 一本に止里止里に作る。

◎准胝

○准胝佛母大薩埵　(三)如來部中諸聖衆。○息災に之を行ず 但し行者東に向ふ云云　○沒
○賢瓶
大海中に蓮華あり、難陀・拔難陀二の龍王、共に蓮花の莖を扶く、花臺上に阿字あり、
(三)如來 或は蓮花に作る。

淨月輪となる、輪中に沒字あり、變じて賢瓶となる、賢瓶變じて准提佛母となる、身黃白色にして種種に莊嚴し、輕穀衣を着し白螺を釧となす、面に三目あり、身に十八臂を具す、上の二手說法の相に作る、右の第二の手は施無畏、第三の手には劒を把る、第四の手には數珠を把る、第五の手には微若布羅迦漢に子滿菓といふ、此の間にはなし、西國にはあり を把る、第六の手には(一)鉞を把る、第七の手には鈎を把る、第八の手には跋折羅を把る、第九の手には寶鬘を把る、左の第二の手には如意寶幢を把る、第三の手には蓮華を把る、第四の手には操罐を把る、第五の手には索を把る、第六の手には輪を把る、第七の手には螺も把る、第八の手には賢瓶を把る、第九の手には般若波羅蜜夾を把る、矜愍の眼を作して看る、行者の威儀具足し相好圓滿せり、乃至八供四攝等の菩薩恭敬し圍繞す。

○迎請印言 內縛して三鈷二大來去せよ　唵左鑠祖鑠、准胝、壹薩曳醯、薄伽嚩底娑縛賀

○避除印言 左右の大指を以て地水風の甲を押し、火の頭を立て合せよ卽ち成ず。印を以て身を旋すこと三匝せよ。　唵俱嚕憚那、訖惹　○鈴

○次に大日

○本尊 內三鈷。但し師說は、二空を開いて風の側に着け、二風を以て二火に付く、是を身印と名く、小呪を用ひて初に怛儺也他を加ふるなり。　○正觀音 內縛して右の大阿去引嚩引力迦（迦牛音呼）娑嚩二合賀引　○八供四攝等　前供養以下常の如し。　○字輪觀 常の如し　○本印

(一) 鉞 一本に斧の一字を加ふ。

(二) 唵云云 原本梵字、對譯文字は一字頂輪王軌に出ず。

言 前の身印並に小呪之を用ひよ。　○正念誦 大日本尊 大呪

○又の印 外縛して二風を並べて蓮形にし、二空を並べ立てよ、根本護身の印と名く、但し師說に內縛といふ。　心眞言　唵迦摩黎、尾摩黎、准胝ソハカ

○散念誦　佛眼　大日　本尊 小呪、常の如し。　正觀音　白衣　八字　馬頭

炎魔　一字

○護摩　○火天段 例の如し　○本尊段 前の身印並に小呪を以て一切に之を用ひよ。　○諸尊段 卅七尊六觀音 佛部の時 觀音の時 鈎印各の言を用ふ。

○後火天段 或は北斗之を行ず、小野の說なり。 召北斗印 眞言の初めに勃嚕吽字を加ふるなり。　○世天段 炎魔天倍杓三度　○後加持 大呪作僧同じ

娜慕颯哆喃、三藐三勃陀、俱胝南、怛姪他、唵、左鑠祖鑠准泥莎訶

○○如意輪

大聖如意輪觀世音　蓮華部中諸聖衆。　○行法 常の如し　○息災に付く　○(一)紇哩 怛洛 怛洛

金剛寶蓮 紅蓮の上の寶なり

心前に阿字あり、變じて七寶の宮殿樓閣となる、其の壇場の中に紇哩字あり、變じて紅蓮花となる、花臺上に阿字あり、變じて滿月輪となる、上に欠字、左右に怛洛怛洛

(一) 紇哩 一月輪一蓮花上に此の種子を觀ず。

字あり、三字變じて金剛寶と爲る、金剛寶變じて如意輪觀音となる、身色黃金にして六臂を具足せり、冠中に自在王あり、說法の相に住す、千の光明を流出して六道四生を照せり。右の第一の手は思惟、有情を愍念する相なり、第二手に如意寶を持す、一切の願を滿さんがためなり、第三には念珠を持す、傍生の苦を度せんとす、左の第一手は光明山を按す、傾動なきことを成就す、第二には蓮花を持す、能く諸の非法を淨む、第三手に輪を持す、能く無上の法を轉ず、六臂廣博の體にして能く六道に遊び、大悲の方便を以て諸の有情の苦を斷ず、八大觀音及び蓮花部の無量の聖衆前後に圍繞す。

○召請印言（內縛して右の大指を以て之を招け）　唵阿嚕力迦曳醯呬娑縛賀　○辟除　馬頭の印言を用ひよ（常の如し）　○鈴後　○大日　○本尊（三つ乍ら之を用ひよ）　○金剛藏（金剛部の三古の印なり。唵縛日羅納鉢縛耶娑縛賀）　○八供四攝等　已下常の如し。

○根本印言（掌を平にして心に當て、忍・願・蓮葉の如くせよ。進・力・摩尼形にし、餘度は盡く憧の如くせよ）　曩謨囉怛曩怛囉夜野、曩莫阿哩也嚩路枳帝、濕嚩羅野胎地、薩怛縛野、摩訶薩怛嚩野、摩訶迦嚕捉迦野、怛儞也他唵、斫羯羅鞅哩但、振跢摩尼、摩訶鉢娜銘、嚕嚕底瑟吒、入縛攞阿羯羅灑野、吽發吒、薩縛賀

○心印（前の印に准ず、地水結縛せよ。）　同呪　唵鉢娜麽震多麽尼、入縛羅吽（朱）是れ常の呪なり。

○心中心印（前印に准ず、二火縛して二水を立て合せ、二地を交へ立てよ。）　同呪　唵婆囉駄、鉢娜迷吽（朱）小野之を祕す云云

○正念誦（大日本尊　中呪を用ふ）　○又の印言（心中心印言之を用ふ。）　○散念誦　佛眼　大日　本尊四　八字　馬頭　金剛藏　一字。

○護摩　○本尊段（心中心印言を以て一切に用ひよ）　○後加持（大呪　伴僧同じ。）

不空羂索

○梵號　阿利耶謨伽波奢　○密號　等引金剛　○勸請　不空羂索大聖尊　蓮花部中諸聖衆　○種子　謨　○三昧形　羂索　此の法は三摩耶形を最も祕とするは師說に依るなり。　○道場觀（成就院七卷抄の如し。）

○根本印（二手蓮合して進・力・禪・智・金剛拳にして縛し、右手禪度を左手の虎口中に入れよ）　眞言（祕密心眞言と名く）　唵鉢頭摩陀羅、婀慕伽惹野泥、主嚕主嚕娑縛訶　惠果の傳中に之を用ふ、仍て廣澤流に之を流用す（小野僧正同じく用ふ云云）

○正念誦（大日本尊）　唵阿惹伽、吡闍耶、吽泮吒（作事業明と名くるなり）　○又の印（二手虛合して、二頭指を屈して中指の上節に當て、二大指を並べ押す。三十卷第三卷に出づるなり。）　眞言（事業明を用ひよ）　佛眼印言常の如し　○散念誦（佛眼、大日、無量壽、本尊二呪、八字、馬頭、一字）　○尊像（八臂の像）

(一)半拏云云原本梵字、對譯文字は十一面軌下卷所載による。

を用ひよ

○護摩召請、芥子等皆な作事業明を用ひよ。　○御加持祕密心眞言を用ふ伴僧同じ

◎白衣

○梵號　(一)半拏囉嚩引悉儞　○密號　離垢金剛　○種子　鉢　○三形　白蓮花　○道場觀。

壇の中に阿字あり、變じて月輪となる、月輪の中に紇哩字あり、變じて蓮花臺となる、蓮花臺上に鉢字あり、變じて白蓮花となる、白蓮花變じて白衣觀自在菩薩となる、首に天冠を戴き身に素衣を着せり、左の手に念珠を執り、右の手に印文を持し、足に白蓮花を踏む、光明赫奕として乃至無量の聖衆前後に圍繞す云云。

○根本印二手内縛して二頭指を蓮花形に作れ。　眞言　唵濕吠二合帝、惹致儞、半拏羅縛引悉儞、惹吒、引麼矩、吒駄引哩捉、娑嚩二合訶

○正念誦　唵濕吠帝濕吠帝半拏羅嚩悉儞涉㘑

○又の印惠の羽を仰げ施願にして、定の羽を拳に作り、進・禪の拳を合せよ。　心眞言　唵鉢羅拏捨縛哩吽發吒

○散念誦　佛眼　大日　無量壽　本尊中呪を用ひよ　八字　馬頭　一字

○護摩召請等は根本印中呪を用ひ、芥子は心眞言を用ひよ。　○後加持心眞言を用ふ、伴僧同じ。

◎葉衣

○梵號　阿里耶鉢羅奢縛利。　○密號　異行金剛。　○勸請　葉衣觀音大薩埵

蓮花部中諸聖衆　○種子　薩　○三形　未敷蓮　○道場觀六臂・二臂・相對の像に隨て之を觀ずべし、若し四臂を觀ずる時は、未敷蓮三形を用ふべからざるなり、二臂像の時は又た持物に隨つて消息あるべし。

○印八葉。但し六臂像は金剛合掌宜しかるべきか。　眞言　唵鉢羅拏一捨嚩哩三吽發吒三

○正念誦　同呪　○又の印金剛合掌　眞言上に同じ　○散念誦　佛眼　大日　聖觀音　本尊陀羅尼心眞言　八字　馬頭　一字

○護摩召請等八葉印言を用ひよ、芥子眞言同じ。　○御加持同呪　伴僧同じ。

葉衣を鎮する記

一　辨じ備ふべき事　先づ兼日に支度を送り、鬼宿の直日を擇んで等身の本尊像を圖繪すべ、具さには經文を見るべし胎藏に依れば圖は肉色

次に石四枚並に木札二十四札を作り、各別に二十八大藥及將の眞言を書くべし有說件の札は布或は紙を以て之を裹むべし、四枚の石に於ては銅筒に入るべし。自餘の支物は悉く支度に載せたり。

一　壇場の事　大壇は常の如し、但し息災に依て之を修せよ。　小壇の內、八方を巡て各位に白檀香を塗り、供物を備ふべし、但し中尊の料は殊に之を增加すべし行法の間多く口傳あり、發遣用意あるべし。

一　行法の事　七箇日を限りて之を修せよ、但し本尊並に札等、開眼供養の用意これあるべし。

大阿闍梨正念誦了て念珠を摺るの時、小壇の供師座を立ちて之に寄る初夜一時なり。

一　正鎭の事　第五日或は第七日の初夜例の如く供師小壇に寄る、或は結願作法了て本座に還着す。

大壇護摩供或は以前なり後供養以前、八口の伴助座を起ちて幕內に入り、更に三部被甲して各の八方の札を持し、吒枳王の明を誦して壇を遶ること三遍し了り、各の本尊の眞言を持念して、方に隨て立列す、阿闍梨方札四枚を取り上げ之を持念し、次に解法せしむ、伴僧高足に昇りて、天井上の上下の桁（ケタ）に於て之を打ち付けしめ訖る。

次に小壇の供師、四箇の石を以て道場の外に出で、承仕夫等を相ひ具し、卽ち四方の城廓の邊に、始め東方より次第に穴を堀らしめ之を埋む有說歸り入て本座に着けば、卽ち大阿闍梨後供養す。

一　結願の事　第八日々中の時、結願の儀式常の如し、但し破壇の後ち本尊の像を卷きて細櫃に納め、中心の梁上に安置し了て退出す。

○先行文　經に云く、若し此を作さんと欲はば、先づ我が前に於て此の葉衣陀羅尼を誦すること三十萬遍を滿し已て、然して後に作法すれば、驗に應せざるなしと文り。

○鎭護文宗叡の云く、葉衣鎭國と文り　法に云く、國界を護持し苦難を拔濟すと文り　又た云く、能く水火の災難を消除すと文り　又た云く、亦た能く方隅地異を鎭護すと文り

○車輅の次　○招請印右手左手の腕を把り、頂上に於て左手の四指を來去せよ。　曩謨吠室羅末拏薩也麽地以瑟捺羅薩也悉他波嚩都ソハカ。

○四天結護印二小刄へ入れ、無名・二中を開き立て、二頭を屈し二大を立てよ。　佛眼　大日　聖觀音　本尊（大・小）馬頭　不動　八方天　八字　護摩　一字　○小壇

○根本印胎藏諸夜刄の印を用ひよ　眞言二十八大藥刄各別の言　○讃諸天の讃之を用ひよ　佛眼　大日　葉衣藥刄等　各別の呪　慈護

(一)二十八大云云以下の眞言に原本梵字あれ共今は省略す。

(一)二十八大藥及將眞言　唵儞引囉伽二合吒枳吽弱娑嚩賀二合賀　唵布囉二合拏迦吒枳吽弱娑嚩二合訶　唵迦比攞吒枳吽弱娑嚩二合訶　已上東方四藥及

唵僧伽吒枳吽弱娑嚩二合賀引　唵塢波僧伽吒枳吽弱娑嚩二合訶　唵商企羅吒枳吽弱娑嚩賀引　唵難上娜上吒枳吽弱娑嚩二合訶　已上南方四藥及

唵訶哩吒枳吽弱娑嚩二合訶引　唵訶哩計奢吒枳吽弱娑嚩二合訶引　唵鉢羅二合僕吒枳吽弱娑嚩二合訶引　唵迦比羅吒枳吽弱娑嚩二合訶　已上西方四藥及

唵馱羅拏吒枳吽弱娑嚩二合賀引　唵馱邏難上那吒枳吽弱娑嚩二合賀引　唵塢儞庚二合哉跛羅吒枳吽弱娑嚩二合賀引　唵尾灑拏吒枳吽弱娑嚩二合訶　已上北方四藥及

唵半支迦吒枳吽弱娑嚩二合訶引　唵半左引羅猁拏吒枳吽弱娑嚩二合訶引　唵娑上跢儞哩吒枳吽弱娑嚩二合賀引　唵谷麽嚩多吒枳吽弱娑縛二合訶引　已上四隅四藥及

唵步莫吒枳吽弱娑縛二合訶引　迦蘇步莫吒枳吽弱娑縛二合訶　唵迦羅吒枳吽弱娑縛訶

唵塢波迦羅吒枳吽弱娑縛訶　已上四方地下四藥及

唵蘇哩也二合吒枳吽弱娑嚩訶　唵阿銀儞二合吒枳吽弱娑嚩訶　唵蘇摩吒枳吽弱娑嚩訶

嚩唵庚吒枳吽弱娑嚩二合訶引　已上四隅上方四藥及

葉衣の鎮、之を傳受すと雖、二十八大藥及眞言、梵本の說所未だ詳ならず、仍て孔雀經に付て之を書き出せり、後賢之を訣すべし。

葉衣鎮の事　支度別にあり

二十八大藥及將の札之を作れ（廿四木殘四石）牛王を以て各の其の明を書し（作法口傳）小壇に之を立てよ、即ち伴僧の中、法を知る人之を修す、大壇は振鈴の後着座せよ（作法常の如し）

東

○第一　○第二　○第三　○第四　○第五　○第六　○第七　○第八　○第九　○第十　○第十一

西

○第一　○第二　○第三　○第四　○第五　○第六　○第七　○第八　○第九　○第十　○第十一

北

○第一　○第二　○第三　○第四　○第五　○第六　○第七　○第八　○第九　○第十　○第十一

護摩例の如し伴僧八口、本尊眞言の次に八方天の明を誦せしめて、各の一天の明之を誦せしむ。

第五日若しは第七日、大陽の直日に當て之を鎭す、阿闍梨散念誦畢て座を起ち、伴僧五人相共に方位に隨て札を取り、各の本方に立て、三部被甲して吒枳王の眞言二十一反を誦して之を打つ委細は口決鎭し了て後に護摩之を修せよ。

◎大勢至

○大慈大悲得大勢　蓮花部中諸聖衆。　○索（サク）　○未敷蓮花

(一)壇中に蓮花あり、花臺上に月輪あり、月輪の中に索字あり、變じて未敷蓮花となる、蓮花變じて大勢至菩薩となる、身色肉色にして相好圓滿せり、左手に蓮花を持し、右手を胸に當て、地水火の三指を屈して赤蓮花に坐す、眷屬圍繞せり。

○印虛合して未敷蓮花の如くせよ　○眞言　歸命三髯（サム）、髯索（サムサク）、莎㘑　○正念誦大日本尊　印言前の如し

○散念誦　佛眼　大日　阿彌陀　本尊　馬頭　一字

國譯澤抄第四觀音部終

(一)壇中云云　未敷蓮。

國譯澤抄第五　菩薩部

○延命　○普賢延命　○五祕密　○普賢　○五大虛空藏　○八大文殊　○五字文殊

○彌勒　○隨求　○地藏　○轉法輪

◎延命

○三世常住延命尊　金剛部中諸聖衆。○𑖦　○五𑖩已上は師說なり。

壇上に𑖦字あり、寶蓮華座となる、其の上に𑖦字あり五𑖩金剛となる、轉じて延命菩薩となる、五佛の寶冠を着せり、右手に五古杵を持し、左手に金剛鈴を持せり、身色黃金にして相好圓滿す、四大天王翼從し侍衞せり。

○印外五古　眞言　唵嚩曰囉喻嚧娑嚩訶　○正念誦大日本尊　○又の印二手拳に作り進力相ひ鈎せよ。

眞言前に同じ　○散念誦　佛眼　大日　本尊　八字　降三　四天　一字。

○護摩本法增益或は息災　○本尊段外五古の印言を以て一切に之を用ふ　○後火天段四天王之を供す、惣印言之を用ひよ。　○讃四智例の如し。

(一)三世云云　勸請句なり、更に裏書に云く、發願は本尊聖者、三世常住、普賢延命、金剛部中、諸大薩埵と

(二)唵云云　原本梵字、對譯文字は金剛頂蓮華部軌所載による。

(三)朱書に云く、二手拳に作り二頭鈎結せよ、口決前の如しと。

○後加持上の呪　伴僧同じ。

○○普賢延命

○(一)三世常住延命尊　金剛部中諸聖衆。○瑜(ユ)　○甲曹

須彌山の頂に阿字あり、變じて七寶の宮殿となる、其の中に嚩字あり、變じて八葉の蓮華となる、華臺の上に四つの誐字あり、四大象となる、象の上に乾哩字あり、千葉の大寶花王の座となる、其の上に對字あり、圓淨の月輪となる、輪上に紇哩字あり、八葉の蓮となる、上に欲字あり、變じて金剛甲冑となる、而も轉じて金剛壽命菩薩の身となる、五佛の冠を着し二十臂を具足し諸の印を操持す、身黃金色にして諸相を具す、四大天王等圍繞せり。

○振鈴の次に　○大日常の如し、(二)唵縛日羅二合駄引都鑁　○本尊印二手拳にして頭指を相ひ鈎す。有る師の說は腕を合し擧ぐるなり。　眞言　唵漸婆羅、

に曰く　唵嚩曰囉、喻(ユ)嚩(セイ)妥嚩訶　○四大王惣印內縛して各の風火を直く立てよ。　眞言　唵漸婆羅、

奢羅(シャラヤ)、多羅耶(タラヤ)莎哥　○八供四攝等常の如し　○本尊加持前の印言、(三)唵縛日羅喻嚩妥嚩訶　○正念誦大日本尊

前に同じ　唵縛日羅喻嚩妥縛賀　○又の印外五古　眞言前の如し　○散念誦　佛眼　大日　本

(一)外五古印　朱書に云く外五古印、右頭を以て三度之を招くと。

尊(朱)前の呪なり。　執金剛眩の如し　八字(朱)八字文殊　三世(朱)降三世　四天惣(朱)四天惣呪前の如し　一

字

○護摩　○本尊段召請擬遣は(一)外五古の印眞言を用ふること常の如し、芥子供惣じて皆同じ、唵縛日羅喻嚩妥縛賀の眞言の末に召請の句を加ふること常の如し。但し發遣の時は喻嚩の句を除き、兼ねて蘇車々々の句を加ふるなり。例の乳木了て百八枚次に骨婁草百八枚之を燒く或は廿一枚、眞言は常の如し　次に芥子なり直の米、黃色クチナシに染む。(朱)常の增益芥子なり。　○後火天段四天王之を供す、惣印言を用ふるなり。東持國(底哩・刀)南增長(尾・劍)西廣目(尾・戟)北多聞(吠・捧)　○讃先づ四智次に金剛薩埵、但し大法の時なり。

○禮佛の句　南無延命菩薩三反　○後加持本尊の呪常の如し、(唵縛日羅喻嚩妥縛賀)伴僧同じ。伴僧は壽命經を讀むべきなり。或は降三世を說く云云、大呪常の如し。

堂莊嚴の事增益に付く、行者東に向へ。　○本尊等身一面二十臂像、四大白象に乘じ、象の頂上に四天王坐す。後東方天、左南方天、前西方天、右北方天　大壇上に天蓋を張り、蓋の四角に幡各〻二旒を懸く合して八旒黃色、蓋の色之に同じ。　○七層輪燈高さ七八尺許り、每層七燈を燃す。

○經机廿一前御經廿一卷卷別五卷　但し伴僧の數に依るべし轉經每日一千卷、口別五十卷。　○小燈臺廿一本　放

生每日四十九頭　○護摩壇本說に云く、黃土を以て方形を塗る。　○聖天、十二天等常の如し　○大阿闍梨

每時平袈裟を着す。　○伴僧開白結願許り之を着す、中間は小袈裟なり。

(一) 原本梵字、對譯文字は花藏院集所載に依る。

(二) 須彌山云云 道場觀。

○○五祕密

○(一)嚩曰羅薩怛嚩　○眞如金剛　○金剛薩埵五祕密　四種明妃諸菩薩。　○行法息災に付く、金剛界　○唵　○五股

(二)須彌山上に噁字あり、寶樓閣となる、其の中に漫怛羅あり、中央の月輪の中に唵字あり、金剛薩埵となる、金剛慢印に住す、前に摩字あり、欲金剛の形となる、服皆な赤なり、金剛弓箭の印に住す、右に訶字あり、計哩計羅金剛となる、白色にして金剛拳を以て臂を交へ抱印に住す、後に蘇字あり、愛金剛の形となる、服皆な青なり、左の臂を竪て摩羯幢を執れり、右の拳を以て其の肘を承く、左に磔字あり、慢金剛の形となる、服は皆な黃なり、二金剛拳を以て各の膀に安し、頭を左に向へ小しき伽むく、東南に縛字あり、香菩薩となる、西南に日羅字あり、花菩薩となる、西北に薩字あり燈菩薩となる、東北に怛縛の字あり、塗菩薩となる、四方に弱吽鑁斛の字あり、四攝の菩薩となる、四隅に素羅怛薩怛縛の字あり、嬉慢歌舞の菩薩となる、是の如く觀じ了て七處を加持す。

○鈴の次に　○大日　○次に五尊等なり。

(一) 五字云云文の前に欲觸愛慢金剛薩埵の五祕密の種子の配圖あれども今之を略す。

○先づ金剛薩埵大智印二羽金剛拳にして左を胯に置き、右手は杵を抽擲する勢にして心上に置け。　根本眞言に曰く　唵摩賀素佉、嚩曰羅薩怛縛弱吽鑁斛、素羅多、薩怛鑁　○次に欲金剛印二金剛拳にして左羽弓を執ると想ひ、右羽に箭を持し射る勢の如くせよ。薩嚩引尊囉引誐素佉、薩怛摩二合曩娑　○次に計里計羅印前印に准じて二拳を交へ胸を抱け。　薩怛鑁二合嚩曰囉二合薩怛嚩二合跛囉莫、素囉多入　○次に愛金剛印二手金剛拳にして左拳に右肘を承け、右の臂を竪て幢の勢の如くせよ。薩嚩冥、摩訶引素佉、涅哩二合住、掣野諾　○次に金剛慢印二拳各の胯に安し、左に向へ少しき傾け頂禮の勢の如くせよ。囉悉地也合左擺虞鉢羅、曩多入

言上に同じ。師云く五股唵摩訶素佉娑縛賀　○正念誦唵縛日羅薩怛縛噁。

○次に五祕密三昧耶印金剛縛に作り、忍・願・を屈して掌に入れ相ひ合せ、前の如くし、禪・智・檀・慈・各の相ひ拄へ獨股金剛杵の如くせよ。　素囉多薩怛梵

三合　○散念誦　佛眼　大日金　本尊十七字言　四尊　八字　三世　一字

○護摩　○本尊段五尊之に供す、印五字、芥子六字、言上の如し。　○後火天段三世に之を供す　○讃金剛薩埵　○後加持

十七字　伴僧同じ

(一)五字各別なりと雖、本誓一なるが故に、一五古となるなり是を以て秘となす

○○普賢

(一)觀想云云　道場觀。

(二)觀ぜよ　道場觀。

○普賢菩薩大薩埵　金剛部中諸眷屬。　○ぁ　○五古

(一)觀想せよ清淨法界宮大曼荼羅の中に阿字あり、變じて滿月輪となる、月輪の中に紇哩字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺の上に吽字あり、變じて五古杵となる、杵變じて普賢薩埵となる、大月輪に處して大寶蓮花に坐す、首に五佛の寶冠を戴き、身色は水精の如し、右手に五古杵を持し、左手に般若鈴を執り、白象王に乘じて大菩提心に住す、及び八金剛妃等、無量の眷屬前後に圍繞す。

○根本印　二羽外縛して二中指を竪てよ、但し師說に云く、阿佉各の開き立てよ。　眞言　三昧耶薩怛鑁　○正念誦　大日、本尊上の言　唵摩訶素佉、嘀曰羅薩怛縛、弱吽鑁斛、

○又の印言　二羽金剛拳に作りて左を膝に置き、右手金剛杵を抽擲し心上に置き、右の脚左を押せ　索羅多薩怛鑁　○散念誦　佛眼　大日　本尊初言　降三　一字

○五大虛空藏

○能滿諸願虛空藏　三十七尊諸聖衆。○種子・三形　五佛の如し。口授に云く三形寶

(二)觀ぜよ、己身の前に於て無量の乳海あり、海中に大蓮花王を出生す、金剛を莖となし、量法界に同じ、上に七寶の微妙の樓閣あり、花香雲海伎樂歌讃せり、麥尼を以て燈とせり、樓閣中に大圓明月輪あり、自身の量に等し、一圓明の中に於て更に分ちて五となす、中の圓明に於て鑁字あり、法界虛空藏となる、白色にして左の手に鈎を執り、右の手に寶を持す、前の圓明の中に吽字あり、金剛虛空藏となる、黃色にして左に鈎を持し、右は寶金剛なり、右の圓明の中に怛洛字あり、寶光虛空藏となる、青色にして左鈎し、右は三辨寶を持す、大光明を放てり、後の圓明の中に於て紇哩字あり、蓮花虛空藏となる、赤色にして左は鈎し、右には大紅蓮花を持す、左の圓明の中に唵字あり、業用虛空藏となる、黑紫色にして左は鈎し、右は寶羯磨なり、其の菩薩の衣服・首冠・瓔珞皆な本色に依る、各の結跏趺坐す、一曼荼羅の內の大威德の諸尊、圍繞し恭敬せり。

今此の五大虛空藏菩薩は、亦た是れ明星天子の本身なるが故に、明星圓明の中に處して、七曜・九執・廿八宿を以て眷屬となす、此の故に亦た金剛吉祥破七曜等の三眞言印を用ふ、此の五大虛空藏は大日三摩耶印、五佛の種子なるが故に、須らく先づ五佛と成り、次に轉じて五菩薩となる、法界の圓明を轉じて明星の圓明と成り、明星の圓明より法界の圓明に會へり、自餘の觀法具さに經說の如し。

○鈴の次に　○五菩薩印言各印の末に寶珠ありと想へ。

中央忍・願・相ひ合し峯針の如くせよ、是を法界虚空藏と名く。　唵縛曰羅鑁

東方進・力を改めて三鈷の如くせよ、是を金剛虚空藏と名く。　唵縛曰羅吽

南方進・力を改めて寶形の如くせよ、是を寶光虚空藏と名く。　唵嚩曰羅囉怛曩唵

西方進・力を屈して蓮花の如くせよ、是を蓮花虚空藏と名く。　唵嚩曰羅達摩紇哩

北方戒・方・進・力・互に相叉へよ、是を業用虚空藏と名く。　唵嚩曰羅羯磨

○金剛吉祥印二羽金剛拳にして檀・惠・を以て内に相鈎し、戒・方・を叉へ屈して拳に入れ、忍・願・相ひ合せ如くし、進・力・を屈して各の忍・願・の上節を捻し、禪・智・を以て各の忍・願・の初の文を捻せよ

唵嚩曰羅室哩摩訶室哩阿(一)彌底也室哩素摩室哩娑誐羅迦室哩母陀室哩沒羅賀娑跛底室哩戍羯羅室哩舍儞始者囉始制帝室哩摩賀三摩曳室哩娑縛賀。　○破七曜一切不祥印言内縛して指節を痛め並に二空を過め竪てよ。　唵薩嚩怛羅三摩曳室哩娑嚩賀。　○八供四攝等　○本尊加持外五古の如し口傳は中寶　鑁吽怛洛紇哩噁　○正念誦上の言に非ず、通用の佛母加持なり。　○本尊印前の如し　阿尾羅吽欠吽縛唎惡　○八字文殊印言前の如し　已上の(二)三種各の四所を加持す　○散念誦　佛眼　大日　本尊二　八字　破宿　軍荼利　一字　○佛眼印大呪、常(朱)本尊の具の如し。

○護摩壇增益に付く、小壇は必ず用ひず　○本尊段第一印言を以て一切に用ひよ。　○諸尊段前七尊皆な寶を持す。口に云く、寶部三摩地に入て各の虚空藏印を持す、五

(一) 彌　或はいふ爾の字か。

(二) 三種云云　朱書して云く、佛眼本尊、八字文殊、此の三呪、四處を加持するなり。

部富貴の法なり。　○讃四智　寶部　○後加持伴倫同じ。　歸命阿迦奢三麼多昆藥多、尾濕怛覽、鉢羅駄羅、莎哥

○八字文殊

三世覺母大聖尊　八大童子諸聖衆。　○行法金剛界に付て息災に之を修す、軌の說別行なり、大白直ちに之を修すべし云云經に云く宅内に舍利塔を安す文　○鈴(マン)　○青蓮花上五古或は劍、火炎なし、又た口傳云く一切無畏　○道場觀成就院抄の如し。

○迎請の次に召請印明を用ひよ(一)虚合して火を以て水の背を押し、二風を屈して二空の甲上に安せよ。　○振鈴次に　○大日金　○本尊印言は上の如し。　○八大童子印明は胎の如し。　請召童子、　計室尼、　救護惠、　烏波計設尼(シ)、　光網(マウ)　地惠幢、　無垢光、　不思議惠、

○本尊印内縛して二大を並べて四處を印せよ、經に大精進印と名く、此は是れ一切佛所說但し口決あり、眞言八字　○正念誦大日金本尊八字　○又の印虚心合掌して二水内に相ひ鈎し、二火を屈し背爪相合せ、二風を屈して二空の頭に着けよ、眞言前の如し　○散念誦　佛眼　大日台　本尊普通言　大威德或は佛慈護或は破障　一字。

○護摩　○本尊段印言内縛上の如し、八字なり。　○後火天段大威德之を供す、印は内三古、二風を開いて小呪を用ふ、供物芥子同じ。　○後

(一) 原本梵本、對譯文字は八字文殊軌所載に依る。

(一)唵云云 原本梵字、對譯文字は八字文殊軌に出づ

(二)阿云云 原本梵字、對譯文字は曼殊師利童子菩薩五字瑜伽法に出づ

加持(一)唵引阿引惡羅味引囉吽引佉左洛。伴僧同じ。

○八文殊種子の事 眞言の初め一兩字を取るなり、或は唵を除き曼を加へて之を用ふ。

印契差別門、要ず師に當て密かに受けよ。

五 ㄈ 福慶 室利 如意寶印 虛心合掌して二水を內に相ひ鉤して交へ屈して背むけて以て相ひ合せよ、二風を屈して二空の頭に着けよ。師說なり

六 ㄇ 七 ㄅ 息災天變 𑖨𑖽𑖿 五古 印內縛 口決あり

八 ㄅ 一 敬愛怨人 曼 蓮花 師說 印八葉 師說 惡人降伏 室底哩

四 ㄅ 三 ㄅ 二 劍 印小劍 師云く羯磨會利菩薩印なり、

○○五字文殊

三世覺母大聖尊 蓮花部中諸聖衆。 ○行法 息災に之を修す。 ○道場觀 成就院抄の如し。 ○種子 曼 ○三形 智劍 ○鈴の次に ○大日 ○本尊 ○四攝 ○八供等

○印 二手內縛して忍願を立て、劍形にして五處を印せよ。(二)阿囉跛左囊

○正念誦 大日本尊 金上の如し。 ○又の印 二手合掌して二頭折り屈し大指を其に入れ挍へよ是れ師說なり。 眞言(朱)上に同じ ○散念誦

佛眼 大日台 本尊 大威德 一字

○護摩 ○火天 常の如し 大威德

○本尊段 印第一にあり ○諸尊段 ㄈ ㄅ ㄅ ㄅ

○世天 後火天之を略す火天の虛杓を加ふる三度 常の如し

○種子の事 心月輪上に是の如く之を觀ずべし。

○敎令 大威德 或は馬頭

或は曼 金剛界劒同 胎藏界梵篋同 𑖨𑖽𑖿

○○彌勒

○當來化主慈氏尊 都率天上內院衆。 ○𑖨 ○塔

(一)須彌山云云 道場觀。

(一)須彌山の頂に紇哩字あり、八葉の蓮華となる、蓮華上に阿字あり、變じて七寶の宮殿となる、宮殿の中に圓明の月輪あり、三胎を以て界道となし、率都婆を以て分齊とせり、其の中央の圓明の中に𑖨字あり、變じて窣堵婆となる、窣堵婆變じて慈氏菩薩となる、身白肉色にして大光明を放ち、首に五佛の寶冠を戴き大慈三昧に住す、左の手に蓮華を持し、蓮華の上に法界塔印を置き、右手は說法の印に作り結跏趺坐せり、八圓明の中に四波羅蜜並に四供養の菩薩、各の本方本位に住す、下の右邊に降三世、

左邊に不動、上に六箇の首陁會童子あり、乃至曼荼羅の聖衆恭敬し圍繞せり。

○根本印合掌して二風を屈し甲を合せ二空を以て其の上を覆へ（朱）或る説に無所不至の印を用ふ云云　眞言　唵每怛嚩野阿莎㘑

○正念誦大日本尊　上の言　○又の印言合掌して左右に巡轉せよ　歸命摩訶瑜譏瑳寧瑜誐說縛利欠惹利計莎㘑　○又の印言内三古の印に似たり、但し中を開いて二風に著け二大を以て來去せよ。　怛涅他、鄔訖、妹怛利妹怛利、妹怛羅、莽曩洗妹怛囉縛婆鈙妹怛嚩納婆鈙、莽賀縛莽也、薩䟦賀

○散念誦　佛眼　大日　本尊　不動　降三　一字

○護摩　○本尊段召請・發遣・第三印言之を用ふ、（朱）唵每怛嚩野阿ソハカ　芥子供物第一言を用ふ、

◎隨求

○本尊聖者大隨求　無能勝等大明王。○息災に付て之を修す師説は金剛界曼荼羅に向ふべし云云

（一）須彌山の頂に金剛峰の樓閣あり、樓閣の中に大曼荼羅壇あり、其の上に師子座あり、座の上に紇哩字あり、八葉の蓮花となる、蓮花上に阿字あり、淨月輪となる、月輪の中に波羅字あり變じて梵篋となる、梵篋變じて隨求菩薩となる、身黃金にして八臂を具足す、右の第一手に五古を持し、次の手に鈴杵を持し、次の手に寶劍を持し、次の手に鉞斧鈎を持す、左の第一手に蓮花を持す、上に金剛光炎あり、次の手に梵篋を持し、次の手に寶幢を持し、次の手に索を持す、大光明を放ちて十方世界を照すに、斯の光に遇ふ者は解脫し得ずといふことなし、乃至八十俱胝の聖衆恭敬し圍繞す云云。

（一）須彌山云云　道場觀。

○鈴の次に三十七尊印言常の如し或は八印を用ふ。

○根本印第一二手内に相ひ叉へ、二中指を合せ竪て、二頭指・中指の後に於て微しき屈して鈎の如くし二小指・二大指合せ竪て微しく屈せよ即ち成ず、梵に縛日羅二合と云ひ唐に五鈷金剛杵と云ふ。

眞言　唵縛曰羅耶娑縛賀

○一切如來心眞言印第二二手左、右を覆ひ仰けて背相ひ著け十指互に相ひ背け鈎して竪てよ、斧形の如くせば即ち成ず、梵に跋羅戍と云ひ、唐に鉞斧といふ。　唵跋羅戍娑縛賀

○一切如來心眞言印第三二手内に相ひ叉へ、二中指跓へ屈して圓ならしめよ即ち成ず、梵に跋羅播捨と云ひ、唐に索といふ。　唵跋羅播捨

○一切如來金剛被甲眞言部第四二手合掌して二頭指中節を屈し合せ偃け頭（一）指跓へよ即ち成ず、梵に竭誐と云ひ、唐に鎖といふ。唵竭誐娑縛賀

○一切如來灌頂眞言印第五二手外に相ひ叉へ二無名指合せ竪て、二小指竪て交へよ即ち成す、梵に斫羯羅縛引と云ひ唐に輪と云ふ　唵斫羯羅娑縛賀

○一切如來結界眞言印第六二大指二小指の甲上に捻し餘指合して三戟叉形の如くせよ即ち成す、梵に底哩戍攞と云ひ唐に三鈷叉と云ふ唵底哩戍攞娑縛賀

○一切如來心中心眞言印第七二手外に相ひ叉へ二頭指跓へて寶形の如くし、二大指を並べ竪てよ、即ち成ず、梵に振多引摩捉と云ひ唐に寶といふ　縛振多摩捉

（一）指　或はいふ相の字か。

娑縛賀

○一切如來隨心眞言印第八（左手を以て仰けて心に當て五指を展べ、右手を以て左の上に覆せ相合せ平ならしめよ、卽ち成ず、梵に摩訶尾儺也駄羅尼と云ふ唐に大明惣持と云ふ）

唵摩訶尾儺也駄羅尼娑縛賀

已上八印は此の菩薩八臂所持物の標なり。

師說　○鏁　○ソトハ（口傳あり）　○印（五古）　言（隨心眞言）　○正念誦（同呪）　○散念誦

佛眼　大日　本尊（陀羅尼小呪）　八字　無能勝　一字

○護摩（召請印言前の如し、芥子は八印の中の第一言を用ふるなり。）　○後加持（隨心眞言なり伴僧同じ。）

◎地藏

○地藏菩薩大薩埵　寶部手等諸聖衆。　○賀　○金剛幢　○行法（息災）

壇上に蓮花あり、蓮花上に賀字あり、變じて金剛幢となる、金剛幢變じて地藏菩薩となる、外に聲聞形を現じ內に菩薩の行を祕す、福智の二嚴之を以て莊嚴となす、恒沙の萬德之を以て眷屬と爲す云云。

○根本印（二羽拳にして二中指を開け。）　眞言　唵賀賀賀、毗三摩曳莎訶　○正念誦（大日本尊上の言）

○又の印（盧合して二空を開き申べて風の側に着けよ。）　眞言　歸命訶訶訶素怛弩莎訶　○散念誦　佛眼

大日　阿彌陀　本尊第一言　焰魔天　慈護

○護摩　○本尊段（第二印言を以て諸事之を用ひよ）　○世天段（炎魔天杓を倍す、想へ始め炎魔法王より諸冥官冥道同じく之を供し奉れ。）

◎(一)轉法輪

○本尊聖者轉法輪　八大菩薩諸眷屬。　○本尊聖者　常轉法輪　八大菩薩　諸大眷屬　○行法（常の十八道の如し、但し四無量觀を加ふべし、調伏に付て之を修す（但し大鉤召印の時、別觀あるべきなり、調く十六大護並に日本の諸神等を勸請する意なり。）　○吽　○輪（(二)八輻或は千輻）　○(三)本尊　壇中に筒を立てよ（(四)向ふ方に說あり）　凡そ此の法は彌勒大慈三昧に住すべきなり（中心丸字、其の故あるか。）

(五)壇上に紇哩字あり、大蓮花臺となる、花臺上に阿字あり、滿月輪となる、月輪の中に吽字あり、八輻の大輪となる、輪變じて本尊となる、身色靑色にして右手を金剛拳に作りて腰に安し、左手は三胎杵を執る、相好圓滿なり、八輻の中に八大菩薩（理趣經の如きは或は八大明王）あり、各の本幟幟を持し、皆な本尊に相ひ向へり、外金剛部の五類の諸天並に妃后四方に坐す、如來の敎勅を蒙りて惡魔怨敵を降伏し、自身並に(六)某甲をして安穩な

(一)轉法輪　朱書に云く、此の法は永歟、高野御室に傳へ申さると傳ふ云云而も少々予が習と相違するはいかん。

(二)八輻云云　朱書に云く、八輻も輪の端劍形なり。

(三)本尊　朱書して云く、本尊は彌勒なり是を大輪明王と同じと習ふなり。

(四)向方　日本の諸神を行者の前に向はしむるなり。

(五)壇上　道場觀なり。

(六)某甲　施主。

(一)朱書して云く二手内縛して二大並べ立て二頭を屈し甲を合せ二大の爪甲上に置け。(二)唵云云原本梵字、対譯文字は轉法輪法所載によると。(三)朱書に云く、大金剛輪眞言なりと。(四)慈氏印或は掌いふ、二手虛心合掌して二頭を屈し二大を並べ其の上に覆せよ云云(五)明は原本梵字対譯文字は胎青龍執所載によると。朱書に云く芥子供物共小金剛輪眞言なり、縱ひ慈氏印明請召なり、猶遣に用ふ雖、小供物等は小金剛輪眞言なりと。(六)中瓶云云或は瓶の後、中瓶の前に立簡するなり。

らしむと。是の如く觀じ已れ七處加持すること常の如し。

○鈴の次に　○大日　○本尊二種印言小金剛輪を以て小呪と爲す、大金剛輪を以て大呪と爲す。　○或は次に降三世

常の如し　○或は次に十字佛頂(一)内縛して二風を屈し二空の背に挂へよ(二)唵嚩日羅薩怛武二合憂捉二合憂吽、發吒　○或は次に十六大護

等大鈎召印言を用ふ　○四攝等常の如し　○本尊印言師說は小金剛輪印を以てし大金剛輪眞言を用ふるなり。　○正念誦大日本尊大呪(三)

○大金剛輪印言　○小金剛輪印言或る師云く、眞言の終に娑縛賀の句を加ふ。　○散念誦　佛眼

大日　十字佛頂　本尊大小　降三世　一切成就明　一字

○護摩　○本尊段勸請奉送は胎藏(四)慈氏印明を用ふ、虛合して風を屈し、二空を以て風の上を押せ。(五)師命阿闍羅惹也薩嚩二合薩怛嚩二合者野野闍多、娑嚩二合賀　但し鈎召印は本尊の小呪を用ふるなり。芥子供物等同呪なり。　○諸尊段八大菩薩鈎召印言を用ふ、或は卅七尊常の如し(朱)大鈎召印明を以て八大菩薩を請するなり、發遣も此の定めなり。　○後火天段

常の如し、或は十六大護等は鈎召印言を用ふ　○後加持小金剛輪伴僧同じ、或る說に、大阿闍梨大金剛輪と云云若しは三世(朱)或は說く、御加持呪に降三世を用ふると常の如し。

曼荼羅の事　轉法輪の御筆の樣の萬荼羅喜多院にあり此の御筆佛眼萬タラの轉法輪菩薩なり云云未だ詳にせず　或は金

輪曼荼羅之を用ふ或は理趣經轉法輪菩薩マタラ之を用ふ。又た本尊に七種の樣あり。　一、無能勝　二、金

輪　三、地藏　四、轉法輪　五、彌勒　六、大輪　七、不動

謂く本尊曼荼羅其の說一に非ず但し師說は轉法輪菩薩之を以て說をなす。

憧の事本說は苦楝木、長さ十二指、周圍八指と文り、近代銅を用ふるはいかん(六)中瓶の前方に之を立つ。

(一)唵云云原本梵字、対譯文字は轉法輪法所載によると。(二)朱書して云く、輪の齊の中に阿字を書くなり、輪の齊には本體字あるに阿字を加ふるなり口決なりと。(三)腹中註して云く、怨家の形を畫いて其の上に不動を畫き怨家の腹の中央を踏ましむるなりと。

彼の憧の廻りにして二た計而も上みに十大藥叉の形を畫き、下に三大龍王・三大天后並びに日本の神等を畫く、若し銅を用ふれば彫り虛せ、憧の上下の蓋に八輻輪あらしめ、輪の端に廻りて十字佛頂の呪を書け(一)唵嚩日羅薩怛武二合憂捉二合憂吽欠吒。十字の外に勃嚩吽を加ふるを說と爲すなり。(二)

又た憧中に白紙若しは絹を入れ、怨家の形本法五尺或は七寸を畫き、兩足に於て怨家の姓名之を記す左姓、右名　又た行役の神像五頭の天王なり、一肘量を畫く、而して怨家の頭を踏ましめ、又た不動尊の像を畫いて而も其の(三)腹中を踏ましむるなり此等は最も極秘事なり努め能く能く隱便ならしむべし。憧行法の時に壇に安し紙を覆ふなり餘時は取て之を納む云云件の怨家の形は結願の時に爐火に入れて之を燒く(朱)五頭天王不動は燒くべからず、切り放つべきか、尤も用心あるべきなり。

灑水の事　潮に虵結の汁彼の皮なりを和合し灑水に並べ居え、供物の上に灑げ別に散杖を加ふ例の灑水の後用ふるなり。

(四)供物の事　例の佛供菓子の外、干棗・蓮根を佛供と爲す(朱)本體の菓を加へて卅二杯なり。

別藥の事　水青指石呂花石木蓮根引生鹽若し潮なくは、例の鹽を以て水に入れ之を用ひよ。

已上の物法成せざる時、器に入るゝ細末を佛供に塗る云云常に之を用ひず、承仕に

知らせず、件の佛供は人料に用ひざるなり云云引鹽或は蘇油を加ふ云云、此の儀吉し。

乳木の事　例の百八支乳木の次に廿支之を燒く命木を用ふ云云、師説は松の木なり。

相應物の事(一)　附子(フシ)、鐵末を鹽に和して芥子の次に之を用ふ小金剛輪言

部主の事　寶生尊　又た大日

敎令輪の事　降三世

（朱、文政七甲申年初秋、類本を以て校合し訖る　時淳

(一)朱書して云く水青指花石木引生了鹽等塗らしめ佛供をば人食ふべからずといふなり、此の物共塗る事はアザリ自ら此の事を致す、承仕などには知らしむべからざるなり。

國譯澤抄第五　菩薩部終

國譯澤抄第六　不動

○不動(付鎮宅)　○降三世　○軍荼利　○大威德　○金剛藥叉　○髮染王　○烏芻澁摩　○金剛童子

○○不動

○大聖不動威怒王　四大八大諸忿怒　○行法大法に付く或は別行　○息災　調伏災隨時なるべきなり

○(一)[illegible]或は[illegible]に作る　○智劒或は劒索　惠劒印明大惠刀　歸命憾　法螺印明前印、風空の甲の上に

す　歸命暗　已上二箇の印明は道場觀の前に用ふ。

壇中に憾字あり、變じて瑟瑟座となる、座上に憾(カンマン)鈴字あり、變じて智劒となる、智劒變じて不動明王となる、身色青黑にして童子肥滿の形なり、頂に七結の髮あり、七覺分を表す、左に一辮髮(ホツ)を垂れたり、一子の慈悲を顯す、右の手に利劒を執れり、三毒の惑障を斷ず、左の手に羂索を執れり、難調の者を繫縛す、遍身に迦樓羅炎を現ぜり、煩惱の惡龍を噉食するを顯す、寶盤山に坐せり、淨菩提心の傾動なきを表す、左右に

(一)或はいふ、或は[illegible]を以て種となす、但し漫きことなり。

二童子あり、右をば矜迦羅と名く、恭敬小心の者、左を制多迦と名く、難共語惡性の者、乃至四大(一)明王・十二大天無量の眷屬、前後に圍繞す。

○花座の次に寶山印明内縛して空を水に着けよ 唵阿遮囉吽

○鈴の次に　○大日　○本尊 劍印 慈救　曩莫薩縛沒駄 母地薩怛縛南 阿莽羅尾迦羅

○三三昧耶印明 金剛堅固にして内に相ひ叉へ 壇・惠・堅て開け、有師の説。

多帝爾儞阿羅逝莎哥　○八供四攝等

○十四印 立印儀軌の説、有師の傳、不動一字の明を用ひ歸命を加ふ。　○十九布字(二)定印　已上の兩條或は前供養の禮佛の後に之を用ひよ。

○根本印 二羽内に相叉へて二空、二水の根を押し、二火峯を空の面に住して、二風を合せ竪てよ、　火界の呪を用ふ 又た有師の説かく、一字心明を加ふと。

○智拳印、慈救呪 五壇中壇の時は、此の次に五貼印なり、外五古、慈救呪之を用ふ、其の外只の行法には然らず。　○正念誦 大日慈救

○次に或は火生三摩地に入る 定印は阿彌陀定印なり。

心月輪の中に覽字あり、變じて大智の火輪となる、即ち身中の惑障煩惱を燒盡す、其の火輪忽ち大日如來となり、周ねく法界に遍す、大智の火聚りて普く三界五趣の中の、所有の一切作障難者尾羅也迦等を焚燒す、各の身心悶絶して皆な三寶に歸依し、器界、衆生界、自身他身を燒淨す、唯ㄆ字のみ存して皆然として明白なり、自心の中にあつて即ち薩埵不動金剛の身となる、是の如く觀じ了れ。 火輪印を結び火界の呪を誦せよ。

○次に本尊加持 劍印 慈救 常の如し。　○三三昧耶印明 上の如し　○散念誦　佛眼　大日

本尊　四大明王　八字　一字

○護摩　○本尊段 劍印一字明を以て一切に之を用ふ。　○諸尊段 卅七尊、但し孟怒なり、印言は前の如し、或は五大尊、五古印(外五古)慈救呪(五古の印を五大尊に配し、慈救呪を五大尊に切配す)　○禮佛 或は四大明王終り に本尊句等なり。　○後加持 慈救 伴僧同じ

○不動鎮宅 永嚴常に此の定行の本尊は四臂不動なり、鎮宅には十二天を專にするが故に、天等の主は四臂不動なり、故に之を用ふ。

二大天諸眷屬　大聖不動威怒王　十

○行法 別行　○息に災之を修す。　○慽　○獨胠。　十二天の種子に通別あり 師説は吽字を通じ用ふ。

○尊像 中央の本尊四臂廻り十二天なり。　○道場觀 十二天供法の如し　○(二)閼伽の後に寶山印言を結ぶ 金剛界にあり。

○次に荷葉印言 常の如し。　○振鈴の次に　○大日　○本尊 劍印 慈救　○八供四攝等

○本尊加持 二手金剛拳にして頭指、小指各の曲めて鉤形の如くし、口の兩角に安し相牙の如くせよ。　○不動一字明 歸命、敕令 常の如し。

○又の印 二拳の背相ひ合せ、各の空を火風の間に出せ　慈救呪 但し師説の終り勃鳴吽字、養莫三曼多縛曰羅南賛拏、摩訶路娑拏娑頗吒也、吽怛羅吒、憺滿敦鳴吽。此の如く加ふべきなり。

(一) 一本に四大の下に八大の二字あり

(二) 定印　阿彌陀定印なり。

(一) 閼伽云云　冠註に云く、閼伽の後に寶山印、荷葉の印許り之を用ふ、八葉の印は之を用ひずと。

(一) 大鈎召云云 冠註に云く、大鈎召の印を結び先づ不動一字の明を誦し、次に大鈎召眞言を誦し、大鈎召の末に醫醯曳吽の句を加へ、大鈎召の印三度之を招くの間、兩眞言を誦するなり。

○正念誦 大日不動一字明

○又の印 (一)大鈎召印常の如し、兩眞言の內、大鈎召の眞言は十二天を召請するの心なり、先づ不動一字の明、次に鈎召の言の末に醫醯曳吽の句を加ふるなり。

○次に佛眼印言 例の如し

○散念誦 佛眼 大日 本尊慈救

○鎭宅の呪 曩莫三曼多縛曰羅敷戰拏摩訶路灑拏羅乞及羅乞及鞞薩縛訥瑟吒鉢羅訥瑟吒南縛曰羅跛播使多滿駄野縛曰羅佉儼囊駄破吒耶吽怛羅吒唅鞞曰里

○加持所住處眞言 歸命怛羅吒婀慕伽賛拏摩訶路灑拏娑頗吒也薩縛尾覩南麼麼娑縛娑底扇底始鑁茗婀左擺黨矩嚕怛羅麼也怛羅麼也吽怛羅吒憾鞞。

○四大明王 ○八字 ○地天 ○一字 ○禮佛四大尊を加ふ

○護摩大壇に嗚す。印を以て搖動すべし(別に二頭二小許りを招く斗は之れなし、印を惣べて動すべきなり。)

○本尊段不動召請發遣牙印前にあり、一字明芥子供物同呪、

○世天段十二天之を供す、常には十二天、七曜、廿八宿を供するを、是は十二計りを供して、七曜、廿八宿等之れなきなり。

○小壇十二天但し中尊は是有無は隨時か。も四臂不動なり、小杓を以て一杓づゝ十二天に供する事常の如し。

抑〻結願の後、本尊を細櫃に入れて寢殿の梁上に安置して退出し、本尊を櫃に入れて梁上に釘にて打ち付くるなり、一處計り打ち付け。予問て云く、本尊の表紙に眞言を書す、又た本尊を籠むるの時加持等あり用ひざるか。答へて云く、用ひずと之を習ふ、表紙に眞言を書く事はさもあれども、人の意巧にこそ、加持のこと知らざるなり。

○降三世 ○行法金剛界に付く ○調伏に之を修す。 ○吽

○大聖金剛降三世 四大八大諸忿怒。

○五古

(一)壇中に八葉の白蓮華あり、蓮華の上に吽字あり、變じて五古金剛杵となる、杵變じて降三世明王となる、四面八臂にして身色青黑なり、火光體に遍ふして左足に大自在天を踏み、右の足は烏摩后を踏む、乃至金剛部の諸尊、無量の眷屬圍繞せり。

○鈴の次に ○大日 ○(二)本尊根本印明常の如し、順逆に加持す。 ○又の印外五古譚林寺傳 唵遜婆顎遜婆吽縛曰羅吽泮吒 ○八供四攝等 ○本尊加持根本印言前の如し。 ○正念誦大日本尊小呪

○又の印外五古小呪

一字 ○護摩 ○散念誦 佛眼 大日 不動 本尊大小 八字

○本尊段小呪印言を以て一切に用ふ ○後加持大呪 伴僧同じ

○軍荼利

○甘露軍荼利大明王 四大八大諸忿怒。 ○行法金剛界或は別行 調伏に付て之を修す。

○吽 ○三古

(三)壇上に寶樓閣あり、寶樓閣の中に阿字あり、兩邊に吽字あり、變じて三股杵となる、

(一) 壇中云云 道場觀。

(二) 本尊云云 傍註に云く、金剛界等の如し。

(三) 壇上云云 道場觀。

變じて軍荼利明王となる、大悲方便を以て大忿怒形を現ず、四面四臂にして右手に金剛杵を執り、左手は滿願の印なり、二手羯磨の印を作り、身に威光焰鬘を佩たり、淨月輪の中に住す、青蓮華色にして瑟瑟盤石に坐せり、無量の眷屬恭敬し圍繞す。

○鈴の次に　○大日　○不動 劔印 慈救

○本尊印言 内三古　曩謨羅怛曩怛羅夜也曩莫室戰拏摩訶縛曰羅俱路駄野唵虎嚕虎嚕底瑟吒底瑟吒滿駄滿駄訶曩訶曩婀密哩帝吽發吒 或は娑縛訶 の字あり

○又の印 右手を舒べ開いて大、小指之を捻し、左手亦た此の如くす、右、左を押し臂を交へよ。　唵婀密哩帝吽泮吒　○八供四攝等

○本尊加持 第二印言之を用ふ、羯磨印と名く。　○正念誦 大日本尊小呪　○又の印 内三古大呪を用ふ　○散念誦

佛眼　大日　不動　本尊小呪　八字　一字

○護摩　○本尊段 羯磨印小呪を以て一切に用ふ。　○後火天段 或は炎魔天之を供す。　○後加持 大呪　伴僧同じ。

○大威德

○焰曼時迦威怒王　四大八大諸忿怒。

○行法 大法に依る。或は別行　○調伏壇に付く 儀軌に云く三角に作り西に向へよ。　○紇哩 或は三字の明を用ひて種子となす。　○寶捧

（一）寶捧印　傍註に云く根本印なり。

（二）本尊加持　冠註に云く、初の本尊加持には宗叡大師の如く之を用ひ第の如く正念誦の後本尊加持には大師御傳の如く之を用ふるなり。

（一）寶樓閣の中に大曼荼羅の壇あり、壇の中に紇哩字あり、變じて如意棒となる、如意棒變じて焰曼德迦明王となる、身に六首・六臂・六足を具して、六趣を淨め六度を滿し六通を成ず、青水牛に乘じて種種の器杖を持し、髑髏を以て瓔珞頭冠となし、虎皮を裙とせり、其の身は長大にして無量由旬なり、身に遍ねく火焰あり、洞然として劫燒の如し、四方を顧視して師子奮迅の如し、乃至無量の忿怒の眷屬前後に圍繞す。云云

○鈴の次に　○大日　○不動 劔印 慈救呪　○本尊根本印 内縛して二火を立て合せよ、師曰く捧印となり。根本印なり。

○大心眞言 儀軌は勝根本の眞言を說く、但し師說に依て之を用ふ。　唵紇里瑟室梨尾紇里多娜曩吽薩縛設咄嚕娜捨也薩擔婆也薩擔婆也娑發吒娑發吒娑縛賀。

○心印 内三古 大指縛す。師說　○心中心呪　唵瑟致利迦攞嚕波吽欠娑縛賀。

○八供四攝等 口傳に云く調伏の時（一）棒印を結ぶの時、二中指の間に細家を觀ずるは降伏の義なり、棒を以て降伏するなり。

○（二）本尊加持 前の根本印　○大心眞言　○心印 前の如し　○心中心呪　○心中心印 前の印に准じて二風を開き立てよ 三字の明　唵噁吽

巳上三個の印言の次第は宗叡僧正の傳 或は初の一印を以て三呪に用ふ。祕と爲す云云

○正念誦 大日本尊心中心呪、字を以て身分を置く、本尊三摩地に入るとはいふなり。　○根本印 前の如し 三字の明 或は又た本尊三摩地に入るに、同印七字を以て我が身分に置く等は本尊に同なり。　○心印 前の如し　○大心眞言　○心中心印 前の如し　○心中心呪　巳

上の印明次第は大師の御傳なり。

○散念誦　佛眼　大日　不動　本尊大小　八字師說　三世　慈護師說

一字

○護摩　○本尊段心印心中心呪を以て一切に用ふ　○後加持心中呪伴僧同じ

○○金剛夜叉

○金剛夜叉大明王　四大八大諸忿怒。　○調伏に付て之を修す本軌に云く三角壇を作て惡人の方に向へよ。

○行法大法に付く、或は別行　但し道場觀以前に、惠劍、法螺の印明を用ふべし不動法の如きなり。　○吽又た𑖩𑖽

○五古師說なり、或は牙。

(一)壇中に蓮華臺あり、臺の上に種子あり、變じて三形となる、三形變じて金剛藥叉となる、五眼忿怒形にして三面・六臂あり、三首馬王髮あり、瓔珞其の身を莊り、威猛暴惡にして火焔熾盛なり、乃至金剛部の眷屬前後に圍繞す。

○鈴の次に　○大日　○不動鈎印慈救呪　○本尊根本印戒・方・忍・願・を内に叉へて檀となし檀・惠、を曲げて鈎の如くし、進・力、を堅て合せ、禪・智、並べ附けて、由し矢眼形の如くせよ。師云く、進・力、を禪・智、と各の相ひ捻すと。　唵摩訶夜乞叉縛曰羅薩怛縛弱吽𑖩𑖽斛波羅吠舍夜吽發吒夜發吒の三字は瑜祇經等になし、但し師說に依て之を加へ用ふ、夜發吒の三字を加へ用ふる事の由緒は知らず云云

○八供四攝等　○正念誦大日心呪本尊　小　唵縛曰羅摩訶藥叉弱吽𑖩𑖽斛惡吽發吒　○又の印左右、拳に於て二頭、二小牙にせよ　唵縛曰羅藥乞叉吽　○又の印外五古、或は同會牙菩薩印を用ふ云云即ち金剛界三昧耶身なり、根本の明之を用ひよ。○散念誦

佛眼　大日　不動　本尊根本　八字　三世　一字

○護摩　○本尊段根本印小呪を以て一切に用ふ。　○諸尊段三十七尊或は五大　○後加持大呪　伴僧同じ。

○○愛染王

愛染王と染愛と一體異名なり。此の尊は是れ金剛薩埵の儀形にして、而も王愛喜の義を相ひ具せり、當前の二手は薩埵を能召して、諸金剛を攝伏して僕使となすことを表し、弓箭の二手は愛能く歡喜を生ずるを表し、一切の佛菩薩盡く染愛の妻となり、三界中の天人等悉く敬愛す、次の二手は喜を表す、自他大悅にして平等なることを得、諸怨退散す、頂上の鈎は王能く大鈎を生ず、上み一切佛より下も非人に至るまで、盡く來て成就を爲す、心の所樂に隨て速かに獲得せしむるを表す。

○根本一字心　吽悉底(ウムシッテ)　○三昧耶一字心　吽槌(ムグキ)吽吽弱(ムジャク)　○大根本明染愛王品にこれあり。

若し七曜、命、業、胎、等の宿を凌逼せば、彼の形を畫して那磨して師子口に置く等云云前方便並に成身會了る、但し五相の處之を用心することあるべし。口決あり

○次に三十七尊の印を結べ但し大日如來の次に本尊を加ふ。

(一)須彌山に阿字あり、變じて七寶の宮殿となる、殿の中に紇哩字あり、轉じて赤蓮花となる、花の上に大日如來有す、變じて本尊となる、赤の身赤色にして熾盛輪日輪の火焔の中に處す、頭髮利毛、首に師子冠を戴けり、其の上に五古鈎あり、面上に三目あり、利牙現じて唉怒の相に住し六臂を具足せり、當前の二手に鈴と杵とを持す、次の二手に弓と箭とを持す、次の二手左の方に物口決ありを持す、右に蓮を持す、身分の莊嚴悉く具足す、蓮の下に寶瓶あり、無量の摩尼寶を吐けり、三十七尊本色と相應して本業印を持す、眷屬を具足して聖尊を圍繞す云云　已上本傳。

(一)須彌山云云道場觀。

(二)入我の上、一本に師云くの言あり。

五生不可得

四敬愛不可得　一因業不可得　二慢不可得　三作業不可得

(二)入我我入の時、先づ行者自身に種子三形を觀ずるに、金剛薩埵の身となる、又た變じて本尊となる、次に大日種子三形又た之を觀ずるに大日尊となる、大日尊變じて本尊となる、然る後に互に相ひ涉入するなり。

外五脂　三昧耶一字心貞　内縛して中立て交ふ　大根本明尾　内五脂　根本一字心後

或は又た五種相應印。

虚合して二水、二空掌に入れ、二風申べて火の側に着けず。息災　先印

二風火に着けよ增益　先印　二風蓮葉に作れ敬愛　先印　二風三角に作れ調伏　先印　二風鈎せよ鈎召　已上悉地の明を用ひよ。

○正念誦大日本尊　根本一字の明　○散念誦　佛眼　大日　本尊大根本三昧耶　八字降三世　一字

○護摩召請等五古印三昧耶言、芥子根本一字明　○後加持三昧耶言伴僧之に同じ　大旨此の如し、委細口決あり廣澤流

○又の樣　妙高山の頂上に紇哩字あり、八葉の蓮華となる、法界に遍せり、此の蓮花の上に嚩字あり、五峯八柱の寶樓閣となる、此の法界宮殿の中に紇哩字の門あり、大蓮華となる、此の大蓮花の上に種子あり、變じて三形となる、三形變じて愛染明王となる、身色日暉の如くにして熾盛輪に住せり、三目にして威怒に視る、首髻に師子

の冠あり、利毛忿怒の形なり、又た五古鈎を安す、師子の頂に在り、五色の花鬘、垂れたる天帶耳に覆ふ、左の手に金鈴を持し、右に五峯杵を執る、儀形薩埵の如し、衆生界を安立す、次に左に金剛弓、右に金剛箭を執て衆星の光を射る如くす、能く大染法を成ず、左下もの手には(一)杵彼を持し、右には蓮をもて打つ勢の如くするに、一切の惡心の衆遠かに滅すること疑あることなし、諸の花鬘索を以て絞結して以て身を嚴り、結跏趺坐を作して赤色の蓮に住めしめよ、蓮の下に寶瓶あり、兩畔より諸寶を吐かしめよ、妙沙穀の天衣を垂れ、瓔珞をもて身を嚴り、光明普ねく法界を照す、無量無數の菩薩衆前後に圍繞して以て眷屬爲り、是の如く觀じ已て加持すること常の如し。觀念せよ、我が心月輪の上に吽字あり、變じて五古杵となる、我が身體是れ五古の相なり、卽ち變じて愛染明王の身となるに、相好圓滿せりと。

○種子　○三形同前　○印外　○言大根本　○正念誦大日大根本　又た外五古の印を以て三種の明を用ふるなり。

○散念誦　佛眼　大日　本尊三種或は金剛吉祥明、成就一切明　八字　降三　破障　一字

○護摩印外五大根本芥子三味耶一字心　○後加持大根本明　伴僧愛菩薩の言

(一) 杵　一本にな し。

一頭像一面六臂　愛染王金剛手なり、六種法に通ず。　二頭像二面二臂　染愛王大日なり、偏へに敬愛の本尊となす、通法に非ず。　二種人形杵を交へ合せて五股杵の形と爲す、謂く染愛は獨所に非ず、必ず二を用ふるとなすなり、所以る能染所染あるが故なり。又た二古三古、謂く是れ隔別に非ず、其の體は一なりと雖、而も二なり、又た二にして而も一なり、愛染不離の義、自他同一の義なり。之を悉にせよ。

馬陰藏師云く、是れ男女染愛の義なり、陰密且つは馬陰藏の別名を立つるなり。云云有が文に云く、染といふは陰藏の別名と云云。又た蓮花の三摩地といふべきなり。　身色日暉の如し師云く、光は謂く暉なり、是れ赤色と云云　熾盛輪に住す古德云く、熾盛輪とは非介の日輪なり、日輪に熾盛の炎猛あるが故なり、或る文に云く、一字佛頂及び愛染明王、並に果地の智德に約せば、日輪の形を以て本尊の形を現す云云　三目伊字三點面の三目是れ不縠不橫の義、若しは三界の相を照見し三品の悉地を施與するの義なるべきか。　首髻師子冠經に云く又た無畏の義、又た自在の義か、師子冠とは一切瑜伽教の中、此の法最尊最上にして、王たるの義を表すなり。　利毛忿怒形師云く、利毛とは其の毛竪つなり、忿怒とは順には慈體を隱し、逆には怒心を顯すの意か。　又た五古鈎を安す大師請來の表に云く、受持頂戴すれば福利極りなく、外には以て魔軍を摧滅し、內には以て煩惱を調伏す云云鈎とは鉤召の義なり、經に云く、彼の愚童を鈎召して諸佛の妙法を染愛せしめ、本有の法身を成就するが故に云云

天帶耳を覆ふ師云く、天帶とは是れ天衣なり、是れ三餘衣を謂ふか。　五色花鬘垂る師云く、五色とは五部の具なり、結界の物なり相應物なり、花鬘は佛の莊嚴の具なり、佛供養の物なり。　左手に金鈴を持し右に五峰杵を執る師云く、金鈴とは是れ攝召の義、又た警覺の義、歡喜の義、五峯杵は是れ寂灰の義なり云云　左に金剛弓、右に金剛箭を執る師云く、定弓惠矢を以て和合する時、自ら敬愛の義を成じ、衆生を利する故に、經に云く定惠力莊嚴す云云古德云く、弓箭は是れ愛染不違の義、所求に於て萬願速疾に圓滿するの義なり。　衆星の光を射るが如し師云く、射とは照の義なり、衆星とは一切衆

生の各別佛性なり、或はいふ、衆星の光を射るとは遠疾の義なり、威光を射ること流星の光の如くなり。　能く大染法を成ず師云く、上の光明の力に依て能く本有理具の佛性を顯す、此の義を以て能く大染法を成ずと云ふか、或は云く染とは愛の義なり、衆生を射るが故に一切和順す、所以に染法を成ずと名く云云　左の下手彼を持す師云く、持とは加持の義、彼とは煩惱の怨敵なり、又た云く彼とは自性所生の障、持とは斷除の義なり、持に依て之を壞するか。或はいふ彼とは惡人の稱なり。或は所求の隨事なり云云　右は蓮をもて打つ勢の如くす師云く、打つ勢の如くとは降伏の義なり、文に云く一切惡心の衆遠かに滅する疑あることなし云云赤た敬愛等を用ひて厭離の心を打ち、本覺に違背する者を敬愛せしむ。　赤色の蓮に住す住とは座なり、赤色の蓮とは敬愛相應の本色なり、仍て明王此の座に坐したまふか。　蓮の下に寶瓶あり蓮とは座なり、下とは前なり、瓶とは正耶形なり、明王此を以て座となす云云。明王行者のために寶を與よる故に。文に云く一切の福を增益して堅固なること金剛の如しと。しく增益の義を表すなり、是れ地天三摩

問ふ、護摩の時の觀、諸供皆な花箭となると、其の意いかん。答ふ、一切衆生の五處を執集して之を射るべきが故なり。問ふ、花箭を以て彼の人の五處を射るとは、彼の人とは誰ぞや。答ふ、我れ彼の人の敬愛を乞ふ故に彼の人を射るなり、若し夫れ婦の愛を乞ふありては、花箭を以て婦の五處を射るべきなり。　花とは愛の義なり乾哩字は花の種子なり、敬愛と合するなり。

◎烏芻澁摩

○梵號　○密號　不淨潔金剛又た火頭金剛。　○勸請　穢積金剛大明王　金剛部中

諸忿怒　○種子　ॐ　○三形　三古金剛　○道場觀　觀せよ、大宮殿の內に大蓮花あり、花上に日輪あり、輪の上にॐ字あり、變じて三古金剛杵となる、杵變じて本尊二臂・四臂、時に依て想ふべし。となる、摩莽計等の金剛部の聖衆、八方天並に阿修羅衆、訶利帝母愛子眷屬恭敬し圍繞せり云云

○印右手の無名・小指を以て、左手の無名指の背後より、中指・無名指の裡間に入れ、右の大指を以て右の無名・小指の甲上を押し、左の無名・小指を握り、次に左の無名・小指を屈し、復た左の大指を以て左の無名・小指の甲上を押し環に作り、相鈎して各〻堅て、兩の頭指及び中指相拄へ來去せよ。

○根本明　唵縛日羅俱嚕二合駄二摩訶麼攞三訶曩娜訶跛佐四尾駄望娑野烏澁惡娑摩二合俱嚕二合駄吽泮吒娑縛二合賀引　○正念誦　唵俱路引駄曩吽弱捧眞言と名く。

○又の印二羽各の虛拳にして禪・智・餘の甲を捻して右拳を開いて、左の進・度を握り、直くして峰の如くし、擧げて其の頭に頻せよ。　眞言捧言を用ふ。

○散念誦　佛眼　大日　本尊二　不動　八字　一字

○護摩召請等は初印を用ひ、芥子等は捧の言を用ひよ。　○御加持根本の明を用ふ、伴僧同じ、若しは不動慈救呪

◎金剛童子

○金剛童子忿怒尊　金剛部中諸聖衆。○ॐ　○三古或は獨古は獨古を用ふ。常に　○行法別行金剛界の略たるなり。

(一)大海云云　道場觀

(一)大海の中に寶山あり、寶山の上に吽字あり、變じて三股杵となる、杵變じて聖迦尼忿怒金剛童子となる、身吠瑠璃色にして六臂を具足し、面に三目あり、首に寶冠を戴けり、狗の牙上さまに出づ、口は下もの唇を咬へて眉を顰めて威怒せよ、右の第一手に底里商俱金剛杵を持し擲する勢を作し、右の第二の手には母娑羅棒を持す、謂く棒の一の頭鐵杵形の如し、右の第三手には鉞斧を執り、左の第一手に棒を把る、左の第二手は握る勢の如くし、金剛拳に作り頭指を舒ぶ、左の第三の手に劒を持す、一の大蛇を以て身上に於て角絡結繫す、又た一切の毒蛇を以て臍釧辟釧と作す、腰條瓔珞及び耳の璫、髮を繫く、又た大蛇を以て腰に繞ふ三迊、背に圓光あり、火焔圍繞せり、火焔の外に於て其の雲電あり、以て相ひ輔く、左の足を以て寶山を踏む、山の上に妙蓮花あり、以て其の足を承く、右の足は海水の中にあり、立て其の半膝を沒れたり、乃至無量の眷屬前後に圍繞す云云

○根本印虛合して二羽の水を交へて虎口に入れ、風は鉤して空の下を捻し、地輪惡てゝ牙の如くせよ。　眞言に曰く　吽縛日羅俱摩羅迦尼度尼吽吽泮

○正念誦大日本尊　唵迦顎吽發吒　或る本　唵迦顎度尼吽發吒　○印言前の如し　○散念誦

佛眼　大日　觀音　金剛手　本尊二　慈護　一字

○護摩　本尊召請根本の印なり、唵迦顎吽發吒（供物芥子同じく之を用ふ）發遣の印は上の如し、眞言は小呪を用ふ、芥子供同じ。　○後加持根本眞言

伴僧之に同じ

（朱）文政七甲申年初秋、類本を以て校し了る　祐淳

國譯澤抄第六不動終

國譯澤抄第七　天等

○毘沙門　○吉祥天　○炎魔天　○水天　○地天　○聖天　○十二天　○阿利帝
○童子經　○供養法

○○毗沙門三時一時の行法心に任す、常の如くの行法相違なし。又た護摩常に之を用ふ

○本尊界會　多聞天王　五部太子　諸大眷屬。　○吠(ベイ)或は鑁(ボン)　○寶捧或は塔

(一)觀想せよ壇中に嚩字あり、變じて七寶の宮殿となる、其の中に二肘壇あり、其の上に荷葉の座あり、座上に藥叉の二字あり、變じて二鬼の座(二)尼藍婆(ニラムバ)毗藍婆(ビラムバ)となる、座上に種子あり、變じて三形となる、三形變じて本尊毗沙門天王となる、七寶莊嚴の甲冑を着る左手に塔を持し、右手に如意棒を執る、吉祥天女・五部太子・八大藥叉將・二十八使者、及び無量の藥叉衆等の諸大眷屬、前後に圍繞せり。

○請車輅　○次に召請印右手前にして左の腋を捲きて頂上に於き、左手の四指衆去せよ。　曩謨吠室羅摩拏(ベイシラマンダナヤマナ)薩(サツ)埵(タ)也摩地以悉捺羅薩(サツ)也悉他波嚩都婆(ハハトハタ)多婆縛賀。　○次に四天王結護印二手の小指を屈して掌中に入れ、右、左を押し二中を堅て、無名相離すこと

(一)冠註に云く、此の次第樣は振鈴ある可からずと見えたり、然して振鈴を用ふべきなり或は之を用ひず、用不は心にあり。
(二)童子　善膩師童子經

一寸。二頭指を柱へ二大指を並べ屈して掌中に入れよ。　唵婆(バ)帝(テイ)也(シタ)畔駄畔駄(シタカムカム)憾吽弭婆縛賀　是には四天の總印と見えたり、胎藏軌には多聞天の印と見えたり。

○(一)拍掌の次に　○大日　○本尊二手内に叉へて二水を立て相ひ合せ、二風を屈して鈎の如くして之を招け。　○小呪を用ふ

(朱)唵吠室羅摩拏野婆縛賀　○吉祥天八葉の印、寶珠を觀ずるは常の如し　(朱)唵摩訶室利野曳婆縛賀　○(二)童子金剛合掌　奢擧多(シヤコタ)他羅(タラナ)野婆縛賀　○八供四攝等　○本尊加持前の印　○又の印内五古大呪を用ひよ。

○正念誦大日本尊小呪　(朱)唵吠室羅摩拏野婆縛賀　○又の印虛合して二地を内に叉へ、二空を並べ、二風を鈎の如くして二火の側に付け、(二)一寸許り着けず。

大呪　○密印虛合して二地・二火・を掌に入れ、各の背を合せ、二水・二風・を豆許り、端去れよ。　小呪(朱)唵吠室羅摩拏野婆縛賀

○散念誦　佛眼　大日　梵天　帝釋　本尊大小　天女吉祥天女の眞言なり。　童子弊賦師童子なり。　夜叉胎藏の如し。　夜叉女胎藏の如し。　四天惣　慈護一字眞言の替りなり、仍て一字の眞言は之を滿せず。

○護摩　四段之を行ず　息災に就て之を行ず。　○火天段常の如し　○諸尊段常の如し　○本尊段召請等印、内縛して二水を立て合せ、二風を以て之を招け、小呪芥子供物同じ。

○召請の印右手を前めて左手の腕を把れ、頂上に於て左手の四指をもて來去せよ、眞言に曰く　曩謨引吠室羅末拏、薩也麽地以、悉捺羅薩也、悉他波嚩覩、婆哆莎哥

此の契及び眞言七遍を誦すれば、天王眷屬と壇會に降臨したまふ。口に云く天王慈悲をもて座に就いて小供養を受く乃至諸の夜叉羅刹諸佛菩薩金剛力士等、道場に降臨

(一)壇上云云　已下道場觀。
(二)相　一本に正に作る。

して我が爲めに證明となりたまふ。

○四天結護の印（二手の小指を屈して掌中に入れ、右、左を押し二中指を竪て、無名指を相ひ離すこと一寸、二頭指を挂へて二大指を並べ屈して掌中に入れよ。）　唵婆帝也　畔駄畔駄、唵吽弭莎訶。

此の契再三結界して印せよ、上下各の三遍すれば、一切の諸惡魔悉く散し遠かる、然る後に契を擧げよ、四方に東南西北に周くして復た始めよ、契を作りて眞言を誦し加持すれば、魔障皆な走りて敢て道場に近かず、再三四もに結界せよ、法の如き方に乃ち天王を啓請せよ、成就力を得ば卽ち無畏を得と文り。

○○吉祥天（行法は三時一時心に任す、常の如く行法せよ、）　護摩は常に人の用ふる事なり。

○本尊聖者　吉祥天女　蓮花部中　諸大眷屬。　○室哩（シリ）　○如意寶。

(一)壇上に寶宣臺の座あり、座の上に滿月輪あり、其の中に室哩字あり、變じて如意寶珠となる、寶珠變じて吉祥天女となる、面貌端(二)相莊嚴微妙なり、左手に寶珠を持し右手は與願の勢になす、首に摩尼の冠を戴き後に圓光あり、紅色の蓮花に坐す、左に梵王ありて寶鏡を持し、右に帝釋ありて散花供養す、天女の上の空中に、千葉の寶蓋

(一)施珍寶印　註に云く祕印なりと

あり、蓋の左右に諸天ありて妓樂をもて供養す、上みの空中に寶雲あり、雲の中に白象あり、象の鼻に馬腦の瓶を纏ひ取て、瓶の口より七寶を流下す、四寶の山あり花菓茂盛せり、四天王等の諸の眷屬恭敬し圍繞す。

迎請の所には吉祥天の印を用ふ（八葉、右の風を招く云云）眞言の末に翳醯（エイケイ）曳嚩の句を加へよ。

○次に馬頭印（言常の如し、畔除のために結界するなり、以下例の如し）　○本尊加持（八葉の印に似たり、四處を加持す、心眞言は常の如し。）　○又の印（内三古、陀羅尼を用ふ　被甲の印なり二大並べ立てよ。）　怛儞也他唵室哩（シリ）泥室哩泥薩嚩（サバキャリ）迦哩（キャリ）也娑駄（サタ）儞悉儞（シツニ）悉儞悉儞儞儞儞儞阿（アラ）落（ラキ）訖（キシヤ）叉弭茗（メイナウ）羅（ラ）羅（ラ）也娑訶（十二名號經にあるなり、陀羅尼とは是れなり。）

○印（八葉前の如し）　唵（ヒマ）毗摩羅（ヒマラ）薩羅（サラ）伐底（ハチ）三婆羅（サムハラ）吽　○印（虛合して二水を掌に入れ、二空を以て各の水の甲を押せ）　心眞言を用ふ（朱）唵摩訶室利　耶曳婆縛賀

○(二)施珍寶の印（左右の中指・無名指を相ひ叉へて掌に入れ、二小指を外に向へて相ひ叉へ、右、左を押し、右の頭指を曲め竪てよ、左の頭指を直く竪て、二大指を屈して掌に入れよ。）眞言（陀羅尼を用ふ、十二名號經の呪なり、前の如し。）

○散念誦　佛眼　大日　聖觀音　本尊（心眞言又は讚經す云云）　馬頭　梵天　帝釋　四天惣　隨ふ　或は哥梨帝　慈護（一字眞言の替りなり。）

○讚（十二名號之を以て讚となす）　○護摩（增益に付く、後七日の如し。）

(一)壇中云云。下道場觀なり。已

(二)普印 註に云く、泰山府君の印明なり、本尊の印に非ず。

○琰魔天

○本尊聖者　炎魔法王　泰山府君　五道大臣。○焰(エン)　○檀茶憧(人頭憧なり。)　○行法(十八道に付く、師云く亥の尅を以て之を供せよ、振鈴あるべからず。鈴印も之を用ひず。此の法は行法打ち任せては一時なり、鳥羽院の御時などは皆一時に行ぜらるゝなり、常に之あり。)

(一)壇中に阿字あり、七寶莊嚴の宮殿となる、殿内に曼荼羅壇あり、其の中央に焰(エン)字あり、變じて壇荼(ダンダ)の印となる、印變じて琰魔法王となる、身相肉色なり、左手に人頭の憧を持し、右手は與願なり、黄豐牛(ワウフモウ)に乘せり、左右前後に后妃・嫉女・太山府君・五道の冥官等の眷屬圍繞す。

○大鈎召の所(眞言の末に焰魔耶翳醯曳嚩の句を加ふ。)　○勸請(大鈎召の印なり。眞言大鈎召眞言の末に(朱)焰魔野翳醯曳嚩の句を加ふるなり。)　○獻座(但し二意あり)

一、水牛座
二、荷葉座　○本尊加持(虛合して二風・二地相ひ背けて月に入れ、二大之を並べて二風の中節を押せ。)　唵焰(エンヤ)魔耶莎訶。　○正念誦

(朱)唵焰魔野娑縛賀

○又の印(虛合して二空を兩風の中節の上より之を指し超せ、二中指内の第三の節に至り、相ひ拄へて前の印の如くせよ、但し二大は二頭の上より並べ、掌内に入れ、二中の第三節に付けよ。師云く、二中に眷くべしと雖、第三の節には指短なる故に現相は付けざるか。)　唵吠縛娑縛吒耶莎訶

○次に(二)普印　歸命質怛羅矩(シツタラクハ)跛多野莎訶　○散念誦　佛眼　大日　地藏(或ば)

釋迦　本尊(第二言唵吠縛娑縛吒耶ソハカ)　后妃　七母　太山府君(數過を增す。)　黑夜天(卷數を入れず)　五道大神　司命　司祿　拏吉尼　遮文荼　成就仙　毗那夜迦　心經(若しは金剛般若)

慈護

○此の法は護摩なきなり。

○水天(行法三時なり、數壇十とあるも三時なり。)

○本尊聖者　嚩嚕拏天　后妃天女　諸大龍王。　○縛(バ)　○龍索(リウサク)印。(龍と思ふべきなり。)　○行法(別行に付く、金剛界の略たる行法なり云云)

(一)壇中に鑁字あり、變じて甘露水となる、其の水の上に鉢羅(バラ)字あり、龜となる、其の上に縛(バ)字あり、變じて龍索となる、龍索變じて水天となる、其の身は淺緑色(センロクシキ)なり、右手に刀を執り、左手に龍索を持す、頭冠の上に五龍あり、后妃・天女・諸大龍王等悉く圍繞す云云。

○(二)大鈎召の所に眞言の末に縛嚕(ロン)馱野翳醯曳嚩の句を加ふ。

○花座(四葉の印尾摩羅野娑縛賀)　○(三)鈴の次に　○水天印(定の拳、風を申べ、少しき空を屈して掌中に入るゝ勿れ、惠の手は腰に安け。但し師說は

(二)壇中云云。下道場觀なり。已

(三)大鈎召 註に云く、招請の印明なり。

(三)鈴 冠註に云く、此の法に振鈴を用ふるも後鈴は之れなし。

(一)五字 迷・伽・奢・羅・曳。

(二)澤 一本に得の字に作る。

(三)廣目 註に云く、水天と廣目とは同天なり、孔雀王等に此の旨見えたり。

(四)禮拜 冠註に云く、時の始には此の禮拜なし、常の如く三度之を禮す、時半を墨を降りる時、以後廿一反之を禮す、毎時此の如くす。

内縛して二啥を四く合せよと。 唵阿懦鉢多曳莎訶

○廣目天印 左右外拳にして風を背け合せ、素にして空を招む 二大指の頭を押せ、二羽五輪を散し舒べて二空相ひ叉へ、右を以て左を押せ。

唵銘伽捨儞曳莎訶

○水天妃印 合掌して二風を屈して二大指の頭を押せ、

唵縛嚕地曳莎訶

唵尾嚕博乞叉那伽地跛哆曳莎訶

○諸龍印

○以下常の如し 八供四攝なり。

○正念誦 千反、唵嚕嚕耶娑縛賀 陀羅尼集經に云く、呪を誦すること一千八十遍を滿足せば新雨(二)澤と文り 仁海僧正此の(一)五字を以て五龍の種子に用ふ。

○本尊加持 右拳を腰に、左拳の風を直く立て少しき屈せよ。

唵嚕嚕拏耶莎訶

○身印 金剛合掌するなり、合掌二頭指を屈して二大指の頭を押せ。本尊身印之を用ふ、其の印相は水天妃の印の如し、更に相違するなし。歸命阿泮波多曳莎賀

○又の印 内縛して二風屈 諸龍呪を本尊呪に用ふるなり。

迷伽奢羅曳莎賀 師說之を用ふ。

○散念誦 佛眼 大日 (三)廣目 水天妃 諸龍 一字或は慈護 ○發遣

投花は常の如し。

唵嚩嚕馱野穆乞叉穆

○(四)禮拜二十一反 其の詞に曰く 天下國土の炎旱消除して、甘雨普ねく潤ひ五穀成就す。

○堂莊嚴 先づ供物を辨じ備へよ。

當さに四肘の水壇を作れ、其の壇の北面に水天の座を安し、青色の幡二流、長さ五尺或は三尺五寸を本尊の左右に之を懸け、青色の糸を壇の中心に之を置け作法は口傳あり。十六盤の飲食、大

飯八坏、五穀の小飯八坏(註)四角に各の二坏 菓子八坏、小豆羹八坏(註)四角に各の二坏 燈明四燈、五穀の粥八坏但し後夜に用ふ。例の如く八供養之を備ふ、四角に四瓶あり、但し栢葉柳等之を用ひよ、薫陸香を燒き、呪師洗浴して新淨の衣を着け、面を北に向へて坐す云云。

(一)金壇云云 道場觀。

○地天

○本尊聖者 堅牢地神 部類眷屬。 ○畢里 ○鉢 ○行法十八道に付く

(二)金壇の上に七寶の宮殿あり、殿の内に荷葉座あり、座上に畢里字あり、變じて寶瓶となる、寶瓶變じて堅牢地天となる、肉色にして首に髻囊を着す、身に羯磨衣の莊嚴微妙なり、左手に鉢を持し花を盛る、右手の掌を外に向ふ、眷屬圍繞す。

○荷葉座印 左拳を腰に置き、右の五指掌を仰けて之を上げよ

唵畢里體微曳ソハカ

○本尊加持 合掌して風以下四指の頭相ひ拄へ、前の方へ大きに開き、二空を各の風側に着けよ 胎藏鉢印なり。

○正念誦 上の言 唵畢里體微曳ソハカ

○又の印 腕を合せ、二頭指及び二小指を以て反て刄へ掌中に在き、右、左を押し、二中指及び二無名指を以て直く竪て頭相ひ拄へ、二大指を以て並べ立てて二頭指の側を押し來去せよ。

婆孫陁里陀那陀惹鉢囉鉢囉怛儞(朱)莎賀

○散念誦 佛眼 大日 或は釋迦 不動 本尊 慈護 心經等心經許り之を讀む、餘

物は別に之を讀まず、悲護眞言以後に之を讀む

◎聖天

聖天法は打任ては二時に之を行ず、後夜・日中なり、初夜には行ぜず。問ふ、後夜・日中に之を修するいかん。答ふ、天等の供時を後夜・日中と出したるなり、仍ほ此の如く或は三時にも行ふ、普通の事にあらず、せめて丁寧にせむときの事なり。初夜には供具を備へず、只だ花水供なり。

○上堂普禮常の如し（註）金剛合掌して普禮眞言三度して禮拜す。　○次に着座(一)護身、及び(二)加持香水供物等常の如し　○次に(三)多羅油を取て火上に置き、大呪を以て加持すること一百八遍して(四)寒溫を知れ惠手拳に作て中指を申べ、頭指を以て中指の上節に附けよ(五)　曩謨尾那翼迦尾娜翼迦怛羅翼迦怛迦翼迦餉佉賀悉底餉佉迦只多扇底迦羅娑嚩賀。(七)或る師云く又た心呪を以て加持す百遍、同じき印　唵儗哩虎娑嚩賀。

○次に多羅を取て壇の中に置き、天像を安置し畢る。　○次に(八)一禮拜　○次に(九)啓白略神分神分は常の如し。表白神下の句も常の定めなり。　○次に五悔以下常の如し、金一打して發願、五大願菩供養、三力、次に金一打次に勝心、次に金剛輪七下なり　○次に勝心　○次に大金剛輪　○次に地結　○次に墻界

○次に如來拳印を結んで觀想せよ、壇中に噁字あり、變じて瑠璃の寶地となる、其の上に阿字あり、變じて七寶の宮殿となる、殿中に白圓壇あり師云く、是は息災に付くか、調伏敬愛意を用ふべきなり。上に七寶の多羅あり、(一)四もに上妙の香油を湛ふ、油の中に白蓮花あり、寶座の上に虐虐の二字あり、變じて三形嘉蔔根、若しは歡喜團となる、三形變じて大聖毗那夜迦王の雙身となる、象頭人身にして其の形肉色なり、無量の眷屬隨順し圍繞す。

○次に大虛空藏　○次に小金剛輪請車輅並に送車輅なし、内三鈷の印なり、二大並べ立つるなり、件の二大を並べ乍ら三度來去せよ。　○次に迎請内縛して三鈷、大指を以て來去せよ　唵𨫼迦羅主拏禰嚩多野翳醯枳莎訶

○次に降三世　○次に虛空網　○次に火院　○次に示三昧耶　○次に閼伽唵惹耶ソハカ、或は心中呪之を用ふ、閼伽持は常の如く軍茶利の小呪なり、(二)利惹耶ソハカは閼伽供養の眞言なり。　○次に(三)花座師云く其の印を高く擧げざるなりと。　唵嚩曰羅密羅也陀賀莎訶　○次に天の本印明内縛三古、師云く二風を中指に付け二大指を頭指の下に附けよ、牙印と名くと。有が說く、二中を開き立て着くるなきは牙の形を表す、之を以て說となすと。　唵儗哩虎娑縛賀。　師說に云く、八供養の印を作れと八供養の印明は常の如し、本章の印の次に之を用ふ。

○次に塗香等供し畢れ塗香、花、燒香、飲食、燈明、印明・閼伽は以前に供し了れり　○次に讚（金剛合掌）　唵誐娜𨫼底扇底娑嚩悉底摩賀誐娜𨫼底娑縛賀。

○(三)次に普供養三力等　祈願之れあること常の如し　○次に禮佛

(一)護身　註に云く、三業三部被甲註に云く、三古印軍荼利小呪なり。(二)加持　云云、三古印軍荼利小呪なり。(三)多羅　註に云く、多羅とは銅にて、鉢の樣なる物なり、百反とはあれど餘りに久しく成て熱く油の成るなり。(四)寒溫　註に云く、寒溫を知れとは溫からず寒からず能き程に計ふべきなり、(五)註して云ふ、大指は中指の腹を持すも、獨古を用ひて其の油を加持するなり、此の印を以る時も、獨古を用ふる事はこれなしと。(六)唵云云　註の意に依るに師說には巳下を讀み、上文を省くとあり。(七)或る師云云　或は上註に云云ふ、或は許りを用ふ、大呪は先づ大呪廿一反次に心呪百反す、此の如く二ながら之を用ふ。又いふ心呪も印は同印なり前の如しと。(八)禮拜　註に云く、居ながら一禮すべし別に眞言なし。(九)啓白云云　傍註に、次に金二打或は三打すと。(一)四も　一本になし。(二)花座　傍註に荷葉印といふ。(三)傍註に云く、四智讚は誦せず、只だ本章讚許りなり。

(一)次に入我我入の觀なしといふ。

(二)前の三古印註に云く牙印なり偏へに内三古印には非ず只だ前定の牙印なり、但し是れ普通の說なり祕印あり。

(三)新願註に云く、新願は油をかくるたびに之れを心中に新願とは心中の事を啓するなりと。

南無摩訶毗盧遮那佛。　南無十一面觀世音。　南無軍荼利明王。　南無大自在天。

南無誐那鑁底帝縛羅惹。三反　南無三部海會一切聖衆

○(一)次に天印を結び四處を加持せよ師云く、前の牙印、前の如し、心呪唵儗里虎を用ふ。　○次に正念誦心呪百反なり又た心に在けず

○次に本尊加持(二)前の内三古の印、心中心呪　唵虐虐吽娑嚩賀　○次に杓を取て油を酌み、二頭の身に浴せしむ一杓一呪數百反。　下油の時は慇懃に(三)祈願百遍し終て讃一度せよ上の如し　次に摩尼等是の如くして四百遍心呪二百反心中心二百反を滿てよ、日午三百遍心呪二百反心中心呪百反合して二時に七百遍なり。日中も浴湯には百反終る毎に讃普供養三力同じく之を用ふ後夜の如し。

○次に天像を本座に歸せよ油の中より天像を請出して紙を以て拭ひ淨め、本尊を安置す、但し初時以前と並に結願斗りの時は水を以て像を浴するなり。　○次に本尊加持前の如し、普通は牙印なり、秘印唵虐虐吽　○次に散念誦或は之を用ひず、散念誦は古說に用ひず云云。但し多分は之を用ふるなり、凡そ何法も正念誦にて足るべきが故なり。　○次に後供養。

○十二天初夜一時に之を行ず、振鈴なし、勝燭供あり。　○行法十八道に付く、但し地結、前の大金剛輪印言、增益若しは息災に之を修す、常には息災に就て之を行ず。　○哈　○獨朶哈獨古は四臂不動の種子三形なり、四臂不動は第二の點を加へざるなり。

○本尊聖者　不動明王　十二天等　諸大眷屬。

(一)觀せよ云云已下道場觀。

(二)觀せよ壇上に嚩字あり、變じて七寶の宮殿となる、其の中に曼荼羅あり、中央に哈字あり、變じて獨古杵となる、杵變じて四臂不動となる、青肉色にして前の二手は牙印を作り、次の二手は劒索を持す、各の本位に荷葉座あり、東北方の葉上に伊字あり、三戟叉となる、變じて大自在天となる、東方の葉上に伊字あり、獨朶杵となる、變じて帝釋天となる、東南方に阿字あり、賢瓶となる、變じて火天となる、南方に烙字あり、壇茶印となる、變じて炎魔天となる、西南方に底哩字あり劒となる、變じて羅刹天となる、西方に縛字あり龍索となる、變じて水天となる、西北方に縛字あり風幢となる、變じて風天となる、北方に吠字あり寶棒となる、變じて毗沙門天となる、内の艮の隅に沒羅字あり蓮花となる、變じて梵天となる、内の乾の隅に畢哩字あり鉢となる、變じて地天となる、内の巽の隅に阿字あり日輪となる、變じて日天となる、内の坤の隅に遮字あり、月輪となる、變じて月天となる、各の無量の眷屬と前後に圍繞す云云。

但し師說に、十二天の種子短吽之を用ふ、十二天通じて之を用ふるは略する義なり、此の時は三昧耶形なし、只だ種子變じて羯磨の身となるなり。

○閼伽の後寶山の印を結べ。　○次に荷葉座　○次に蠟燭を立てよ承仕之を指す　○本尊

加持大指を以て中指・無名指の甲を捻し、小指・頭指之を立て、兩手分け立て二頭・二小共に之を鈎せよ。

○慈救呪但し師說は不動一字の明之を用ふ。　○正念誦大日不動一字の明、印を以て口邊に近けよ。

○又の印大鈎召の印を以て先づ不動の呪を誦せ、慈救呪、次に鈎召の言の末に嚩薩曳嚩の句を加へて十二天を請する心なり、大鈎召印を以て三度招く問、先づ慈救呪、次に大鈎召眞言、末に嚩薩曳嚩の句を加ふ

○散念誦　佛眼　大日　不動　十二天各別　吉祥（註）吉祥眞言なり。　慈護

或は光明眞言　心經。　十二天の各別の印之を用ひず。

○訶梨帝常には行法初夜一時なり。

產の祈りに之を行ず息災の法なり○又た祈禍のために之を行ず增益の法に之を行ず、淨衣白、淨衣黃

○哥利帝母鬼子母神　犍陀山中諸大眷屬。　○吽　○(一)吉祥菓或は刀。呪賊經の說、常には吉祥菓を用ふ、刀は呪賊經の時に之を用ふ、只の行には之を用ひず。　○行法十八道につく。文に云く、人をして此の像を見及び作法を知らしむるを得ず、必ず効驗を失はん。(二)東方に向ひて修せよ、行者東方に向ふなり。

(三)壇上に阿字あり、寶宣臺座となる、座上に吽字あり、變じて吉祥菓となる、吉祥菓變じて訶利帝母となる、形像金色にして妙天衣を着し、頭冠瓔珞をもて身を莊る、宣臺の上に坐して、垂下する右の足の兩邊に二の孩子を畫す、宣臺に傍ふて二膝上に立ちて各の孩子坐す、左の懷中を以て一孩子を把り、右の手の中に於て吉祥菓を持す、眷屬

(一)吉祥菓　柘榴

(二)東方に云云註に云く、息災なりとも此の法は東に向ふべきなり、本居の故か。

(三)壇上云云　道場觀

圍繞す。

○召請印合掌して二大指之を招け　唵致尾致顎翳醯曳嘓莎賀　○根本印右手の指を以て、左の手の背にして交へ刄へ入れ、左の手の掌を把け、左の手身に向ふて三たび招け。　唵努努麼哩迦四帝娑嚩賀　○正念誦眞言は上の如し。　○印金剛合掌　眞言は上の如し。

上の如し唵努努麼哩迦四帝ソハカ

誦　佛眼　大日　本尊　愛子若しは盜賊を祈る時は呪賊經三卷。　藥師　延命　破宿已上の三種は卷數を載せず　慈護

○禮佛禮佛は三十七尊なども之れなし、只だ此の四句許りなり。

五百愛子　南無一切三寶　○發遣先づ召請の印、二大指を開いて之を出せ眞言は上の如し。　南無摩訶毗盧遮那佛　南無訶利帝母三反　南無

飛行、安住、同蘇、愛授、香味、得財。　(一)加妙、增喜、自在

若し人、九子の鬼名を知らざる時は、供し禮すと雖も受用せず、能く名號を知りて之を供すれば、前生の貧報ありと雖も多く福利を得云云。

或は本尊覆面の紙に此の九子の名を書く故に永嚴法印之を修せらるゝ時此の如くす。九子とは書かず、只だ名許りをかくなり。

○童子經供養作法次第小人の護りのために此事あり、十五歲以前などに此の事を用ふべし。

(一)加妙等註に云く、九字の名を云ばば散念誦の間に各の一反づゝ唱ふべきか。其の外は別の事なし。或は着座の時に即ち之を唱へ禮拜するの心なり。

○先づ白黒月八日・十五日白月を用ふるのは多分の説の晨朝に花水一桶を酌め生氣方の水なり、或る師云く、妊胎の間は母の生氣の方之を用ふ、誕生の後は子の生氣方を用ふるなり、但し若し頻あらば只だ房内の水を用ふべし云云　○次に(一)淨衣を着せよ　(二)三部・被甲・等常の如し　書寫の人居住の房内の水を用るなり略ゝ定めの義なり。

○次に東方に向て立ち、栴檀乾闥婆の名號百遍を唱へよ。　○次に(三)十五鬼の名各の七返、經說の如　唱ふる詞に云く南無栴檀乾闥婆王此の定には百反之を唱へよ。

○次に淨き硯に(四)彼の水を入れよ三古印は常の如きの右手に之を作る。三古印を以て加持すること廿一反、吉里吉里の明を用ふるなり。唵吉里吉里縛曰羅吽發吒

○次に(五)墨を摺り筆を執り之れの二字を誦す寫經の間、盛り儲くる燒香一盃を机上に之を置き、煙を絶さず名香之を用ひよ經の奥に釋迦・梵天・(六)婆王等の種子を書すべし、亦た命木を以て軸とするなり。

○次に(七)五色の線燒香を焚して机上に置き加持すること廿一反、實・慈の明なり、不動一字の明を用ふるは師の説なり。此の間に供物を辨じ備ふ圖の如し

洗米十七坏大二坏小十五坏　乳粥・菓子等專ら柘榴を用ふ、若くは黒大豆、菓子には專ら柘榴を用ひ、或は黒大豆にてもあり、共に一度に用ふる事は之れなし、菓子には餅は之れなし

御明二燈或は四燈、常に二燈臺に用ひて常の如く之を燃せよ。供物の後ごとに十五鬼の名を書し、札を立て且を首となし三方を旋る、前方を除くべし、不動婆王等は札を立てざるなり。壇敷並に供師の座は薦を用ひよし、座には緣なども之れなし只だ柘榴ならば十七坏皆な柘榴を用ふ、又た黒大豆ならば十七坏ながら黒大豆を用ふるなり。

○次に着座　塗香以下の作法は常の如し。

○次に事由次に塗香、次に淨三業三部被甲、次に灑水、次に金二打、次に三禮、次に金一打して如來の唄、次に金一打、次に表白

○次に經題名並に釋次に經題、次に金一打、次に發願次に五大願、次に金一打、次に誦經

○次に祈願寶號等次に經釋　此の次に寶號祈願等、次に供養淨眞言打

○次に六種次に六種、次に廻向一打、次に降座、次に神分祈願

○次に廻向經供養を別に用ふる時は作法此の如し、但し只だ供養法の次に經を供養する常の事なり。

○次に神分祈願するなり其の時は三禮、如來唄並に供養淨眞言、六種廻向之を用ひざるなり。

書寫以前によりたる能く云云、五色の色よる作法は常の如し。

(一)供養法冠註に云く、法の法は十八道に付て之を修す、不動を以て本尊とするなり。

(二)不動四臂不動の印なり、十二天供並に安鎭法等の如し。更に相違なし。

○(一)供養法不動法に付て之を供す、祕說とするなり。

○種子・三形・等　憾(カン)　獨古不動。四臂不動なり、是れ水師の說なり。　○沒羅(ボラ)梵天　○苦(サン)婆王、三形なきなり。吽種子は十五ながら皆同じく沒羅字を用ひて通じ用ふるなり、三形なし。中央不動尊有說は四臂前に梵天、後に婆王、三方を繞りて十五鬼神圍繞す各の種子あり、用否は意に任せよ。

○印言等

(二)不動二手金剛拳にして頭指・小指各の曲げて釵形の如くして口の兩角に安し相牙の如くせよ、不動一字の明を用ふ。　梵天左の水・空・相捻して擧げよ右手を腰に安け　唵沒羅

(一) 唐　唵の字か

(二) 八字　八字文殊。

(三) 三世　降三世

(四) 壇供　傍註に云く、壇供とは九佛供弼菓子等を桶に入れて、紙綱にてからげて、施主の許に送ること、宛も鎖作法の如くす。

(五) 此の次に次頁の圖入る。

(一)唐摩寧曳ソハカ　波王内縛して水輪を申べ、頭合する勿れ　歸命尾代駄薩縛羅縛係爾ソハカ

○正念誦前一字の明　○本尊加持劍印　慈救　○散念誦　佛眼　大日　不動慈救千反

婆王三百反、眞言は前の如し。　讀經　(二)八字　(三)三世　慈護　結線百八反。師云く先づ不動一字の明百反、次に婆王の呪、七結或は一結。

○後供養以下常の如し　歸命尾代駄薩縛羅縛係爾羅婆賀之を用ひよ。

○禮佛常の如し　南無釋迦牟尼佛　南無大梵天王　南無栴檀大鬼神王。

師云く、供し畢らば(四)壇供等は桶に入れ之を封じ、施主の許に送りて生氣の方に埋ましむるなり天一太白の方を除く。

經は結線を以て之を卷き、紙をもて裹ましめ、上下に封を書き、其の上を又た之を裹み、生れたる枕子の上に安け若しは頸にかけしむるなり。

經は三寸許りある薄樣に之を書くべし、件の結線を經の上に紐躰に卷く、或は只だわけて別してとを加へ、其の上を紙などにて裹みて之を封ずべし、護の躰に結をつくべきなり、是れは本說になし、只だ今案なり、白糸など能きか、或は紙捻(五)

道場觀には不動婆王梵天は別の種子を用ふ、十五鬼は皆な吽を用ふ、左の圖は只だ各別の種子を知らしめんが爲めに之を書せるなり、各別の種子を觀ずるは神妙の義なり。

(一) 彌一より十五、及び餘種子三字は原本梵字なるも今對譯と爲す。

六摩。摩致迦羅刹女形　七焰。閻彌迦馬形　八迦。迦彌尼蟒女形　九梨。梨婆堀狗形　十富。富多那猪形

五牟。牟致迦獼猴形

四阿。阿波悉摩羅野干形

三迦。鴛陀鳩摩羅天女形　栴。栴檀乾闥婆王　憾。四臂不動

二彌。彌迦王師子形　縛羅吽。大梵天王

(一)一彌。彌酬迦牛形

十五藍。藍婆地形　十四目。目佉曼荼燕狐形　十一曼。曼多羅提猫子形

道場觀　壇上に噁字あり、變じて七寶の宮殿となる、其の中央に唵字あり、變じて獨古杵となる、杵變じて四臂不動となる、青肉色にして前の二手は牙印に作り、次の二手は劒索を持して、盤石の上に坐せり、左に沒羅字あり、大梵王となる、寶鏡を持す、右に苦字あり乾闥婆となる、右手を以て膝を押し左手には縛曰羅戟を持す、利毛形なり、頂上に牛頭あり、耆年宿德の形なり、石上に坐して右足を垂れ、而も甲冑を着す、又た十五の種字或は吽字を通じ用ふ。あり、變じて十五鬼となり、各〻圍繞す云云

十一焰。焰摩羅天女形　十二遮。舍究尼烏形　十三揵。揵吒婆尼鷄形